

逆転世界で異能ヒーロー (♂)

wind

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔物から人々を守る異能一族に転生した主人公は、格好良いヒーロームーブと俺tueeを目指し、幼少期すべてを修業に費やした。

故に彼は気づかなかった。

この世界が、「戦士♀女性」の男女逆転世界だということに。

誤解と勘違いの中、アホな男が主人公イベントを求め全力で空回りするお話。

魔物娘も出るよ!!

※現在世界崩壊シナリオ進行中。

目次

彼は如何にしてマツハで師匠を裏切った	
か	1
神崎玄徳のやりたい俺Tueeshichu	
エーション第六位	13
逆転世界のハードボイルド	22
裏切り	40
強く当たって後は流れて	73
無実ではないランナウェイ	98
どきどき二人森キャンプ	116
木を隠すなら森の中、鳥を隠すなら鳥の中	139
次回予告と第一章終了の謝辞	161

元ネタ解説と設定集	172
自称：魔剣使い	185
飢える魔剣のオーバードース	214
他称：呪剣とその被害者	264
束の間のブレイクタイム	287
わりとよくあるガールミーツボーイ	308

彼は如何にしてマツハで師匠を裏切ったか

「…何のつもりだ？」

向かい合う師匠が問いかけてくる。

冷たい口調に反し、表情には戸惑いが濃く表れている。

無理もない。

師匠からすれば、あまりにも突然の裏切りだ。

俺は今、倒すべき魔物に背を向け、師匠の異能行使を妨害した。

そして、師匠に対し明らかな戦闘態勢をとっている。

俺だつてやりたくてこんな事してるわけじゃないが、致し方あるまい。

「彼女を傷つけさせる訳にはいかない…!!」

「え？今何が起こったんです？」

「何やってんだバカ弟子！」

かくして。

そもそも状況が分かってない彼女——魔物のため、困惑する師匠に挑むこととなった。

逆転世界で異能ヒーロー

彼は如何にしてマツハで師匠を裏切ったか

Vやねん!! 異世界(仮) 転生。

俺の15年の転生人生の感想だ。

実家が金持ちで、両親に愛され、親戚のおっちゃんにだって好かれて、才能に溢れる。

まあ代々の才能のおかげで一族に金があつて、そこを期待されてるわけだからしみもないわけじゃないが…。

それにしたつてイーजीモードな人生だ。

死んだときにあつたわけじゃあないが、神様が祝福を授けてくれたことは疑いようがない。

生まれた世界だって完璧だ。現代日本（多分）で、なおかつこの世界には異能がある。異能。

この世界では異能と総称される超能力があるのだ！

人知れず魔物と戦う異能力者がいて、しかも我が一族が日本の異能力者筆頭だ。ただ恵まれているだけじゃなく、スリルとロマンを兼ね備えた設定。実に素晴らしい。

俺は神に感謝した。今も良く神棚を拝む。

異能の存在を知って、そしてそれが自分にも使えると知った俺は歓喜した。そして修行にのめりこんだ。

だって自由自在に魔法が使えるようになったんだ、喜ぶし試してみたくなるだろう？ まあそんなノリで修業していたから、師匠になつてくれたじいちゃんを心配させる羽目になつてしまったが……。異能が強くなっていくのが楽しすぎて、義務教育すらろくに行かなかつたのはやりすぎたかも知れない。この高スペックな肉体と才能のおかげでドンドンと異能が強くなるものだから熱中してしまつたのだ。

じいちゃんや両親は俺が力を求めて暗黒面的なモノに堕ちたり情緒不安定になつたりすることを心配していたが、そこは転生者の面目躍如、年相応よりちよつと成熟したくらいに偽装した決意表明と学力の証明、一族の使命に対する熱意を語って事なきを得た。

実際、異能の才能がある者は魔物に狙われやすいという（おなじみの）設定があり、自衛ができるようになるまで隔離された修業場に行く事例は多いらしい。特別力の強い俺はその分強い魔物を引き寄せてしまうため、長く修業する大義名分もあったのだ。

そんな訳で15年間、ほぼ外界と隔離された山里で修業の日々だった。

しかしその間の俺は終止笑顔とワクワクでいっぱいだった。それは俺の異能が成長をし続けたからであり、十五歳から（つまりは今年からだ）高校入学と共に、街を守護して魔物と戦う守護役任命が内定していたからだ。

そう、高校生で、異能戦士である。

そう、高校生で！街を守るヒーローなのだ！！

転生前、夢想していたロマンがそこにはあった。

魔物も気兼ねなくぶっ飛ばせる自然発生的存在がほとんどらしく、カルマのバランスも良い。

完璧な状況だった。

しかも高校は地元で評判の優良校で、制服もデザイナーが作ったとかいう小洒落たもの。

素晴らしい。

街そのものも近年再開発されたとかで、自然と近未来感が合いまった良い景観だ。

この体は筋トレが早すぎてやや小さいものの、クール系イケメン細マツチヨのパーフエクトボディ。

守護役の上司もじいちゃんお墨付きのエース級とくれば、もはや勝利は約束されたも同然だ。

闇を駆ける高校生異能者。しかも名門一家のサラブレッド。

頼れる上司とコンビで街を守る、普段はクールなナイスルッキングガイの高校生だ。まさしく主人公な設定である。

輝かしい青春と俺T u e e eの日々が俺を待っている!!

この守護役内定を知って以来、被っていた猫もかなぐり捨てて、俺はさらに必死に修業を行った。脇目も振らず、修業し続けた。

すべて、すべては俺T u e e eのために。

そして、俺は成し遂げた。

独り暮らしに反対するじいちゃんの修行を、ゲロ吐きながら気合で乗り越えたのだ。

じいちゃんは修業時以外にはむしろ過保護なくらいで、ろくすっぽ実戦経験が積み重なったけど「まあ行けるやろ（慢心）俺、天才ですから！」なんて言っても許されるレベルで力を付けたのだ。

じいちゃんにも、同年代の「群青の美姫」だの「剣巫女」だのより強いとお墨付きをもらった。

こうして俺は胸を張って歩き出したのだ。

俺T u e eへの道を。

そして胸を躍らせて入学式の日を待ち、髪やらなんやらをバツチリキメて迎えたその日、新入生を見て、そしてその自己紹介を聞いて、大きな大きな違和感を覚えた。

そこで初めて気づいたのだ。

なんか前世と違うな、と。

予想外だった。

想定外だった。

というか想像だにしなかった。

修業時代——つまりこれまでの人生ほぼすべては修業場と山とじいちゃん家の往復しかしていかなかった。

だが着る服がユ○クロやしまむ○で、洗濯機がパナソニ○クで、独り暮らしを機に渡されたスマホは林檎だったのだ（微妙に古い型だった）。

完全に前世と同じ世界だと疑いもしなかった。

しかし……しかし。明らかに前世とは男子と女子のノリが違う。

男子は、なよなよしているというか、女子力の高いことを言っている。やたらしとやかだ。

女子は、豪放磊落というか、サバサバして気風がいい。元気っ娘いい……じゃなかった、男っばい。

ううむ……。

なんかクラスメートが想像と違うぞ。

まあそもそも異能という大きな差がある世界だ、他にも色々差があってもおかしくはない。

じいちゃん曰く、強い異能者には女性が多いという。

その影響なのか、軍人や警察など戦う系の職業は女性が主流だそうだ。

一緒に見ていた時代劇でも女性剣豪ものが多かった。

そんなわけで女性が勇ましいのは聞いていたが、男側もなんだか違うようだった。

意外と異世界間の文化の壁が厚い。

このままではクラスで浮いてしまうかもしれない。

うーむ…。

いきなりバラ色学園生活にもつまずいてしまったが、まあいいだろ。

俺は楽観的に考えることにした。

自己紹介を簡潔なものに変更し、ミステリアスキャラで行くこととした。

無口キャラでしばらくクラスを観察することにしたのだ。

そもそも、今世ではじいちゃん、両親、妹と親戚以外では十年近く前の小学校時代（それもすぐ辞めて修業に戻った）くらいしか人と話していないのだ。

そんな状況で自己紹介からクラスの人気ものを目指すのは土台無理がある。正しい自己認識も異能戦士には必要な技能なのだ。

部活だって、街の見回りがあるから参加は難しいだろう。

むしろちよつとくらい不良みたく思われたほうが動きやすいかもしれない。不良キアラが実は正義の味方だった、というのもギャップ狙いでいいのではないか？ 不良が猫助けるやつの究極系だ。よし。

寡黙なクラスメートが、実は町を守る戦士だった……！みたいな展開を目指す。

まあこの世界でそういう展開が王道として成立しているかは分からないが。

もしこれも成立してないとすると、本当に困る。

俺は十五年の修業の日々の中、常に格好いい異能ヒーロームーブに思いを馳せ続けてきたのだ。

人知れず悪と戦う俺。

クラスメートを颯爽と助ける俺。

孤独に街を悪から守り、クールな笑みを浮かべる俺。

そんな妄想をいつか実現できると知ったからこそ、高校生になる前に俺 t u e できるレベルになるため、ゲロ吐きながら修業したのだ。ロマンと妄想こそが俺の原点であり原動力だった。

しかしその前提は崩壊した。

こんなにも異世界人と俺で意識に差があるとは思わなかったよ…。

クラスメートの自己紹介を聞きながら、思う。

俺考案の「格好いいムーブ」は俺の知る常識とセオリーに則ったものだ。

この世界でも、そうしたセオリーが通じるかどうか確かめねばならない。

帰宅し、一度冷静に考える。異能ヒーローとしての初出勤まではまだ少し時間があつた。

机にしまい込んだ俺考案「格好いいシチュエーション」ノートを取り出し、読む。

何が問題となるのかを確かめねばならない。

修正し、改善していかねばならない。

如何にして格好いいムーブを貫き、俺 t u e e をするか。

それこそが、俺の最大の目的なのだから。

神崎玄徳のやりたい俺T u e e シチュエーション第六位

木勢^{きぜ}理^り亜^あは、やたらと監視カメラが多いアパートの前でため息をついた。

今日、彼女は部下となる守護役見習いを迎えに来たのだが…そのアパート「コーポ赤城」は昭和的な名前に反し、最新設備を完備した中々の高級物件であるようだった。

インターホンを押し、部屋番号で呼び出す。503。最上階だ。

驚くべきことに、郵便受けを見る限り四階以下と比べ五階の部屋数は半分しかない。外観上差異はなかったから、その分部屋が大きくなっているのだろう。

(こりや、あの噂は本当かね…。)

木勢は部下となる少年——神崎家の秘蔵っ子について、いくつかの噂を聞いていた。

その一つに、神崎玄山老師が可愛がついて、故に噂は流れど情報が出回らないようにしているのだ…などというものもあった。

老師の指導を受けたことのある木勢からすれば、あのおつかない老師が孫を可愛がる姿など想像も出来ないという他なく、ただの噂だと思っていた。

しかし、直接私なんかに頭を下げてまで孫の指導役になってほしいと頼み、独り暮らしのために高級物件を用意しているのを見ると、どうやら真実だったようだ。

(責任重大だな……)

正直、胃が痛い。大恩ある玄山老師の頼みでなければ間違ひなく断っていた。

そもそも根無し草の私が、名門中の名門である神崎家の人間に指導できることなどない。玄山老師の指導を受けたきっかけも、未熟故に自身の異能を持って余すなんて無様をしていたからだった。

老師曰く、そうした強大な異能の制御やバックファイアの対策に関しての指導を期待しているとのことだったが：同じく、箱入り息子ならぬ孫が都会や社会に出ても上手くやっっていけるようフォローしてやっってくれとも頼まれた。なんでも学校にすらろくに行かず、生まれてこの方修業三昧だったそうだ。修業場の外にもほとんど出歩かず、テレビだって老師と一緒に時代劇ばかり見ていて(孫と一緒にテレビを見る穏やかな老師など私には想像できない)電車に乗ったことすらない、などと言われたときは流石に冗談かと思った。

名門の子は苦勞しているのだなど不憫に思つて聞くと、修業三昧の日々は本人の希望

だと言うのだからなお驚く。

特に守護役について聞いてからには遮二無二修業に励み、玄山老師が修業を止めるほどだったという。あの厳しい玄山老師がである。

戦力としても既に申し分ないレベルであり、実戦の経験さえ積みあげれば一流を名乗れるほどだとか。孫であつても玄山老師が実力を見誤るとは思えない。本当に十五歳にして異能者として大成しつつあるのだろう。未恐ろしい話だ。

率直に言つて、そんな熱意に燃える天才少年と相性がいいタイプではないのだが、受けた依頼は果たすのが信条だ。

ならぬことをなさねばならぬのが社会人。

気合を入れて、ドアをノックする。

出てきた天才少年は、中々の美少年だった。こんな子を独り暮らしさせるとなれば、老師が心配するのも分かるかもしれない。

「初めまして、俺は神崎玄德。いつか、誰よりも強くなる男です。」

…中々、パンチのある第一声であった。

逆転世界で異能ヒーロー
神崎玄徳のやりたい俺T u e eシチュエーション第六位

魔物と異界。

それは有史以来様々な形で人類を脅かしてきた災害である。

異界とは異世界の影響に晒された空間であり、異界に汚染されたものが魔物となる。なんでもこの世界は様々な異世界と薄皮一枚隔てて接続しており、時折異世界のモノ・元素・果ては物理法則が滲んでくる。そしてそれに汚染された空間が異界となり、この世界でも異世界でもない亜空間へと変貌するのだとか。

そして亜空間——異界はほおっておくと肥大化し、現実を浸食する。

そうなる前に、異界に汚染された魔物と空間を破壊するのが、異能者の仕事だ。

魔物と異界は世界共通だが、それに対抗する術は世界中で色々と開発された。

今ではそれらは異能と総称される。

日本では我が神崎家の退魔術が主流だ。歴史も古いので、今は別流派でも源流を辿ると神崎に行き着く例も多いのだそうだ。

ザツクリ言うと、異界がダンジョンで、魔物がモンスター（まんまだ）で、魔物を残らずぶっ飛ばせば異界は消える。

シンプルな話だ。

そして魔物の見た目は、大分コミカルだ。

異界内部のモノが汚染されて魔物となるため、大抵は日用品の付喪神的なビジュアルとなるのだ。

「靈力弓、行きます!!」

木勢さんに一応の警告をし、近づいてくるポリバケツに短い手足の生えた魔物に半透明の矢を放つ。

矢の直撃とともに手足が消え、バケツは動かなくなつた。

俺と守護役上司の木勢さんは今、早速オフィスビルの一角に巣くつた小規模異界に来ている。

初陣とあつて緊張もしていた。

だが、俺t u e eを目指す身として上司に無様を見せることなどできはしない。

そのために万全の準備していたのだが：正直、拍子抜けである。

木勢さんは初実戦でビビらず動けていることを褒めてくれているが、こんな怖がれという方が無茶だ。

異界はわりと何でも浸食するので、海外では土葬墓がゾンビものめいた状況になることもあると聞くが、ここはただのオフィスビルの小規模異界である。

余裕だ。

：俺の中で悪い虫が蠢きだす。

これは、「アレ」のチャンスではないか？

無自覚系俺 t u e e 主人公がやる、アレの！

俺は魔物の気配を探る振りをしつつ、エーテルを練り上げ、霊力弓の準備を始める。魔物はこの世界の存在から逸脱しつつあるため物理攻撃が効きづらく、薄皮越しでも世界間を行き来できるエネルギー「エーテル」を利用した攻撃が望ましい。

この「エーテル」は割と色んなものに含まれているが、神崎流では肉体と精神からエーテルを発し攻撃する。

平たく言えば魔力や気みtainなものだ。

探知のためには多いエーテル量に木勢さんが気づくが、もう遅い。

「行きます!!」

もう一度警告しつつ、俺はビル異界の上の階、そしてその上の階、上の上の階、上の上の上の階、上の上の上の上の階、上の上の上の上の上の階まで含めて、都合ビル五階分の魔物を、ビルの天井ごとまとめて打ち抜いた。

異界の損傷は現実に反映されないからこそその荒業である。

重要なのは、必殺技っぽい叫びも構えもせず、なんてことないかのように連射することだ。

そして、魔物の全滅により消滅する異界の中、おもむろに木勢さんの方を向き、そして「アレ」をやる。

「木勢さん、異界討伐、終わりました。」

「……？俺、なんかやっちゃいました？」

そして渾身のキメ顔。

「神崎玄徳のやりたい俺T u e eシチュエーション」第六位が達成された瞬間だった。

もちろん、木勢さんには大分怒られた。

逆転世界のハードボイルド

「異界は現実の風景を元に行っているが、現実とは独立している。玄徳くんの言う通り異界を損傷させても現実に損傷は反映されない。」

「だが一部の異界以外では、この世界と同じ物理法則が適応される。今回は異界の消滅が間に合ったが、もし敵を撃ち漏らした場合、穴だらけになった天井が崩落してくるぞ。」

「…あまり褒められた戦法じゃないな。」

「反省します…。」

憧れのシチュエーションにテンションを上げていた俺は、木勢さんに怒られた。

まごうことなき正論である。

そもそもコレ、異界探索のチュートリアルみたいなのなので、一階から全部射抜くとか台無しもいいとこだ。

「だが…。」

？

「玄徳くんの探知と狙撃の正確さはよく分かった。」

「やるじゃないか。これから、頼りにさせてもらおうよ。」

「初陣祝いだ、今日は奢ろう。着いてきなさい。」

そういつて木勢さんは薄く笑い、帽子に手を置いて軽く直し、颯爽と歩いていく。

女性に言うのもなんだが、とてもハードボイルドな仕草だった。

格好いい…。

逆転世界のハードボイルド

木勢さんと二人、街を歩く。

異能者は数が少なく、本来市町村単位で常駐の守護役が置かれることは珍しい。

だがこの街——炬火市は行政により再開発が進められていることに加え、元々異界発生が多い地域であるため、木勢さんが六年前から守護役として異界を討伐している。

「こんにちは、木勢さん。いつもありがとうございます。」

「やあ、工藤さん。ま、これが私の仕事だからな。社長にもまた近々挨拶に行く、そのときはよろしく。」

「はい！伝えておきます。」

女性が声を掛けてきた。

上等なスーツ。磨かれた革靴。ヒールではない。

一目見て分かる、高い服装。金持ち、あるいは金持ち相手の商人。

「木勢さん、いつもお勤めご苦労さまです！」

「おう、坂崎。お前んとこの親分さん、元気か？なんでも手術したって聞いたが。」

「相変わらず、お耳の早い…。経過も順調でして、来週末には退院できるみたいです。」

「ならそれまでに見舞いの品を送っとくよ。よろしく伝えといてくれ。」

「こちらは…派手なネクタイ（こちらでは女性がネクタイを締めていることも多い。ついでにいうと、派手といっても木勢さんのスーツほどではない）、というか入れ墨が若干見えてる…。」

「どう見てもヤのつく自由業の方だ。」

「軍人や警官だけでなく、ヤクザ屋さんも女性がメインになっているらしい。」

「しかし…。木勢さんを見る。」

「ん？何だ？」

「…お知り合いが多いんですね。」

金持ちにもヤクザにも、こうまでガツチリ挨拶されるこの人は何者なんだろうか。ジョジョのキャラみたいなの派手スーツを着こなしている時点で只者ではないと思っていたが。

「ああ、あいつらはな、昔仕事で関わったことがあるのさ。」

「異界つてのは、マクロな偏り、例えばこの街に異界ができればやすかつたりすることはあるが、基本どこにでもできる。それが土地を扱う不動産業界の連中には悩みの種でね。よく頼られるんだ。」

「ある程度の規模か歴史がある不動産屋なら、異能者と仕事したことがあるヤツがいるものさ。そういうところなら、異能者を無下にはしない。私たち異能者に多額の寄付をしてきている。」

「ヤクザに関しても、ここのは地元の歴史ある組だし、そうでなくとも地上げや土地ころがしで関わることもある。奴らは自分に利益をもたらすヤツには甘いのだ。」

へー。

知られざる異能者業界の実像。

修行時代の訓練は異能技能訓練と今まで出現した魔物の情報収集、ついでにじいちゃんとの対人戦といった感じだったから、そういう業界事情みたいなものは何一つ知らないのだ。

ついでに彼女たちが挨拶してきた理由だけでなく、何故か俺をガン見してきた理由も聞きたかった。

さつきから女性に見つめられて心臓がドキドキするぜ。

…まあヤクザ屋さんの眼光に射抜かれてるせいなのだが。

「木勢さん、お疲れ様です！」

「「お疲れ様です！」」

いかつい女性たちの挨拶が断続的に続き、聞くタイミングを逸してしまう。

ハードボイルドな木勢さんへの気後れやヤクザ屋さんへのびりもあるが、そもそもこの体は口数が少なく、喋るのが苦手なのだ。

修行場には人も少なく、じいちゃんとは拳と拳で語り合う仲だったのだから無理から

ぬ話だ。そもそも会話経験が少ない。

でも寡黙な俺T u e eヒーローってのは悪くないぞ！と思っただけなので気にしてない。

その辺は俺T u e eのためのコラテラル・ダメージにすぎないのだ。

「さて、繁華街を通過して駅まで来てみたわけだが……。いろいろ、工事中の建物が多かつたろう？再開発で大型商業施設がいくつも建つんだ。そうすれば人の流れも、街の景色もまた変わる。この六年で、炬火市は様変わりしたし、これからも変わっていく。ここはそういう街なんだ。」

「できれば、玄徳くんもこの街を好きになってくれると、嬉しいよ。」

そういつて、木勢さんは笑う。

ううむ。

こうして目の前で年下を優しく気遣おうとする不器用ハードボイルドムーブをされると、饒舌なヒーローってのも悪くないように思える。

というか木勢さんは何なの？

叱つてからの包容力といい、格好いい仕事といい、余裕のある態度といい、こう不器用だからどうしていいか分からないけど優しくしたい、みたいなハードボイルドムーブといい、俺の心を掴んで離さないんだけど。

木勢さんを上司にしてくれたじいちゃんに、俺は深く感謝した。

俺は…ヒーロームーブの理想像を早くも見つけたのかもしれない。

目指せ、ハードボイルドだ。

木勢さんにはラーメンを奢ってもらうことになった。

何が食べたいか聞かれ、木勢さんが普段行く店が良いと答えたからだった。

木勢さんはお祝いなんだからもつとちゃんとした店が良いとか、ちよつとこつてりし

た店だからとか言っていたが、強引に押し通した。

じいちゃん家では、異能者は体が資本ということもあり美味しい飯がたくさん食べられたが、老年のじいちゃんに配慮されさっぱりした料理が主だった。時折前世を思い出しては、こつてりしたものを恋しく思っていた。

このチャンスを逃すわけにはいかない……!

そんな俺のラーメンへの情熱を感じ、木勢さんは折れてくれたのだ。

小汚い外見。

背脂の文字。

とんこつの看板。

想像以上に男らしい店構えだ。「らーめん豚」の暖簾。

心配する木勢さんをよそに、店へ入る

瞬間、突き刺さる視線。俺の外見はイケメンだがちびで、筋肉も外見上多くない。店の常連（女性が多い）にしてみれば、店にそぐわぬ珍客に見えたことだろう。

「何にしやしよう。」

店主——店構えに反し、身綺麗な迫力ある女性が静かに聞いてくる。常連たちのような隔意を感じぬ、あるいは感じさせぬプロの視線。

「玄德くん、ここ普通盛りでも多いから小盛りの方が良いよ。」

遅れて入った木勢さんに、常連たちの視線がずれる。

そして、驚く気配。木勢さんもまたこの店の常連であり、常連同士顔見知りでもあったのだろう。

違う意味合いの視線が俺を射抜く。

まただ。

：ハードボイルドな木勢さんが、俺みたいな学生を連れ回しているのが意外なのだろうか？

まあいい。

今大事なのはラーメンだ。

そして、木勢さんが俺をナメているということだ。

「とんこつラーメン普通盛りお願いします。」

「あいよ。」

「あつ…せめて、背脂は抜いてもらったら？」

「いいえ。背脂も含めて、ここのとんこつなんでしょう？それなら、入れてください。」

わざわざこつてり系の店に来た以上、覚悟はある。

言い切って、席に着く。

常連たちからの視線が途切れるのを感じる。少しは認めてもらえただろうか。

こうして炬火市に来てから一番の長文を喋った俺は、木勢さんと二人、カウンターに座ってラーメンを待った。

ラーメンは最高にうまかった。

だが十五年間さっぱり系で生きてきた体は背油を受け付けなかった！

「すみません、木勢さん…。」

「いいからいいから、その公園でちよつと休もう。」

気合でラーメンは完食したものの、なんか消化器系がヤバイ。

ぐるぐるとお腹がヤバイ音を鳴らす。

即座に異能を起動。

本来エーテルや異能を扱うのには高い集中状況が必要で、体調が悪いときには使用が難しい。

しかしじいちゃんと地獄の特訓を行った俺ならば、こうして起動した異能で体調を整えるという逆転的荒業も可能なのだ。

限りなく地味だが、神崎家のそこそこのレベルの奥義であり、俺の切り札の一つだった。

…こんな場面で木勢さんに知られたくはなかった…。

しかも木勢さんのリアクションも小さい。

普通に知ってるし、何なら自分もやれそうな態度だ。

悲しい…。

水でも買ってこよう、と木勢さんが自販機へと向かう。
いきなり上司にこんな迷惑かけて、申し訳ねえ…。

一人凹んでいると、背面のベンチに誰かが座る気配。

「大丈夫ですかい、兄ちゃん？」

「ええ、ご心配どうも。なんかおまたせしちゃったみたいですね。」

背後で、ほんの少しの驚く気配。よく抑えられているが、精神のゆらぎをエーテル経由で感知できる俺には無駄なことだ。

「らーめん豚の十分前から尾行していらっしやっただの、あなたでしょう？」

「ええ。よくおわかりで。」

女狐め。何がよくおわかりだ。二十分前から既に尾行していただろうに。

こいつは段階的に隠行を解き、俺を試してきたのだ。

ナメやがって。

だが手の内を明かし切るのもうまくない。

まあ最初の時点で気づいてたっぽい木勢さんが放置してたし、敵ではないんだろ
うが、警戒しなくて損はない。

「いやはや、そのお年で見事なもんです。秘蔵っ子の名は伊達じゃありませんねえ。玄山様が目をかけてらっしゃるといいうのも納得です。」

ブラフ。いや…？ゆらぎが極端に少ない。そもそも嘘に罪悪感とか覚えないタイプと見た。エーテル感情探知も万能ではなく、こういう詐欺や話術の上手い手合には効かないようだ。

どっちにしろ、相手の情報を確定させてやるような話はしない。煙に巻く。

「師匠には、良くしてもらってます。」

「師匠…玄山様ですね。なんでもこの十五年修行三昧だつ「いえ。」——はい？」

「木勢師匠のことです。じいちゃんの指導を恩に思ってください。面倒をみてくださることとなりました。」

この言い方なら、木勢師匠が自発的にやったこととも取れる。じいちゃんは名家の隠居だけあって政治力もあり、俺を可愛がってくれていることが広まるのは面倒を呼ぶ。ついでに言えば、こいつを驚かせたかった。

一瞬ゆれたエーテルを見る。目論見は成功だな。

ペットボトルが落ちる音。

木勢師匠が落としたのだ。話を聞いていたのだろう。

…想像以上に近い。

自販機前から木勢師匠のエーテルが消えたことには気づいていたが、この距離で俺の探知に引っかからない隠行とは。

むむむむむ。

じいちゃんのお墨付きは伊達ではないということか。

この実力とハードボイルドムーブの目標としての姿から、彼女を師匠と認めることに否やはない。

ぶっちゃけ言葉の綾だったが、師匠呼びに憧れもある。バカ弟子、とか言ってくれりとなお良し。

「師匠？わ、わたしがか？」

「木勢師匠。駄目ですか？」

「いや、駄目じゃあないが……。指導役ではあるし、間違ってもいないが……。」

駄目じゃない＝良い。

よし、言質はとった。

「ふふふ、あては外れましたが、面白いものが見れました。木勢さんが狼狽える姿が見れるとは。」

「なんだ、見世物じゃないぞ、まったく。帰れ帰れ！」

「あら怖い。では、退散します。神崎玄徳さん、また会いましょう？」

ベンチ越しに、ひらりと名刺を渡される。

コミカルなカラスのイラスト。

情報屋、「白いカラス」の文字。

えらくシンプルな名刺だ。

慌てて振り向くも、情報屋は既に席を立ち、そして夕闇に消えた。

高位の異能器グツズによる隠行、もしくは転移か加速。

そもそも背格好や年齢すら偽装しているようだった。

まったく、みんな気軽に俺の感知を振り切ってくれる。

その去りゆく長髪の背を、いつか捕まえてやると決意した。

その後、夜も遅いからと木勢さんは家まで俺を送ってくれた。

道中師匠と呼ぶたび、なんだか気恥ずかしそうにしている（年上に言うことじゃないが）可愛かった。

ギヤツプ萌えまで完備しているとは…。

裏切り

防衛機構（特撮）。

機甲戦士（特撮）。

魔装少年（アニメ）。

以上がこの世界における、ニチアサのラインナップである。
ライダーはない。

絶望した。

入学式の日、初陣の後。

帰ってみれば通販から、念願のノートPCが届いていた。

そして早速グーグルでこの世界のニチアサを検索した結果、ライダーが存在しないことが判明してしまった。

ガツデム。

ガツデム…。

ちなみに戦隊ヒーローも存在せず、○○機構シリーズがそのポジションにある。戦闘チームだけでなく、司令官や技術者も含んだ組織で敵と戦うシリーズで、戦闘要員の多くは女性だ。

機甲○○シリーズは、ライダーというよりメタルヒーローじみた特撮であったが、コンビか2+2の四人組が多く、バディもの・コンビものの要素が多いらしい。機甲アーマーが格好いいこともあり、女性主人公でも比較的抵抗なく見れた。主人公が苦しんだり曇ったりするシーンがちよつとえつち。

…俺の心が汚れているだけかもしれない。

そして、魔装少年。

これは魔法少女の類似概念だ。

この世界では、男が戦いや武道を好むことが少ないらしく、バトルヒーローの魔装少年はエポックメイキングな作品だったようだ。

ニチアサの魔装少年は健全で、線の細い少年たちの戦いと友情が描かれている。面白い。

『LimiterCut!』

「…斬る!ヴァニテイ・ザッパー!!」

『Fullcharge!』

「穿て!ヤツより早く!!」

今ちょうど、これまで冷笑系のキャラだった敵の鎧騎士が、プライドも技名もかなり捨てて主人公に挑むシーンを見ている。

去年やってたらしい魔装シリーズの名バトルシーンだ。

熱い必殺技の撃ち合い。

鎧騎士の執念は、声優の好演も相まってかなりの迫力だ。

だがカイトが持つ魔装「瑪瑙剣アルバレス」の出力の前に敗れ去る。

トレードマークの鎧を砕かれた騎士は、しかし笑っている。

彼の執念はカイトの魔装に、若干の損傷を与えていたのだ。

その結果に満足し、這々の体で撤退する騎士は、おかしなものを目にする。

倒れ伏す、宿敵の姿。

と、ここでタイトルコール。「瑪瑙魔装少年カイト」魔装、それは命蝕む魔剣！

そして次回予告…。

裏切り

面白かった。

世界は変わっても……こう……ニチアサは最高だな！

この「コーポ赤城」はネット回線備え付け物件だったので、最近では動画配信サービスでアニメや映画を見まくっている。

新しい作品が見れて実に新鮮な気分である。

映画は古典的名作からなから別物なので戸惑うことも多いが、文学や絵画では前世

で見たものもそれなりに存在するようだ。クラシック音楽なんかはほぼそのままだった。

この世界独特の傾向としては、男の股間を強調するカットが入ることだった。映画だところ、ちよいちよい際どいシーンがあつてゲンナリする。

特撮でも、安定して筋肉モリモリマツチョマンの変態もとい悪の幹部がいて、もつこり股間を強調したデザインのアーマーをつけるのだ。

なんなんだろう、あれ。

女性向けのサービスシーン、なのだろうか。セクハラにしかならない気がする…。

あと個人的に嬉しかったのは、女性上位系のエ□ゲが多いことだった。

男性向けエ□ゲの市場そのものはちよつぴり小さくなつてる印象だが、俺の性癖的には当たりが増えたくらいである。

じいちゃん家に居る間は、精力をエーテルに変換、性欲を消して活力に変えるとかいう中華仙人じみた生活を強いられたからな…。

修行の効率化に繋がるからとじいちゃんに頼んで教えてもらったのは俺なのだが。

まあおかずとか手に入る状況じゃなかったし。

仕方ないね。

師匠の前で無様を見せるわけにもいかないの、変換技能はまだ現役である。

あんな綺麗な人の前で、不意に大きくでもして失望の目を向けられたら、性癖が歪むもとい嫌われてしまう。

だがいつまでも続けるわけにもいかないだろう。

…というか年単位で発射していかないんだが、機能的に大丈夫だろうか。

ふ、不安になってきた。

学校生活も今のところ順調である。

順調に寡黙ミステリアスキャラだ。

誤算だったのは、体育の授業に参加しない——流石に学園側が、全身凶器とも言える異能者と学生と一緒に運動することに難色を示した——ため、病弱キャラまでついでしまったことだ。

田舎に住んできたことも話していたため、病弱少年が療養を乗り越えてやってきた、みたいな扱いを受けている。それはむしろ妹の状況なのだが。

この体の口下手さと話すスピードの遅さ故に、誤解は未だ解けていない。

だが学園の上の方にも話を通っているので、卒業単位やら欠席数も問題ない。逆にこのキャラ設定活かした方が異界討伐は捗るかもしれない。

捗るかもしれないが：俺は俺T u e eもバラ色学園生活も両立させたいのだ。

…！

キーン、キーンと、音がなる。
俺を戦いに呼ぶ音だ。

発信源は俺の林檎スマホ、そこに取り付けられた異能者向け雑貨、グッズ異能器の販売店から買ってきたスピーカーである。

機能は異能者にしか聞こえない音を出すこと。モスキート音みたいなものだ。

異界は突然発生する。故に装着していた異能器だが、まさか鳴るとは思わなかった。師匠なら俺など居なくても、事態を収拾できるからである。

緊急事態かもしれない。

異能を発動。

意図的に体の機能を乱し、顔色を悪くする。

ラーメン屋のときの奥義の逆用である。

ちよつとやりすぎると意識を失うので、加減が大事だ。

「先生、すみません……。おなかいたいです。」

「お、おう。保健室行って来い。」

やや棒読みだったが、教室からの脱出を認めてもらえた。

ゆつくりと教室を出て、即座に異能を発動。

体調を整え、隠行を実行。

迅速に下駄箱まで走る。

「ふふ」

思わず、笑いが漏れる。

これだ。

これこそが、俺が思い描いていた高校生異能ヒーローの姿である。

だが、これは妄想ではない。現実だ。

つまりは師匠を待たせるわけにはいかない。緊急事態なのだ。

ポケットからスマホを取り出しメッセージを確認。

集合場所へと、全力で走った。

集合場所には、カラフルなビツクスカーターに乗った木勢師匠が居た。
服装はまた別の派手スーツ。

色調を揃えれば、そのまま機構シリーズに出演できそうだ。

「推定だが、異界渡りが現れた。」

師匠は言う。

表情は固い。

ド級の緊急事態だった。

異界渡りとは、異界から異界へと移動する能力を持った魔物のことである。

特異な、あるいは成長しきった魔物が、異界渡りになると言われている。

異界渡りそのものの戦闘能力も問題だが、こいつには厄介な習性がある。

移動先の異界を拡大させるのだ。

強大な魔物の存在によって、異界が内部から風船のように膨らまされるのだとか。

しかも異界渡りの移動先には物理的な距離の制約しかない。

つまり近場ならばどんなに小さな異界だろうが移動でき、その異界は膨らむ。そして、現実が浸食される。

異界渡りがその気になれば、二時間で街一つを異界に沈めることができると言われて
いる。

そんな異界渡りによるものとみられる、異界の膨張が確認されたのだという。

やべえ。

「ああ、やばい。だが、私たちはまだ間に合う。膨張が確認されたのは48分前だ。

大至急、当該の異界を周囲の異界から孤立させ、異界渡りを撃破する必要がある。救援要請は送ったが、間に合わん。

私と、お前でやるんだ。」

「…はー！」

「よし。良い返事だ。

お前は西から、私は東から回りながら、周辺の異界を叩きつぶす。

異界渡りの逃げ場を先につぶす必要があるからな。

足はあるか？」

俺は足の異能器にかけていた隠行を解除する。

ローラースケートとキャタピラを悪魔合体させたような物体。

下駄箱に隠しておいた高速移動用異能器だ。

迅速に帰宅してアニメを見るために持ち込んでいたのが、意外な形で役に立った。

「あります！」

「よし、行け！」

異界の座標はスマホに送信済みだ。

こいつを使え！」

異能器を起動。

俺のエーテルをバカ食いしながら、ローラーが回る。

そして合わせて、渡された異能器——デコイユニットを起動する。

こいつは異能により物の外見認識をすり替えることができる装置だ。

めっちゃ高い。

しかもこれ、カタログで見た最新型だ。

…にしちゃあ使い込んだ形跡があるが…。

まあ何にせよありがたい。

隠行では姿を隠してしまうため、一般人とぶつからないよう、屋根の上など変なルートを通らざるを得ないのだ。

一般人からはビツクスカーターが白バイに見えるよう偽装し、師匠が走り去る。

俺も同じく白バイに偽装し、ローラーダッシュで道路を駆けた。

異界渡りの移動可能距離には大きく個体差があり、どこまで周りの異界をつぶせば良いのかは分からない。

増援を待たず、二人で攻める理由がそれだ。

だが、いきなり異界渡りの下に突っ込むわけにも行かない。

より近く・より大きな異界ほど、異界渡りは早く移動できるようであり、下手をする
と戦闘中に逃げられるのだ。

近くの異界を討伐し、木勢さんと合流できたのは、異界の膨張確認から二時間後だっ
た。

「ヤツは?!」

開口一番、異界渡りの所在を問う。

ヤツが移動しているとすると、このままいたちごとくこをする羽目になる。

「移動していない。」

五分休憩後、突入する。」

師匠の口数は少ない。

これが本気モードの師匠なのだろう。

凛々しい。

格好いい。

休憩と聞いたからか、どうでもいい考えが脳裏によぎる。

思考がそれていく。

突然の緊急事態は主人公ポイント高いけど、ほんとに心臓に悪いな……。とか。

師匠に挨拶していた女性たちの姿と、ラーメン豚の店主、クラスメートたちの顔が思い起こされる。

まだこの街に来て日は浅いが、命をかけるに値する街だと思う。とか。

そんなことを思った。

まったく、主人公も楽しやないぜ。

…言ってみたかった台詞を言うベストタイミングだったが、まだこれを言う気にはなれなかった。

異界渡りをぶつ殺してから言おう。

そう思うと、やる気が湧いてきた。

ぴったり五分後、水分補給を済ませた師匠が言う。

「乗れ。」

？

「俺たちはこれから異界に突っ込むのでは？」

異界の入り口はもう目の前だ。

倉庫街の中。

おそらくは廃倉庫。

まあ現役であっても、後始末のため廃倉庫にされるのだが。

「ああ、そうだ。

しつかり掴まれ。

…このまま突っ込むぞ！」

「うそだろおい。」

思わず素が出る。

アクセル全開。

猛スピードで、ビックスクーターが異界に突っ込む。

おもわず、師匠の体にしがみつく。

柔らかかった。

だが堪能している暇はない。

衝撃。

「うわぁお…。」

「運転に集中する、ナビゲートしてくれ。」

無茶仰る。

まあ俺なら可能なのだが。

探知の異能を起動、敵の位置を探る。

突っ込んだ先の異界は、廃倉庫を景観そのまま縮尺を変えるように引き延ばした、巨大な空間だった。

蟻になった気分だ。

巨大なカラーコーンの間を、ビックスクーターが走る。

急な異界膨張であるためか、魔物の密度も明らかに低い。

ルート次第では接敵せず、異界渡りの下まで行けそうだった。

「居るか？」

「異質なヤツが、います。」

「突っ込むぞ。」

ビックスクーターはスピードを上げ（今更だがスクーターの速度ではない）、廃倉庫を進む。

異界渡りの位置直前で、師匠はビツクスカーターを止めた。
ナツクルダスターを装着し、臨戦態勢。

俺も、靈力弓の準備をする。

靈力弓はその名の通り、靈力Ⅱエーテルで構成されている弓だ。
弦ではなく、エーテル形成の弓そのものがエーテルの加速器として機能し矢を撃ちだすため、片手で射撃できる。

事前に弓を入念に形成しておくことで、戦闘時には手早く形成したエーテル矢でも威力を出すことができるため、対応力と速射性に優れた武器だ。

右手の弓掛型異能器の補助を受け、そこから靈力の弓を形成しておく。

ついに、決戦が始ま「こんにちは。」「る？

「どうも、こんにちは。…言葉、通じてますよね？」

こうして、予想外の形で、異界渡りとの接触が始まった。

思考が高速で回る。

接近に気づかなかった。

気づけなかった。

師匠すら。

ピンチ。先手をとられた。

敵はこちらに話かけてきたのだ。

敵。

魔物。

異界渡り。

∴。

キエエエエエアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

「君が…異界渡りか？」

！

流石師匠！こんなときでも冷静！

…いや待て。

異界渡りとか人間の用語を、推定魔物の相手が知るわけがない。

「あ、通じてましたか。良かった良かった。

改めましてこんにちは。」

「はい、こんにちは。」

目を見て話しかけられたため、反射的に返事。師匠は警戒を続行中。

「それで、異界渡り、ですか。

こつちでは私みたいなの、そう呼ぶんですか？」

改めて、異界渡りの姿を見る。

…でかい翼。

全身に羽。

足先はかぎづめ。

だが脚そのものの形状は人寄り。

身長は長身の師匠並み。

くちばしは無い。

というか、人の顔だ。美人。

頭から、髪だけでなく、一部羽も生えている。

……フクロウ版ハーピー？

「いや、我々も君のような魔物は初めて見る。」

「あら、そうなんですか。」

理性的な口調。

暴れる気配なし。

…魔物が、人型になる事例は存在する。

それらが喋ることもまた、ある。だがそれはあくまで鳴き声の代わりに声帯が震えて
いるに過ぎない。

こんなしつかりとした会話をした魔物の事例は、存在しない。

仮にじいちゃんが把握していた場合、間違いなく俺に教え、対策を仕込んでいる。

そして日本異能者筆頭、神崎家の重鎮であるじいちゃんが把握していないということ
は、地球上で初めての事例であると考えてほぼ間違いない。

「君は、何者だ。」

「ふむん。哲学的な問いですね。」

会話は続く。

師匠は静かに、距離を詰める。

…警戒すべき点として、異界渡りの能力については既に確認した。

だがもう一つ、異界渡りには厄介な特性がある。

異界渡りが遠くの異界に行くための予備動作は、それぞれ固有のものなのだ。

今、異界渡りは師匠と会話している。

何か怪しい動きは見られない。

だが、今この瞬間にも移動のための準備が進んでいて。

その時間稼ぎのために話かけている可能性は否定できない。

だが彼女の瞳に、邪な光はなかった。

「できれば、君について2、3聞きたいことがあるのだが、答えてはくれないか？」

「私に答えられることでしたら、OKです。」

でも、その前に、あなた方の名前を教えてくださいませんか？」

そもそも、知性の有無と人間への敵対性の有無に、相関関係は存在しない。

彼女の知性が本物だろうが、人類の敵である可能性もある。

だが彼女の声には、親愛が滲んでいる。

「これは失礼、私は木勢。彼は神崎という。」

私の知る魔物は、人間からエーテルを奪うのだが、君もそうなのかね？」

「エーテルが精気のことを指してるなら、Yesよ。私も魔物だからね。」

でももちろん、無理くりやって傷つけるようなことはしないよ。」

エーテルを奪われた人間は、衰弱する。

精神や気力へのダメージが生じるのだ。

異界に巻き込まれた人間は、あの付喪神めいた魔物に襲われ、消耗し、意識を失い、やがて衰弱死する。

魔物はエーテルを必要とし、エーテルを求めて活動する。

そして同じ魔物のエーテルではそれを賄うことができない。

故に、魔物は積極的に異界への侵入者を襲うのだ。

彼女の知性が真実のものだったとしても、エーテルを求める以上、人類の敵になりうる。

まして異界をここまで膨らませる異界渡りが必要とするエーテル量など、想像も出来ない。

逃がせば、犠牲者が出る。

だが、彼女は理性的に会話している。

「次に、なぜここに来たのかね？」

「事故…みたいなものなのかしら。」

頑張って、これから帰り道をさがそうと思っているよ。」

師匠が異能を準備しているのが見える。

恐ろしいほど高位の隠行で、それを隠している。

異界渡りは気づいていない。

異能は第二階位、「縛鎖」。

ロープやワイヤーを操り、相手を縛る第一階位異能の「縛」と異なり、縛るロープ自体をエーテル形成するあの異能は、抜群の奇襲性を持つ攻性捕縛異能だ。

俺もじいちゃんによく使われた。

高速で飛来したロープが腕や体に張り付き、締まるロープで関節が極められる。

骨の一つや二つ、簡単に折れるだろう。

そもそも、師匠は異界渡りを殺すつもりでいる。確実に追撃するだろう。

異界渡りは気づいていない。

師匠が、また少し距離を詰める。

異界渡りは、気づいていない。

このままでは、彼女は、死ぬ。

「次に、」

師匠が問いかけ、いや、問いかける振りをして、「縛鎖」を起動する。

一瞬目が合ったときの、彼女の瞳を思い出す。

そこに、邪念はなかった。

親愛だけがあった。

そこに、守るべき人と同じものを見た。
俺は、それを、信じることにした。

かくして俺は、師匠を裏切ることにしたのである。

強く当たって後は流れで

前回のあらすじ。

「私は人を傷つけないよ！」

「ああ…最悪だ。」

今日という日を、俺はきつと後悔する！

今助けるぞ！」

「…どうして、私を信じてくれたの？」

「君の瞳に、嘘はないと思ったからだ。」

「逃がすか！」

ビーザワンツ！ビーザワーン！！

大体ビルド一話だった。

なお追跡者はガーディアンではなく、エボルフエーザーであるものとする。

「…何のつもりだ？」

向かい合う師匠が問いかけてくる。

冷たい口調に反し、表情には戸惑いが濃く表れている。

無理もない。

師匠からすれば、あまりにも突然の裏切りだ。

俺は今、倒すべき魔物に背を向け、師匠の異能行使を妨害した。

そして、師匠に対し明らかな戦闘態勢をとっている。

俺だつてやりたくてこんな事してるわけじゃないが、致し方あるまい。

「彼女を傷つけさせる訳にはいかない…!!」

どうにか声を絞り出して、師匠と向き合う。

師匠。木勢理亜。

二つ名は鬼人。蛇拳。その他、罵倒と擲撃が一通り。

幼い頃から戦い続けてきたベテラン異能者だ。

かつての師匠は自分の異能をコントロールしきれず、自分ごと敵を葬るような荒々しい戦法で戦っていたらしい。

じいちゃんの指導によりそれは改善されたが、その時期の不穏な二つ名が今でも現役なのだ。

あのじいちゃんが認めた、じいちゃんと同じバトルスタイル——拳闘士の異能者である。

エーテルによる肉体強化と体表硬化。異能者の基本中の基本を、誰よりも鍛えた者たちが拳闘士だ。

師匠は小洒落たナツクルダスターを装着しているが、あれはあくまで補助異能器で武器ではない。

実際に敵を砕くのは、エーテルで硬化した肉体か、肉体を薄く覆う半形成されたエーテルだ。

本来異能者同士の格闘戦は、エーテル形成の武器によるフェンシングのような一撃で決まる戦いとなる。

武器にするため意識的に形成・凝縮されたエーテルは、人体で循環するエーテルの濃度を凌駕する。

結果、エーテル武器に攻撃された場合、高濃度の他人のエーテルが体内に流入、体内エーテル循環が乱れ、一時的に異能が使えなくなる。

その対抗策になりうるからこそ、体調不良時の異能行使なんて地味なものが奥義扱いされているのだ。

だが、拳闘士は例外だ。

拳闘士は、敵や敵の武器と接触した瞬間、その部分の体表にエーテルを集中、硬質化

させることでこの原則を踏み越える。

瞬間的かつ連続的なエーテル集中。

マクロスを知っているなら、ピンポイントバリアを思い浮かべて欲しい。

超絶技巧というか、変態の所業だ。

エーテル形成の凝縮練度勝負、もしくは自身の凝縮したエーテルを、如何に相手がエーテルを凝縮していない部分に差し込むかという勝負になる異能者同士の戦いにおいて、無類の強さを持つ。

弱点は射程。

速度と硬度と濃度のために、拳闘士はエーテル形成を体表数ミリメートルに限定している。射程は通常の格闘技とほぼ同じだ。

故に最適解は遠距離から封殺し、敵のエーテルを削り殺すことなのだが…。

師匠との距離は畳一枚分。拳の間合い。

「縛鎖」のために距離を詰めていた師匠と異界渡りの間に割り込んだためだ。
近い。

さつき「縛鎖」の妨害が間に合ったのは奇跡に近い。

考えるより先に、体が勝手に動いた。

はは。

女の子を庇って、こんなことを思うとは、まるで主人公みたいだ。

念願叶ったシチュエーションなのに、どうしてか胃が痛い。

口の中が乾く。

冷や汗が噴き出る。

「え？今何が起こったんです？」

マジかよ。

背後の彼女は状況を把握できていないようだ。

後ろから撃たれない分まだマジかもしれないが、せめて逃げてくれないものか。

…いや、異界渡りが逃げるとか大惨事だ。

理想は、木勢師匠を可及的速やかにぶっ飛ばし、異界渡りの警戒を解き、交渉して情報収集、それを持って彼女の危険性の無さを確かめ、木勢師匠にもそれを認めてもらう

ことだ。

自分で言っというてなんだが、前提条件の難易度が高すぎる。

そもそも、格上の師匠を倒さねばならない。

口下手の身で、異界渡りに信用してもらわねばならない。

さらに情報収集で厄ネタが出てこないことを祈って。

それを裏切り&戦闘を行った後で、師匠に認めてもらう必要がある。

…無理では？

「何やってんだバカ弟子…！」

激おこ。

師匠は困惑から脱した。

もうちよつと、混乱していてくれないものか。切り替えが早すぎる。

まだ二本しか霊力弓の矢を形成出来ない。

霊力弓の矢も弓と同様エーテル形成であり、気合と時間をかけた分だけ威力が上がる。

さらには貫通力を上げたりホーミングさせたり分裂させたりと、様々な性質を持たせることも可能だ。

そうした取りうる選択肢の多さも、俺の強さなのだが…。

当然、この間合いでは活かしづらい。

やべえ。

勝てるビジョン、見えなくない…？

「縛鎖なんて要らないでしょう。彼女は理性的に会話してくれます。」

「…そうかもしれない。だが守護役の我々は、異界渡りの持つリスクを無視できない。

お前も分かっているはずだ。」

「それでも、俺は彼女を信じたい。

師匠だって、話していて彼女の気質は分かるでしょう？

俺は、彼女が傷つく姿を見たくないんですよ。」

交渉決裂。

臨戦態勢。

本能と理性が同時に、勝てない相手だ逃げろと叫ぶ。怖い。

じいちゃんとのトラウマのフラッシュバック。

命乞いをしたくなる。

だが。

女の子が後ろにいるのに、そんな真似はできない。

「意地があるんだ、男の子には……！」

眩き、弓に矢を番える。

勝ち目があるとすれば、短期決戦しかない。

切り札を切った。

強くあたって後は流れで

端的に言つて。

状況は玄徳が思うほど絶望的ではない。

鬼人キゼリア。

木勢はその二つ名ほど恐ろしい人間ではなく。

敵が傷つくの心配する、優しい少年の訴えを無碍にするような冷血女でもなかった。

彼女の勝利条件は一つ。

異界渡りの逃走阻止。

交渉するにしろ抹殺するにしろ、これは前提条件である。

故に木勢の、玄徳との戦闘においての最良は、速やかに玄徳を倒した後異界渡りを捕縛することであり。

次善は、異界渡りを警戒しながら戦闘を引き延ばし、増援到着まで時間を稼ぐことだ。

最悪は、玄徳と異界渡りが協力して逃走を図ることである。

魔物の味方をした、というのはどうしようもなく醜聞だ。

傷つけないが、玄徳自身のためにも出来れば増援到着前に決着をつけたい。

だが、異界渡りを逃がすわけにもいかない。

木勢は今、かなりギリギリのラインで手加減を模索していた。

彼女は神崎玄徳の戦力を高く評価し、警戒している。

初陣、そしてその後の異界討伐、そして今日の周辺異界の討伐速度。

そして、戦場の玄徳は常に俺 T u e e ムーブを目指しスタイリッシュに戦っている。

彼女はそれを、強者の余裕なのだと思っ取っていた。

そして自身の一撃が玄徳の切り札「ハイパー霊矢(仮)Ver9. . .」とぶつかり合ったとき、その評価はさらに上昇した。

木勢はその威力に合わせた手加減をした。

木勢はハイパー霊矢を凌ぎ、高速で踏み込む。

鉄拳が、霊力弓の下半分を一撃で叩き折った。

右頬をぶん殴られる。

矢を放つ。

回し蹴りの気配。

障壁を左手に展開し、ガード。

しかし蹴りはわけわからん軌道を描き、障壁を包み込むしなやかなものに変化。

障壁越しに衝撃が貫通。

押し出された左手で胸を強打。息が止まる。

矢を放つ。

ぼっこぼこである。

弓の照準をつける暇がない。

今射っている矢は、弓によって加速されていないものだ。

エーテル形成して撃ちだすだけなので、体のどこからでも発射できる。その分威力はお察しだ。

だが至近距離なら牽制くらいにはなる。

師匠の動きが速すぎてめくら撃ちしか出来ていないが、弾幕を張ってどうにか対抗している。

何なんだこの強さ…。

「悲報」 師匠が強すぎる件 「知ってた」

というか切り札が一瞬で弾かれたんですが…。

ちよつと難易度おかしくない？

負けイベントなの？

殴られながら現実逃避する。

弓を再形成する暇がない。

仕方ないので、残つた上半分のエーテルを再構成、硬度を上げて近接武器に加工する。

パンチ。

キック。

二発でブチ折られた。

ゴリラかな？

ふあつく。

女の子を庇っているのに、後ずさりなどできる訳もない。

さつきから同じ場所でぶん殴られ続けている。

距離さえ：距離さえあれば、拳闘士なんぞ！

負け惜しみを言おうとするも、顔をぶん殴られて中断させられる。

口内に血の味。舌を噛んだ。

変幻自在。

真正面からの奇襲。

どう攻めてくるのか分からない。

脚の軌道が読めない。

師匠の戦法は蛇拳と呼ばれる、特異なものだ。

血筋に因らず突然変異的に異能に目覚めた師匠の基本は、異能を前提とした神崎流ではなく、通常の拳法である。

中国拳法。

カポエラ。

ロシア空手。

それらを自身の異能で強引につなぎ合わせた異形の武術。

人呼んで邪道の拳。

そんな揶揄を実力でねじ伏せ、周囲に認めさせたからこそその蛇拳であり鬼人だ。

じいちゃんとの稽古を思い出す。

じいちゃんは膨大な知識と経験、そして勘により敵の行動の前兆を察知し、最速の鉄拳でそれ潰すという後の先の究極系のような戦法を取っていた。

同じ拳闘士でもタイプが違う。

しかしなすすべがないという意味では大差ない。

さつきからわけわからん技が矢継ぎ早に飛んでくるのだ。

太極拳の技とか知らないよ！

ロシア空手なんか怖いよ！殺意に溢れてるよ！

1981年政府により習得禁止令が出され、KGBと警察特殊部隊員しか練習を許されなかったという伝説の拳法だ。

嘘みたいな話だが、現実の話である。

鉄のカーテンの内側で、特異な進化を遂げたのだ。

なんでそんな技知ってるの…。

勝つためにはどうにか隙を見つけて大技を叩きこむ他ない。

俺は人間ダビスタを百年単位で続けてきた神崎家の人間なのだ。エーテル量自体は師匠よりも多い。

その出力差ぐらいしか、勝ち目はないだろう。

まあ隙とかないんですけどね。

ぶん殴られながらどうにか弾幕で時間稼ぎをしているが、技の継ぎ目が少ない上に、

そもそもどんな技が出てくるか分からない。

目の前で万国マイナー拳法見本市が開かれている気分だ。

それでもどうにかなっているのは、じいちゃんにもわからん殺しでぼこぼこにされていたからである。アドリブ対応力を鍛える、あの地獄の特訓がなければ即死だった。

多芸な武芸者って、敵に回すところまで厄介だったのか…。

師匠の体が沈み込む。

今度はどんなビックリドッキリ拳法が飛び出すのか。

死んだ目でそれを眺める。

…。

…。

…？

脳裏に閃き。

なんかこの技みたことあるぞ？

両手をつく。

重心を移動、片足を軸に。
師匠の綺麗な脚が加速する。

…あ！

これアレだ！

メイアルーアジコンパツソ！

メイアルーア・ジ・コンパツソだ！

その名はポルトガル語で「コンパスの半月」を意味する。
両手を地につけ片足を軸にした、カポエラの連続蹴りだ。

俺は、それを受け止め、勢いによって自分から吹っ飛んだ。

今まで動かなかった俺が離れることに、師匠が驚いているのが分かる。

俺は、念願の距離と師匠の隙を同時に手に入れた。

転生知識の勝利である。

思わずニヤリと口が半円を描く。

ウカツの代償を支払ってもらおう。

千載一遇のチャンス。ここで確実にブチのめす。

バチリと弓掛型異能器が異音を放つ。

異能行使補助の効果を持つ、金糸の刺繍が赤熱する。

俺はエーテル量にものを言わせ、無理くり高威力の矢を形成、強引に簡易形成の弓で連射する。

無理くり作った不安定な矢は、形成の瞬間から崩壊を始め、撃ちだす弓や俺の腕をも焼く。

だがその不安定さは防御のしづらさと同義であり、敵に着弾すると同時に破裂する。

矢を弾こうとした師匠が、爆圧で吹き飛ばされる。

矢を射続ける。

弓掛型異能器が赤熱し、その布が俺の血で染まる。

故に名付けて、

「紅蓮弓ッ！」

必殺技は、叫ぶものだ。

「木勢理亜の記録」

神崎玄徳の実力は、私、木勢理亜の予想を大きく上回っていた。

初陣であるはずの小規模異界は、わずか30分で討伐された。

その上、彼はそのまま次の異界に向かうこともできるとすら言っていた。

あれほどの出力の異能を行使し、息すら上がっていない。

流星にその日は帰らせたが、二日後の出動の様子を見る限り、本当に余裕があるようだった。

二つ目以降の異界の討伐は、その長大な射程と感知範囲によりほとんど射的のような有様だった。

試しに連続での異界討伐を試みたが、彼は何の問題もなくそれをこなした。困った。

本来であれば、小規模異界で異界探索に慣れ、中規模異界、大規模異界とランクアップしていくつもりであった。

しかし正直、小規模異界では只の作業にしかならないであろう。

彼がこの炉火市で活動を始めて十日。

既に小規模異界の討伐数は七を数えた。

P. S.

以上のように彼は戦力としては申し分ないが、懸念したようにいささか常識知らずの面が見られる。

初陣では、簡易な警告があつたとはいえ天井ごと敵を射抜いて私を驚かせた。

そして「何かやっちゃいました？」だ。

イケメンとはいえドヤ顔は腹が立つのだと初めて知った。

だが、得意げな顔を見せる程度には年相応な部分があるのだと微笑ましくも思う。

とはいえあまり褒められた行いでもない——特に玄山老師から、力をひけらかすような真似をしたら窘めてくれと頼まれていた——ため、注意することにした。

したのだが：私は独身の女で、彼は年ごろの男子である。

老師の依頼で頭がいっぱいだったが、冷静に考えれば私に年ごろの男子の扱いなど分かるわけがないのだ。

セクハラになつてもいけないし、そもそも初陣を終えたルーキーを叱りつけるような真似はしたくなかった。

そんな訳で上手いこと伝えられたる自信がなく、もので釣るような言い方になつてしまった。

しかも、連れて行ったのはここの女つばいラーメン屋である。

どう考えても、年ごろの男子向きの店ではない。実際体調を崩したようだった。

にもかかわらず、彼は私を嫌うどころか（私の勘違いでなければ）尊敬の目で見てくる。

なんでも老師が私のことを美化して伝えていたようで、大分慕ってくれているのだ。最近では師匠と呼んでくる。

そして、箱入りだったからかやたらと無防備だ。

戦闘中はともかく、道中やらアパートの玄関やらであまりにも振る舞いが心配になる。

あの日会った街の連中には「援助交際」だの「情夫を囲った」だの「光源氏」だの散々な言われようだった。

失礼な奴らである。白いカラスに噂の火消しを頼む羽目になった。

私は彼の祖父に見込まれ、信じられて孫息子を託されたのだ。そんな真似はしない。

…これからはし、師匠として、彼をしつかり導いていこうと思う。

…やっぱり師匠は気恥ずかしいな。

先生呼び辺りに変えてくれないだろうか。

……

……

……

……。

無実ではないランナウェイ

(追記)

読者の皆さまの評価と感想、そして応援のおかげで、9/26 21時からの日間ランキングにて、四位を獲得しました！
やったぜ。

記念の活動報告も書きました。

前回のあらすじ。

「まだわかっていないようだな。

いいか？ 守護役の私もお前も役職を拝命した時点でもう人間じゃないんだよ。

だから我々は使命に従うしかない。

それに、彼女が魔物である以上、遅かれ早かれ戦うことになる。

それとも、本気で誰も傷つけたくなくとも思っているのか？

だとしたら能天気にもほどがある。」

「お前が異界渡りを倒さないのは勝手だ。けどそうなった場合、誰が代わりに倒すと思う？」

「……………」

「私だ。」

喋る魔物を攻撃することに負い目があるんだろう。

だからお前は躊躇って、手を挙げるができない。

けど、今のお前が無理することはない。

そうなれば、私がああ異界渡りを攻めるだけだ。」

「お前は見ていてくれるだけいい！」

お前にも分かっているはずだ。これは、果たすべき義務だ。」

「それでも……！」

意地があるんだ、男の子には！」オーバーフローツ！

優しいエボルト　ゴリラフォームを倒した！

矢を射る。

射続ける。

血が吹き出る。

だが、まだ射続ける。

師匠への着弾は確認したが、あのゴリラを倒した確信が持てない。

じいちゃんは言っていた…。

水に落ちた犬は棒で叩け。

逃がすな。敵は潰しきれてな。

じいちゃんの薫陶は、俺の血肉となって息づいている。

吹き飛ばされた勢いそのまま、むしろ矢の反動で加速しつつ、空中で射続ける。着地のことなど考えない。

大抵のことは、敵を黙らせてから考えれば良いのだ。

このまま腕が焼きつくまで射続けてやるぜ。

しかし、突然の中断。

眼の前が何かに塞がれたのだ。

体がフワリとした何かに受け止められる。

既にあんまり感覚がないが、なんか右腕が持ち上げられてるっぽい。

「何だ………ひゃんッ。」

なんか女子みたいな悲鳴が出た。

弓掛は弓道用手袋みたいなものだが、全ての指を覆っている訳ではない。

その露出した指に、ヌメつとした感覚があった。

同時に、エーテルが吸い取られる。

何これ!?

恐怖体験!

慌てて、目の前の何かを払いのけようとする。

ふわふわした何か。

…羽?

「もう、駄目ですよ。

こんな風に自分の体を痛めつけちゃ。

怪我してますよ?」

俺は異界渡りに、受け止められていた。

フワリとした着地。

足が地面に着く。

だが、膝が折れてしまう。

立ってられない。

紅蓮弓の反動が、予想以上にひどい。

崩れ落ちる体が、異界渡りの左腕（左翼？）で抱き留められる。彼女は俺を抱き留め、俺の指先を舐めていた。

…何故？

「はい、じゃあ治しますよ。」

軽い一言。

同時に、俺の指がほのかに翡翠色に輝く。

!?

指先どころか、全身が輝きだした。

「…これはっ。」

「動かないでください。」

「今治しますので。」

はい。

かすかに拘束が強まる感触。

慌てて、身じろぎを止める。

俺は彼女のために戦ったが、それはあくまで勝手に行ったことだ。

俺は今、魔物に抱かれ生殺与奪権を握られた状態なのである。

そもそも師匠は彼女を攻撃しようとしていたのだし。

「はい、終わりました。」

「…んん？」

おかしい。

血の味がしない。

戦闘中に舌を噛んで以来、出血していたはずなのだが。

見ると、右手のやけどもほとんど治り、指先が自然に動く。

うっそだろおい。

この世界の回復異能は、もつと大がかりな準備と異能器、そして被験者の情報がある。

さつき会ったばかりの異界渡りが、俺のパーソナルデータを把握している訳がないのだ。

驚いていると、彼女は俺の右手の動作を確認。

添えていた右翼を降ろす。

すると視線を師匠が吹っ飛んでいった方向に向けた。

師匠は吹っ飛び、廃倉庫のダンボールの山に突っ込んでいた。中身は綿の類だったよ
うで、辺りにそれが散乱している。

もちろん、異界同様ダンボールも綿も引き延ばされた巨大なもので、師匠はどち
らかというとダンボールの中にシュートされた格好だ。

彼女の右翼がかすかに翡翠色に輝き、それをピシッと師匠の方に振った。

翡翠色の波がふよよと飛ぶ。

待て。

待て待て待て。

「……なにを。」

「あの方もケガしたかもしれませんし。治します。」

うっそだろおい。(二回目)

マジかよ。

怪我は治ったが、気力は回復していない。このまま第二ラウンドとか冗談じゃない。

そもそもあの師匠が、あんなんで重症を負うかよ！

アイツ爆風で吹っ飛ばされて、空中でバスケされながら全部の矢拳で受けとめてたんだぞ！

人間じゃねえ！

勝てるか！

縛鎖縛鎖縛鎖！

慌てて、縛鎖を連射。

師匠に当てるといいうより、師匠の入った段ボールを充填封鎖するぐらいの気持ちで連射しまくる。

やべえ。

超やべえ。

この際、四の五の言つてはいられない。

「一緒に逃げよう！」

「あら、情熱的。良いですよ。

でも…何処に行きます？」

それ俺に聞くの？

異界渡りは近くの異界にポンと飛べるんじゃないやなかつたの？

彼女は別の異界に飛ぶことができないらしい。

マジか。三回目の驚き。

そういえば、ここに来たのも事故とか言っていましたね。

はは。

ははは…。

どうしよう…。

致し方ない。

彼女に担いでもらいながら、師匠のビックスクーターの下まで行く。

恩を仇で返す感じで気は進まないのだが、刺さりっぱなしのエンジンキーを捻る。

『ERROR!!』

『番号認証か音声認識を行ってください』

試しに5889を入力してみる。
当然ダメ。入力がロックされた。

ふあつく。

キーを引き抜き、車体を蹴る。

キレたからではなく、固定された異能器のいくつかを拝借するためだ。
車体に傷がつくことは変わらないが…。

緊急事態故、仕方ない。

後で平謝りするしかない。

流星に一般人を巻き込むわけには行かないのだ。

奪い取った異能器——デコイユニットを調整しつつ、彼女に話しかける。

まずは、この異界を脱出しなければならぬ。

とりあえず、霊力弓を再構築した。

弓掛型異能器は既に壊れた。補助として機能していない。

なんだか、弓も微妙な出来。

「フクロウさん。これを。姿を隠してくれる道具です。

一旦分かれて、後で合流しましょう。」

「んー……。でも私、こつちのこと良く知らない。

できれば、一緒に行かない？」

言つて、彼女はふわりと羽ばたき、浮き上がる。

恐るべきことに、この距離でも飛行音を聞き取ることが出来ない。

彼女のかぎづめが、俺の肩をがっしりと掴む。

痛みはほぼない。

待つて。

まさかこのまま飛ぶつもり？

「じゃあ、飛びますよ。

案内、お願いします。

ふふふ、二人で空の旅ですね。」

楽しそうな声色。

恐怖の空の旅が始まる。

「まいったな。」

ダンボールの中、独りごちる。

木勢は今、玄徳がひたすら連射した縛鎖により拘束されていた。

油断したつもりはなかった。

あの、紅蓮弓にも最良の対応をしたはずだ。

…神崎玄徳は予想以上の実力を持つと、そう判断せざるを得ない。

「(できれば、まだ師匠としての威厳を保っておきたいのだが。)」

縛鎖の解除を試みる。

やたら硬い構成。

弾速も、やたらと速い。

ロープが締まる速度もだ。

正直、隠密性を重視した木勢の縛鎖とは比べ物にならない。

ここまで来ると、捕縛というより攻撃異能だった。

捕縛どころか怪我をする。

「懐かしいな…。玄山老師も、こんな縛鎖を使っていた。」

玄山老師は速さ至上主義者なので、神崎流の異能もガチガチにチューニングして使うのだ。

それを孫にも伝授したのだろう。

「(！)」

縛鎖を解こうともがいていると、異界が消える気配。

現実に押し戻された木勢を縛るロープも、エーテルが拡散していくことで消滅した。

捕縛されたままの木勢に配慮し、魔物に襲われないように玄徳が異界を討伐したのだ。

「つたく、こんな時にも他人の心配か…。」

苦笑し、立ち上がる。

戦闘時に吹き飛ばされた帽子を探さなければならぬ。

木勢は、戦闘後の玄徳と異界渡りの会話も聞いていた。なのであまり心配はしていない。

あの異界渡りが他の魔物と違うのも、確かなようだ。

だが魔物は魔物だ。

他の異能者は問答無用で討伐しようとするだろう。

まずは、援軍要請を取り消さねばならない。

そのためには、説得力のあるカバーストーリーが必要だ。玄徳がしばらく居なくなる理由も考えなければならぬ。

「…カラスを頼るか。」

また金が掛かるな。ため息をつく。

そして、足跡のつく倒れた愛車を見つけた。

木勢の愛車。

鳴坂研究所から借り物の、試作型超高級異能者用ビックスクーターである。

…と、ここでネタ晴らし。

実は縛鎖は相手に怪我させるような異能ではない。

玄徳の基準は、最強異能者じいちゃんなので、縛鎖もヤベー異能だと勘違いしていたのである。

「もう二度と、勘違いで師匠を襲ったりしないよ！」
ま、この作品は勘違いのものでもあるので多少はね？

どきどき二人森キャンプ

前回のあらすじ。

「(キーを回す音)」

「乗れるハズだ……。俺に！ライダーの資格があるなら！」 5・8・8・9, Enter !!

『ERROR!!』 ウワアアアアアアア——— !!

盗んだバイクで走りだせなかった！

二人のラブラブ不死人式空の旅。

フクロウさんととの空の旅は、意外なほど快適なものだった。

風のない異界内だけでなく、現実に戻ってきてからも非常に安定している。

風もエーテルで防いでいるので、体が冷えることもない。

フクロウさんの協力の下、高所から矢を撃ち下ろし魔物を殲滅、さくつと異界を討伐した俺たちは、全力で逃走を開始した。

ビッグスクーターを奪えなかったため、師匠が即座に追撃にくる恐れがあったためである。

怪我はフクロウさんが治してしまったのだし。（そもそも怪我したのかは疑わしい。）

俺は俺で、縛鎖で縛ったまま放置とかできるはずもなかった。普通に魔物がいる異界内なのだ。

兎にも角にも、フクロウさんから話を聞く時間を稼ぐ必要がある。

さっきの問答で出てきた、衝撃の情報。

「フクロウさんは自力で異界間移動が出来ない」

嘘を言っている可能性は低い。

なぜなら、今行っている逃走の成功確率もまた極めて低いからだ。異界間移動ならば、その確率は大きく上がる。

流石に目の前であままで戦ったら、フクロウさんも師匠のヤバさを理解してくれたことだろう。

わざわざ出来ることを出来ないと言う理由がない。

俺と師匠が戦っている間に逃げることも不可能ではなかっただろう。

俺なんていう荷物を抱えて飛ぶ必要もなかった。

自力で異界間移動が出来ないとすると、何故あの異界に移動できたのか。

フクロウさんは、「事故のようなもの」だと言っていた。

事故のようなもの。

曖昧な表現。いくらでも悪い予想が出来る。

異界渡りが何故異能者の最優先対応案件であるかと言えば、連続した異界の拡大を起こしうるからだ。

異界は拡大するとき、現実を浸食・参照し複雑化するとともに、人を巻き込む。

この前の小規模異界で例えてみよう。

あの異界は、オフィスビルのワンフロアを元に発生した。

あの異界が拡大する場合、そのワンフロアの上下の階や隣のビルの景色や物を参照し異界内にコピー、異界は大きく複雑になっていく。

その参照範囲に人や動物が居た場合、コピーされるのではなく、直接異界に引き込まれることがある。

エーテルを多量に含む存在を、内部へと引き込むのだ。

そして異界はこの世界と異世界たちの境目に生じたものだ。

異界があまりに大きくなったり、狭い範囲に集中して発生した場合、その境目が薄くなる。

そして、異界がより発生しやすくなる負のスパイラルに突入する。

異能者が異界渡りを恐れ、異界の拡大を警戒するのはそれが理由だ。

本来なら異界が拡大する前に潰したり、周囲から人を遠ざければいい。

また、魔物はエーテルを奪う精神ダメージ攻撃しか行わないため、救助が間に合うことが多い——これは異能者が魔物に負けた場合も同じだ。味方がフォローに入れば何とかなる。

だがそうしたセオリーは連続的かつ急激な異界の拡大では適応できない。

廃倉庫の異界は、元々の異界が引き延ばされた格好だったが、あの場合も先行して周囲の情報参照自体は行われている。あの後ゆっくりと参照した情報から異界は複雑化していくのだ。

当然、参照時に人が居れば異界に巻き込まれる。

そして、膨らんだ異界は単純に広く、一般人が脱出することが難しい。搜索も難航するだろう。

だからこそ、異界渡りも異界の拡大も恐れられているのだ。

つまるところ、フクロウさんの言う「事故」は安全保障上最大のリスクである。

是が非でも、真相を究明しなければならない。

こうなると、異界間移動の被害者がフクロウさんであったことは、まったく別の意味を持つ。

何せ、聞いたら答えてくれるのだ。
鳴き声しか上げない他のクソ魔物とは雲泥の差がある。

捕まえてインタビュー（意味深）などんでもない。

強化尋問では、嘘をいう確率が上がるとCIAも報告書で書いていた。

必要なのはVIP待遇である。

フクロウさんには機嫌よく情報を喋ってもらい、どうにか思い出してもらって、少しでも多くの情報を手に入れねばならない。

最悪の可能性もある。

異界渡り（真）が、フクロウさんを別の異界に弾き飛ばした可能性だ。

こうした事例は、極少数だが報告されている。

異界渡りの移動時や戦闘中、他の魔物が巻き込まれた事例だ。

巻き込まれた魔物分、移動先の異界がより拡張されたり、同時に複数の異界が拡大されたようだ。

その事例については、各国の異能者団体が様々な角度から、何十年も研究を行っている。

それは何故か。

それは、異界間移動は移動先の異界の膨張によってのみ、観測されるからである。異界渡りが意図的に魔物を撃ちだし、異界を膨張させるようになったとき。

その位置を特定する方法は、理論上存在しない。

ドゥームズ・デイ。

異能者すべてが危惧する、姿の見えない魔物による世界滅亡シナリオである。

俺はフクロウさんを、いくつもある炉火市の自然保護区の内一つに案内した。

そしてフクロウさんが飛びながら、体を休めるのに良い場所を見繕ってくれた。

…体の調子も、大分落ち着いた。問題なく着地。

「フクロウさ」「まずは体を休めてください。あんな無茶したんですから。」
「はい。ありがとうございます。」

素直に従う。

フクロウさんの機嫌を損ねてはならない。

俺の名誉も意思も、ここここに至っては捨てるべきものだ。

何よりも情報収集を重点。

人間性を捨てろ。

犬だ。

フクロウさんの犬になるのだ。

俺は木を背に、地面に座り込む。

改めて、右腕を見る。

弓掛の布部分は血で染まってる。金糸刺繍はほつれ見る影もない。

だが、怪我自体はすっかり治っている。指先も自由に動く。

うーん、不思議。

あの回復異能は何だったのか。

魔物の異能は、異能者とは術理が異なるのだろうか。あり得ない治療速度だった。

フクロウさんは今、俺を休ませるための場所を確保すると言い出し、飛び去って行った。

事情聴取がしなかったし、そうでなくても女の子働かせて自分は休んでるとか有り得ないので、遠慮し手伝いも申し出たのだが、断られてしまった。

実際森に慣れてる感じはあったし、一人の方が捗るのだろうが、俺の気持ちが収まらない。

だが今の俺は犬だ。大人しく待つべきだろう。

俺は犬…俺は犬…。

自己暗示をしていると、バツサバツサと羽ばたき音が聞こえる。
?

フクロウさんの飛行速度は速く、逃走時にはかなりの速度が出ていた。普通の鳥に見えるように異能器——デコイユニットで偽装していたが、逆に不自然だったかも知れない。

めっちゃ速かった。

そしてその上、あまり羽音がしなかったのである。

恐るべきことだ。フクロウっぽいのは見た目だけではないようだった。

そのフクロウさんが羽音を立てている。

「フクロウさんっ!?!」

「お待たせしました。」

ビツクリ。

目を疑う。

フクロウさんは大量の細木と枝をかぎ爪で掴んで運んできていた。

それをそつと、俺の近くに置く。

えっ。

なんであんな掴み方で枝が零れないんだ？

「というかペイロードおかしくない？」

疑問に思っていると、フクロウさん翼を振るのに合わせ、細木が浮き上がる。そして、ひとりでに巨大なキャンプファイヤーのように組みあがっていく。

そしてその間に枝が入っていく。

ツタの類がそれらを繋ぎ、固定。

超立派な人サイズの鳥の巣が完成した。

「すげー！」

「ふふ。まだ未完成ですので、もう少し待っててください。」

同時並行かつ超精密な異能行使だった。

俺ですら、やれと言われれば数時間必要だろう。

「すげえ！」

「超すげえ！」

飛び上がったフクロウさんは風を起こし、木々の葉っぱを落とす。それを地面に落ちる前に回収。

さらに空中で葉っぱを風で揉み、おそらくは異能により加熱。柔らかくして鳥の巣に入れた。

ビューティホー！

素晴らしい異能行使。

俺のテンションは上がりっぱなしだ。

フクロウさんは俺をひよいと持ち上げ、鳥の巣に乗せる。

俺は座敷犬のごとく大人しくして、抵抗しない。

柔らかい。

超快適。

キャンプどころか、一瞬で快適住空間が完成していた！

「フクロウさん！ありがとうございます！！」

「いえいえ。どういたしまして。」

もう、あんな無茶しちやいけませんよ。」

はい。

超高位異能の連続使用という、最高に良いものを見て上がったテンションを強制的に落ち着かせる。

そして思い出す。

…そうだ！

事情聴取だ！

「私、異世界から来ました。」

仲良くしてくださいね。」

「いちいち、よろしくお願ひします。」

フクロウさんは別の異界からではなく、世界の壁の向こう側、別世界から来たらしい。

勘弁してくれ。

嘘だろ。

これ以上厄ネタを持つてくるのは止めてくれ。

荒れ狂う感情をすべて飲み込み、話を聞く。

感情を殺せ。顔に出すな。

フクロウさんの話に、バイアスをかけてしまうような振る舞いも出来ない。

ただ相槌を打つ。

フクロウさんの話をただ聞き、ただ頷く。

…夢ならそろそろ覚めてくれないかな。

フクロウさんの話をまとめよう。

まず、何故フクロウさんがここが異世界だと分かったか。

それはフクロウさんも、こちらで言う異能者のように異世界を認識し研究していたからだ。

この世界と異なり、異界は発生していなかったようだが、また別の相互干渉はあった。その研究や論文を、フクロウさんは見たことがあったようだ。

会話については、テレパシー的なものを使用していたらしい。

異世界人にも関わらず、会話が成立したのはそのためだ。

相手の思考も浅く読めるのだとか。

木勢師匠と俺の思考についても浅く読み、双方から殺気を感じなかったため、俺による師匠裏切り時にはちよつと混乱していたのだそうだ。

「今何が起こったんです？」の発言は、俺の突然の裏切りへの疑問だった訳である。意外な経路からヤバイ情報。

もしかして：俺は勘違いで師匠を襲った説。

フクロウさんは、私が傷つかないよう気を使ってくれて嬉しかった、なんて言っているので無駄な行動ではなかった。

なかったが、しかし。

…。

奪ってきた異能器を見る。

も、申し訳ない…。

フクロウさんが分かりやすく答えてくれるので、事情聴取がサクサク進む。

異世界事情もかみ砕いて教えてくれるので、今明かされた衝撃の真実に動揺する身でも良く理解できた。

高いインテリジェンスを感じる…。

「だいたい分かりました。ご協力感謝します。」

「玄徳くんが聞き上手なので、つい説明が長くなりました。」

「質問も鋭い。優秀な生徒ですね。」

「ありがとうございます。フクロウさんはあちらではどのような職業だったのですか？」

「職業。ふむん、そうですね。近くの王国の方からは、森の賢者と呼ばれていましたね。」

それはフクロウの別名では？

というか、そろそろ名前を聞こう。

気が焦ってフクロウさん呼びでここまでできてしまった。

「名前ですか？王国の方には勲章と一緒に名前も色々もらったんですけどね。」

聞く限り、こっちの言葉とは発音や発声法が違います。」

「言えますか？と前置きされつつ、教えてもらった名前は、舌噛みそうなものだった。そして長い。」

というか、勲章と名誉称号って。

森の賢者（真）。

Vip待遇は間違つてなかつた。

「やつぱり、言いづらそうですね。

これまで通り、フクロウさんでいいですよ。

初めて異世界の方にもらつた名前です。大切にします。」

照れる。

とはいえ、フクロウそのままでも味気ない。

愛称として、ロウさんを提案。了承される。

「ロウ。ロウ、ですかね。ふふ。名前、ありがとうございます。」

「喜んでいただけると私も嬉しいです。」

最後の質問なのですが、ロウさんがこの世界に来たのは、事故なのですよね？」

「あ、いえ。」

「正確には、私が選ばれたのは事故と言いますか。こちらの世界の誰かに引き込まれました。」

術式構成的に、多分私の世界出身の誰かだと思えます。」

ドウムズデイ案件と他世界侵攻案件の複合。
やっぱり世界滅亡シナリオじゃないですかやだーッ！

もうやだ。

色々と分かったものの、知った情報が俺の手に負えるレベルではない。

もうこのまま師匠の下に自首しに行こう。

そう思い、ロウさんに提案してみるも、怪我してたんだから今日ぐらい休めと止めら

れる。

むう。

確かにこの鳥の巣は屋外とは思えぬほど快適だが、この情報は一刻も早く伝えねばならない。

だが、今の俺はロウさんの犬なのだ。

というか、多分未来永劫犬だ。

握ってる情報が重すぎる。さらに異世界知識、異世界異能知識で倍率ドンだ。

明日の朝一での自首に同意してもらえたこともあり、今日はこのまま休むことにする。

ロウさんは俺の食事を調達しようとしてくれたが、流石に遠慮した。そもそも一食抜いた程度でどうこうなるやわな鍛え方はしていない。

鍛えてますから！の一言で納得してもらった。

ロウさんも、一日ぐらいなら食事以外で代用できるのだとか。

なんとも摩訶不思議。異世界味のある回答だ。霞でも食べるのか。

そんな訳で就寝である。

疲れたしやることもないので寝るのだ。

「おやすみなさい。」

「はい、おやすみなさい。」

一緒に寝ましょう。」

きやあ、大胆。

ロウさんは、その両の翼で俺を抱きしめた。

正面から抱きしめられたので、かおがちようちかい。
えっ。

なにこれ。なにこれ!?

中華仙術を習っていて良かった。

この間合いはマズイ。

ぎゅんぎゅんと性欲がエーテルに変換されていくのが分かる。

頑張れ!

耐えろ!

「何って、羽がないと寒くはありませんか？

温めてあげます。」

言つて、ロウさんは俺ごとコロロンと寝転がる。

完全にそのまま寝る気だ。

俺を氣遣つてくれるなんて、ロウさんは優しいなあ。

異世界との文化の壁はかくも厚い。俺自身既に学校で実感したことだ。

…助けて。

なんか良いニオイがする。

温かい。

ロウさんの柔らかさを感じる。

ロウさんの羽に包まれている。

これは……………羽毛布団……………。

(☒ ω ☒) スヤア……………。

鳥の声で目覚めた。
がつつり寝坊した。
ロウさんはなんかツヤツヤしていた。

木を隠すなら森の中、鳥を隠すなら鳥の中

前回の三つの出来事！

一つ、玄德は人間性を捧げて、フクロウさんの犬になる誓約を結んだ！

二つ、世界文明崩壊シナリオの可能性が急浮上！なおこの世界にブーツを履き直す術はないぞ！

三つ、「信じて任された恩人の孫が、初対面の魔物のために人類を裏切って朝帰り！その上魔物の犬になったとか言い出すし、さらに愛の巣（物理）が見つかる！」そんな状況に陥った師匠の胃が死ぬ。

「おはようございます。夜は良く眠れましたか？」

「ハイ。オカゲサマデ、アタタカカツタデス。」

起き抜けに美人さんの顔を見て超ビックリした。

瞬時に目が覚め、反射的に返答。というか顔が近い！

思い出せ。えっと。

ここは森、俺は玄徳、目の前の美人さんはロウさん。よし。

…同時に師匠を裏切ったことも思い出し、少しブルー！

「それは良かった。体調も大丈夫みたいですわね。」

…言われてみれば、異能の過剰行使フィードバックダメージがほとんど消えている。

ロウさんの治療異能でも治りきらなかった気疲れのようなものが残っていたのだ。

「こんなに治療に時間がかかるなんて。もう二度と、あの技は使わないでください。」

「…もしや、一晩中治療を？」

「使わないでください。」

「あつはい。分かりました。」

どうやらあの羽毛布団には大きな意味があつたようだ。ロウさんには心配をかけてしまった。

精気吸収のついでだったから気にしなくていい、なんて言ってくれてはいるが、俺には分かる。

精気≡エーテル、みたいなことをロウさんは師匠との問答の中で言っていたし、紅蓮

弓直後に指（というか血だろう）を舐められたときも、瞬時にエーテルが抜き取られるような感覚があった。

そこから考えると、エーテル吸収自体はすぐ終わり、その後はずっと俺の治療をしていたのだろう。

「この精気？吸収が昨日仰っていた、食事の代わりなのですか？」

「はい。それに、どうもこの世界とは相性があまり良くないみたいです。

できれば、これから玄徳くんから時々吸わせてくれると嬉しいです。」

「もちろん大丈夫です。」

「ふふ。ありがとう！」

至近距離で笑顔を見ているためドキドキする。これが…恋…？

でも多分実際には本能的恐怖のドキドキ。

ロウさんの瞳は綺麗だけど何だか猛禽類らしい捕食者感があるのだ。怖い（小並感）。
とはいえ、そんな理由で恩人の頼みを拒否するほど恥知らずではない。

エーテルなら有り余ってるし。

ついでに、ロウさんから敬語を止めて欲しいとも頼まれた。

相手は異世界の名誉称号持ちVIPだし、それでなくとも恩人ではあったのだが、今の俺はロウさんの犬。

頼まれたら断れない。

まあそもそも美人の頼みを断る選択肢はない。了承。

要求が叶ってロウさんは嬉しい、美人の笑顔が見れて俺も嬉しい、WinWinだ。でも流石にそろそろ離れてくれて良いんですよ？

照れながら言うと、ロウさんはちよつと躊躇いつつ、俺を放してくれた。まだ俺の体調を心配してくれているのだろう。この恩はいつか返さねば。

さて、気を取り直して出頭準備である。

異能器——デコイユニットを取り出し、早速起動を……うん？

起動しない。

まいったな。バッテリー切れか？

パクってきた他の異能器からエーテルバッテリー——これは文字通りエーテルを溜め込みやすい物質・概ね宝石や貴金属類で構成されたエネルギー源だ。充填は専用のエーテル注入器を介した方が確実だが、無くてもなんとかなる——を取り出し交換できないか試みる。

カタログで見たうろ覚え知識で、異能器——デコイユニットを弄繰り回す。確か裏蓋を外せばM2エーテルバッテリーがあるはず。

ない。

代わりにそこには見慣れぬバッテリーっぽい物体があった。

試作型につき充電はスクーターに接続して！鳴坂。という走り書き付き。

試作型かあ……

そっかあ……

カタログに載ってた新製品なのに、使い込んだ形跡があった理由が分かった。

試作型。高そう。

だ、大丈夫かな。あのビッグスクーター、蹴つちやっただけ……

しかし異能器——デコイユニットが使えないとなると、非常に困る。

流石にロウさんが街中に出ればパニックは不可避だろう。見るからに魔物感あるし。

高高度を飛んで……いや、それで師匠の近くまで行くと迎撃される恐れがある。あれほどの異能者が自分の弱点を把握していないはずがない。奥の手の一つや二つや一打——スは持っているだろう。それが長射程攻撃である可能性は中々に高い。そもそも飛行すると遠くからも見える。ゆっくり歩いていくのが最良だ。

隠行：……うーん。ロウさんを見る。

視線に気づき、朗らかな笑顔を返してくれる。可愛い。じゃなかった、デカイ。かぎ爪分と羽の膨らみで、大分大きく見える。隠行では姿を隠せるものの、その分一般人を避けたルートに行く必要がある。相手は気づかないので、こちらから避ける必要があるのだ。このサイズ感だと大分ルートが限定されるな……。仮に異能器——デコイユニットが健在でも、擬態対象に工夫が必要となっただろう。

「むむ。私だって人間さんに変装することくらいできますよ。

見てみますか？」

「是非。」

ふよふよふよ、という形容しがたい音と共に、ロウさんの姿が変化する。

かぎ爪が変化し、前二本後ろ二本の爪がそれぞれ靴のように変化。身長が下がった。問題1クリア。

頭から生えていた、耳っぽい羽根が消え、頭は完全に人間と同じになった。問題2クリア。

翼の途中から人間の腕の二の腕から先が生えてきた。エーテル形成のマニピレーターって感じ。

なお翼そのものはそのまま。

ついでに全身の羽もそのまま。もこもこ。

うーん……クオリティ低いですね…。

「体だって縮みますよ。ほっ！」

「おおー！」

フクロウのシュツツと細くなるやつ！フクロウのシュツツと細くなるやつだ！すーっと、ロウさんの体が細くなる。

羽が寝て、膨らみがなくなると大分ロウさんのサイズが小さくなる。

…でもなんかぶるぶるしてない？大丈夫なのかこれ。

「どうですか。見事なものでしょう。」

「はい、お見事です。」

「ふふ。そうでしょうそうですね。」

「そういえば、師匠の下まで徒歩で向かおうと思っているのですが、ロウさんは長距離歩行大丈夫ですか？」

「ええ。歩くのは得意です。」

サクサクサクとロウさんが歩く。

森の中でも抜群の安定感。

でも案の定、細くなつてたサイズが歩く度に戻りつつある。
うーん…。不安しかない。困つたな。

「…何かお困りですか？」

「実は、昨日使った偽装装置が使えなくなつてしまいました。

どうしたものかと…。」

「昨日のあの術式でしたら、私再現できますよ?。」

マジっすか。

えっ、流石にジョークだね?

結論から言うと、完璧に再現していた。

異世界の技術を一回見ただけで覚えるとは、ロウさんのInt値はどれだけ高いの…。
怖…。

ロウさん印の偽装術式を起動して、低空飛行で市街地に接近する。

増援の異能者が居る可能性もあるので全力で警戒しているが、今のところその反応はなし。

無事に、ビル街の合間の路地裏に着地。

ここは近くにホームセンターがあり、変装用具の調達が容易だ。

一応制服の上を脱いでロウさんに預け、少し待っていてもらう。

非常用のクレジットカードで髪染め用品と作業着、変装用具に水と食料を購入。すぐに路地裏に戻る。

ロウさん印の偽装術式は影響範囲に問題があり、飛行中はともかく徒歩移動時には俺自身への変装が必要となった。ロウさん曰く、世界間の空間組成差異により、大規模異能行使が難しくなっているのだとか。人間や植物には差異が少ないため、昨日のような異能行使も可能だったようだが、ロウさんはなんだか不満げだった。

森の賢者の自負だろうか。

俺としては、異能器の完全上位互換にならず一安心である。

あまりに異世界異能が強すぎると、ドウムズデイ案件とは別個の厄ネタになりかねない。

ささつと菓子パンを胃に流し込み、髪染め用品を使う。脱色タイプではないが、元々が色素薄めの茶髪であるためそこそこ金髪っぽくなるだろう。

次いでズボンを作業着に履き替え、上着は腰に巻く。上半身は異能者向けのぴっちりとした戦闘用インナーを露出。これなら服で隠れていた筋肉が強調されて、印象が大きく変わるはずだ。即席の変装としては上出来だろう。

運動系バイト中のチャライ兄ちゃん風の変装だ。

趣味ではない服装だが、背に腹は代えられない。

路地裏から出ると俺に視線が集中する。

手に目立つ、色とりどりの大量の風船を持っているためだろう。訝しむような雰囲気。

だがロウさんの偽装形態を目にすれば、この視線も納得のものに変わるだろう。ロウさんを見たちびつ子が叫ぶ。

「酔いどれオウムだー！」

「あつ本当だ。酔いどれオウムだー！」

酔いどれオウム。それはこの炬火市の非公認ゆるキャラである。ロウさんは今、自身を着ぐるみに偽装していた。

サイズ感、手触り、歩き方。偽装術式や隠行でごまかせない全ての違和感を解消する、俺渾身の思い付きである。

酔いどれオウム。

見た目は可愛らしいデフォルメされたオウムだが、常に赤ら顔で酒瓶を身に着けている。

公式設定曰く、かつては勤勉で優しいオウムだったが、ある日泥酔し夢現の中この世の真理を垣間見て、それ以後何かを諦めた表情で常に酒を飲んで暮らしている。

口癖は「心配することはない。例え何があっても、全ては悪い夢のようなものさ……。」
収入源は泥酔後に目覚めた、超人的（鳥的）経済センスによるデイトレードだ。

師匠とのあいさつ回りの際、そんな解説と共にストラップを渡されたときは、発案者がハーブキメながら作ったんだらうなあとしか思わなかったが、恐るべき人気だ。

信じられない。

さつきからちびつ子（ほぼ全て女性）が大量に集まり、俺から風船を貰っていく。

ロウさんがちびつ子に蹴られたりしないよう、エスコートしながら歩いている為でもあるが、中々先に進めない。

というか人気凄すぎない？さつきから写真撮られまくってるんだけど。

多めに用意した風船がなくなりつつある。

「きやー！酔いどれオウムだー！」

「酔いどれオウムだー！」

「よい子の皆、ちよつと待っててね！風船を補充してくるよー！」

風船補充を口実に、俺を取り巻くちびつ子包围網から抜け出し移動する。

ロウさんを触るよりマシだが、俺の筋肉にびつたんびつたんタッチするのもやめて欲しい。

筋肉フェチか。

筋肉フェチなのか。

まあこの鍛え上げたパーフェクトボディの美しさに心惹かれるのは分らんでもない。でもその年代からその性癖なのはどうなの？

内心を悟らせぬ笑顔で風船を配っていく俺の心には、炬火市のちびつ子への将来的な不安が渦巻いていた。

ちなみに、大人の女性も結構沢山来ていた。

彼女達は風船よりも俺やロウさんとの写真撮影を希望したため、より時間がかかった。

その合間に、師匠との挨拶回りで出会ったヤクザ屋さんが人（多分俺）を探している場面にも出くわした。

増援の異能者も見当たらないし、異能者ではない人員で俺を探しているということ、師匠に強硬手段を採る気がないことを示している。

師匠にロウさんを傷つける気なかった説がほぼ確実になってきた。

ごめんね師匠…。

ついでにこの人ばかりを引き連れて事務所に行くことになったけど、それも許して欲しい。

振り切れないんだ…。

俺はちびっ子の夢を裏切れない…。

こうしてたつぷり一時間半かけて、師匠の事務所にたどり着いた。
ロウさんが着ぐるみ偽装を楽しんでいたのが、不幸中の幸いだった。

「何やってるんだお前は…。」

「申し訳ないです…。」

師匠は普通に俺たちを受け入れてくれた。

ひたすら平謝り。

師匠はヤクザ屋さん経由で、変装して風船配ってる俺の写真すら入手していた。

呑気に俺とのツーショット写真を求めてきたので、完全に騙せていると思ったのに。

見抜かれていた…！

変装についても、お説教を受ける。

い。こんこんと注意を受けるが、裏切りや紅蓮弓しこたま撃ち込んだことへの恨み節はない。

むしろ節々に俺への心配を感じる…。ありがたみ…。

ロウさんについては要経過観察としつつも、拘束しないでいてくれる。

だが俺はドゥームズデイ案件について、師匠に説明しなければならぬ。

こんなに優しい人に、あんな厄ネタを報告するのは心苦しいが致し方ない。

致し方ないことなのだ…。

すまない、本当にすまない。

世界を守るためには時に非情な判断も必要になるのだ…。

「……………報告は、以上です。」

私見ですが、世界文明崩壊シナリオに発展しうる問題だと判断しています。」

「そうか。そうだな。」

ドゥームズデイ、か。まさかこの街でなあ…。」

「えつと…大丈夫ですか？」

「ああ。大丈夫だ。ありがとう魔物さん…。」

師匠がFXで全財産溶かした顔になってる…。

「はい、もしもし。」

やはりそうですか。

いえ、追加調査は結構。」

「ここから先は、私自身の目で確かめてみます。」

神崎玄徳。

神崎家の秘蔵っ子。

神崎玄山の指導を15年受け続けたとされる、期待の新星。

これまで極端に情報の少なかつた彼は、守護役に任命されて二週間で異界渡りを撃破するという、華々しいデビューを飾った。

鬼人キゼリアとの協働戦果とはいえ、その輝きが翳ることはない。

戦闘で疲弊し、数日表に出られなかつたというくらいだから、只見ていた訳でもないのだろう。

期待の新星の期待以上の働きに、異能者界限は盛り上がっている。

だが。

だが、あの日救援要請を受けた異能者の一人、剣巫女と呼ばれる彼女は、あの日の鬼人からの連絡に違和感を覚えていた。

探ってみれば、案の定情報操作の気配。

あの鬼人は、こういつた小細工を好まない者だと聞いている。

ならば、候補はもう一人しか居ない。

神崎玄徳。

「いけないなあ…。そういうズルは。」

化けの皮を剥がしてやる。彼女は決意し、炉火市へと向かった。

露骨な二号ライダー登場フラグ！これにて、第1章終了です。

第2章第1話、「自称魔剣使い」は明々後日です。

明日は第1章終了の謝辞と設定集を投げます。

ジオウ前にこの話が投稿出来て良かった！セーフ！

ちなみにここは逆転世界なので、玄徳の薄着はバニーガールに匹敵する蛮行です。

そりや人も集まるし師匠もお説教します。

でも玄德は「もっとクオリティ高い変装にしろってことだな！」と受け止めました。
グ
デイスコミュニケーション！

次回予告と第一章終了の謝辞

第八話「木を隠すなら森の中、鳥を隠すなら鳥の中」で第一章は終了し、第九話「自称魔剣使い」から先は第二章となります。ここらで今後の予告をしておきます。

予告！

第一章。

登場、バカと師匠とフクロウさん！

素晴らしき日々の始まり！

『キックスタート・ア・ワンダフル・デイ』

第二章。

二号ライダー系異能者ヒロイン&巻き込まれ主人公系クラスメートヒロイン！

嵐の前の、耐えがたいほど平穏な日々！

『アンベアラバル・ピースフル・デイズ』

第三章。

「データ編集済み」ヒロインと「データ編集済み」ヒロインと共に、黒幕の計画を追え

！

探して見つけてぶっ潰せ！

『エクスプロール、サーチ、アンド・デストロイ！』

第四章。

ついに現れた黒幕とその配下！

世界を書き換えるプロジェクトバベルを阻止できるのか!?

悪魔の科学者の前に、今四人の異能者たちが立ちふさがる！

『ブレイクダウン・ザ・ドゥームズデイ・デイヴァイス』

本作は以上の4クールで1シーズンの構成です。話数は一定ではありません。

プロットは割とガツチリ作ったので、頑張つて最後まで書きます。

多分終わつたらシーズン2が始まります。

プロットを整理したところ、元病弱ブラコン系ヒロイン妹ちゃんの出番が消滅したためです。

主人公の両親の話もシーズン2です。

シーズンが進むと主人公の家族関係が盛られていく海外ドラマリスpektですな。

謝辞。

ありがたいことに、本作は本当にたくさんの方に読んでいただくことが出来ました。一章終了の10/5 正午の時点で、UAは54,078、お気に入りには2,346件です。

閲覧ありがとうございます。

これだけ多くの人に作品を見て頂けたことを嬉しく思います。

この作品の原点は、満たされない自分の需要をDIYで満たすことにありました。

なので作品を読んでもらったり評価していただけたらすると、同好の士を見つけた気分です。

本当に魔物娘ものには流行ってほしい。

クロビネガ氏や眼鏡猫熊様の作品を布教したい。

そんな精神で作品を膨らませ、こうして一章終了までたどり着くことが出来ました。

今後も読者たちを一人でも多く魔物娘沼・クール系お姉さん沼に引き込むべく、更新を続けていきます。

何より先に読者様に伝えたいのは、自分の書いた小説に感想やリアクションを貰える
と超嬉しいということですよ。

多分読者の皆様が思っているより3倍は嬉しいです。

私の作品に限らず、統計的にU・A・お気に入りと比べ、感想を書いてくださる方って
少ないんですよ。

大変ありがたい…。

多少お時間は頂くかもしれませんが、全部返信します。

作者は作品への反応に飢えてる生き物ですので、低い評価点でも一言の感想や苦言で
も、無反応より嬉しいですよ。

特に感想は、作者の活力になります。

作品への感想がこんなにも嬉しいものなのだ、私は貰って初めて知りました。

本当になんでもいいですよ。

一言でも、自分の性癖をぶちまけても。

自分の性癖をぶちまけても。(念押し)

また、非ログインユーザの方からも結構感想を貰います。

これも全て返信しています。

多分非ログインユーザだと返信通知が行かないと思うので、ここでお知らせしておきます。

誤字報告も三人の方から受け取りました！

これはいっぱい貰っちゃダメなヤツですね！気を付けます。

ビックスクーターではなくビッグスクーターだったんですね。指摘されて知りませんでした。

神崎2様、五武蓮様、黒杜 響様、ありがとうございます！

苦言やご指摘も、ありがたく受け取っています。

こういった感想を書いてくださる方って、本当に貴重なんです。

ご指摘下さった方に引つ掛かる部分があったということは、恐らく他の多くの読者様もその部分を気にしていたことでしょう。ですが彼らはそれを気にしながら、しかし無言で去っていききました。

私は苦言やご指摘の感想を書いてくださる方のお力で初めて、それに気づき改善のチャンスを得ることができのです。

魔物娘の布教を目指す身としては、性的嗜好以外の要因で読者様を逃がしたくありません。

これからも精進と更新をつづけ、一人でも多く魔物娘沼に引き込むべく頑張ります。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

50件もの感想、ありがとうございます！

今後とも、本作をよろしくお願いします！

そして、本作に評価を付けてくださった95人の読者様！

スゴイ沢山の評価がいただきました！ありがとうございます！

9 / 27 の日間ランキングで二位、日間加点式で一位を頂けたのは、あなた方のおかげです！

さらにたった10票しかない評価10を本作に使ってくれた方が16人も居ました。本当に嬉しい！

AIBO77様、3901様、gumapyon様、tamamo様、モッテイ様、ハムハム様、貧乳PT様、西のひと様、ヤンデレ住人様、人間廻答様、見習い様、murasakigumo様、筵 水月様、アフォ様、だいたい四人の公王様、ヨグルトソース様！

この期待を裏切らないよう、頑張ります！

そして評価9も50人いらっしゃいました！50人ですよ50人！

時雨 洗聖様、ヌネス様、PONGUMA様、寝てはいけない様、形見 駄犬様、ジャキーを貪り喰らう者様、長手袋様、アサルトゲーマー様、ヤママト様、けらりあ様、エーテルはりねずみ様、じよにーとーれ様、さんらいん様、伊予二名様、Komimi様、ジヨナサン・バースト様、カツ井君様、苔むしたロボット様、の氏様、とりにく@胸ササミ様、I-ito様、NKVD様、アーガー様、ブバル様、時波様、安眠まくら様、さ

ばんなばなな様、yumeinu様、DHC147様、まぼ725様、まるぼろー様、いーちやん改様、銀髪モグモグ様、鶏3263様、ピユアウオーター様、屈曲粘体様、鰻重特盛様、傷心ズバツト様、スライム。様、no money様、あすたら様、ただの案山子様、拙低虫様、あいうえおか@様、パシフィック様、浅笹定様、桜 テス様、風邪★様、餡御萩様！

高評価ありがとうございます！広まれ魔物娘！

評価8・7は合わせて17人！

エルハルス様、satotaku様、カモシカ様、ぼろにえーぜ様、ぼちはな様、らなはんさ様、土蜘蛛様、ゆう様、幾年様！

そして台風ン様、りうまえ様、オチャキ様、甚兵衛様、必殺うぐいす餅様、磁区様、くろぬこ様！

高評価ありがとうございます！途中で評価を上げてくださった方もいました、そういうの超嬉しい！

評価6・5・4はそれぞれ2・3・2人！

ティミツド様、Emily様！セイジ様、Virgoshah様、l1l1様！Dith

er様、三途リバー様！

ありがとうございます！

評価3・2・1も5人の方から頂きました！ありがとうございます。

これからも精進し作品を改善します！

10/5、1/10の全ての段階の評価を獲得しました！（トロフィー取得音）

あと評価1も獲得しました！（ゴールドトロフィー取得音）

評価1を入れた方の内の一人は、大変多くの作品に評価をつけている方でした。

やや辛口ではあるものの、高評価も多くつけています。

つまり、問答無用の低評価爆撃ではなかった！

私の技量による魔物娘布教の失敗！クヤシイ！

繰り返しになりますが、本作の主目的は魔物娘や魔物娘系作品の布教です。

ハーメルンに魔物娘ものの嵐が吹き荒れるまで、更新を続けます。

是非読者の皆様にも魔物娘を好きになってほしいし、魔物娘ものの作品に手を出してみたいです。

作者プロフィールにオススメも書いておきました。

魔物娘流行れ！

流行ってくれ！

そんな作者と本作ですが、これからもよろしくお願ひします。
これからも概ね三日に一回の投稿ペースで更新していきます。

元ネタ解説と設定集

1、本作の元ネタについて

本作の発想元に「クロビネガ」様のイラストがあることはタグなどで示していますが、タイトルにも明確な元ネタが存在します。

眼鏡猫熊様の作品、『貞操観念逆転世界で陵辱ヒロイン(♂)やっています。』(R-18)です。

お分かり頂けるでしょうか。

丸パクリです。

快く許して下さいました眼鏡猫熊様には感謝しかありません。

「ローマの休日」に対する

「ローマ法王の休日」みたいなもので、タイトル以外に類似性は多くありません。

ですが眼鏡猫熊様の作品はとても良いものであり、本作の発想元の一つにもなっていることから、このようなパロディタイトルとなっています。

皆も読もう！

ついでに本作はギャルゲめいた要素もあります。

読んでく中で、この辺でルート分岐するだろうなあ…とか想像するのも楽しいかもしれません。

例示すると「裏切り」辺りで特殊フラグを踏んだ場合、ロウさんとくんずほぐれつー昼夜からの

指名手配されながら人知れず世界を壊す黒幕を追う、孤独な第三勢力系仮面ヒーロー化ルートが存在しました。

フクロウ仮面が闇夜を駆ける！

2、世界観について

本作は貞操逆転世界であり、概ね男女の概念がひっくり返っています。

男女の筋力差もほぼ消滅しています。

世界の齟齬は段階的に作中で描写していきますが、異能者の男はそこそこ少なく、異

能や戦闘が好きなのはもつと少ない世界観です。

多くの男性は娯楽やアニメにおいてもゆるいものを好み、俺Tueeを目指すタタカイダイスキ主人公は異端もいいところです。

そのため玄德は、名家に生まれたから嫌々戦っているんだね…不憫…みたいに思われることも多いです。

逆転世界的には、姫騎士とか女英雄的な宿命に縛られてる系ヒロインに見做されません。

「この子は一族の宿命のため、戦い続ける定めなのか…」みたいな。

実際にはノリノリなので、「君はもう戦わなくていいんだ！」とか言うとかム着火インフェルノでデュエルを仕掛けてきますけどね！

他にも男女逆転による余波は様々存在し、価値観も色々変わってます。

玄德も、異能者や戦士系の職業に女性が多いことには気づいていますが「ラノベでよくあるやつだろ？知ってる知ってる。」くらいで流しています。

男女観念がまるっと逆転していることに気づいていません。

価値観ってあやふやですし、地域や業界で差異があります。

前世にない、特異な異能者業界で生きていく玄德は「この業界はこんな感じなんだな」で思考を止めているので、感じた違和感を全体化しないのです。

アニメや娯楽についても、「古来から世界は異能者の影響を受け続けていた！異能者のいない世界を知る俺だけが、その影響に気づけたんだ！」みたいな陰謀論者の受け取り方をしているので、全部異能者のせいだと考えています。

また貞操逆転でひっくり返ってるだけで、本作は割と王道を心掛けています。箱入り娘特有の無自覚色仕掛けムーブ！とかですな。

3、異能について

玄徳に何が出来るとか分かりづらいという感想をいただいたので、ここでまとめておきます。

ちなみにわかりづらさの原因は玄徳の万能性にあります。

コイツ練度の差はあれ、異能で出来ることは大抵出来るんですよ。主人公に有るまじき形質！異能マニアが15年修行してるので知識も豊富です。

異能は、割とそこら中にあるエネルギー「エーテル」を扱う技術です。人間の場合、精神と深く関わっていて、魔力とかマナ（オド）みたいなものですな。

異能者はエーテルを撃ち出したり、固めて武器にしたりして戦います。矢と弓ですね。爆発させたり遠くから操作したり、融通も効きます。ですがあくまでエーテルで作ったものを動かしています。物を動かす場合、サイコキネシスではなく、エーテル形成した何かを介して動かすわけですね。ジョジョのスタンドみたいなイメージ。体表硬化もこの一環です。

また人体にもエーテルが流れているので、それに干渉することにより身体強化が可能です。人によっては感覚強化も。内臓の働きを強化したり調節することで、強制的に自身の体調もコントロールできます。

そして玄徳はエーテルの流れが良く見えるので、生物や物から漏れ出すエーテルでレーダー的探知が出来たり、強い感情によるエーテルの乱れも感知出来るのです。遠距離から魔物の位置を見抜くためです。異界ダンジョン探索の否定！

「異能」という名称は、異能者業界が国際的に決めた「エーテルを扱い魔物と戦うための技術」の総称です。

古来から異界と魔物は存在し、人類はそれらと戦い続けてきたので、一口に異能と言っても様々な技術や武術がそこには含まれています。

でも法整備上総称が必要とされました。その総称の日本語訳が異能です。

「エーテル」という名称が確定したのも同じタイミングです。それ以前はマナや霊力な

ど色々な呼び名があり、今でも一部残っています。

4、異能者業界について

本編中でも触れていますが、異能者業界は慢性的に人手不足です。日本国内に限らず全世界的に足りてません。

こういう世界観でありがちな、国内組織間の主導権争いや他国の異能者組織との確執はほぼ存在しません。

そんなことをしている余裕はないからです。

ファンタジー社会、酷使される社会の歯車なのです。

異界討伐は永遠に終わらない仕事ですし、魔物倒してもお金や経験値落としたりしないので、割とみんな嫌々戦ってます。

でも戦わなきゃ世界滅ぶから…。

みんな楽しかったので、技術交流もさかんです。でも人手は足りないので抜忍は許しません。

むしろ一般人でも良い才能があると分かった途端に引き込まれます。

ですが育成のための人手も足りないので、大々的なスカウトは行われていません。異界渡りがいなくとも、異界発生の負のスパイラルは発生しうるため割と常に自転車操作です。

他国の異能者団体についても色々設定がありますが、本編にはでません。

こういう設定考えるのは楽しいですが、黒歴史と紙一重なので表に出すのは恥ずかしいものがあります。

今こうして名前だけみても「教会諸勢力」とか「ラボラトリメンバー」とかちよつと香ばしい感じ。

5、登場人物紹介

神崎玄德：主人公。

十五歳。クール系イケメンだがチビ。思考内内弁慶。

この辺の設定は、ヒロインとの兼ね合いです。女性上位ものっぽさを出したかった。

名前の由来は、妹がいるからカンザキで、今世では電車の切符を買ったこともないのデгентクです。

前世の享年も十五。一話の自分語りパートでヒーローへの憧れを語っていますが、高校生そのものにも憧れています。入学前に死にました。バラ色学生生活に拘るのもそれが理由です。

意外と前世に未練があり、前世の両親への負い目を感じています。それを今世の両親にも引きずっており、回想であんまり両親に触れてないのもその辺が理由です。

妹が病弱だったため、妹を優先してほしいと自発的にじいちゃん家に移りました。

まるで清く正しい転生者みたいな過去ですが、異能に触れて玄徳は弾けました。

精神が完成される前に転生↓ワンモア幼少期（対人経験少なめ）に突入したため、メンタル小学生です。

小学生メンタルのくせに、自分では「そろそろ俺も三十代か〜」みたいな気分です。

玄徳の「格好いい」は概ね小学生のセンスだと考えてもらってOKです。

イケメンムーブの功罪も生々しい性欲も知らない恋愛経験クソザコナメクジですの
で、例えばヒロインと絡んでもベツトで逆転とかしません。実際ご安心な。

転生後の世界について無知な面があり、前世の常識で生きています。

常識は迷子というか、知る機会が存在してないんですよね。

特異な異能者業界にトップリですし、そのうえ下積みの苦労とか木っ端異能者の現状とか、異能者の常識すら教えてもらってません。

じいちゃんもエリートコースというか大分トんでる人生送ってるので教えられませんが、そもそも玄徳に下積みをさせるのは、トラクターでベランダ菜園しようとするレベルで無駄遣いというか不向きです。

人手不足の異能者業界にそんな余裕はないので、敵の情報を叩き込むことが優先され、実戦投入です。

異能者の初実戦って本来もつと早いので、現状の年齢状況もじいちゃんの政治力に守られた結果です。

玄徳は慢心しても許されるレベルで強く、異能者全体でも既に上位にいます。

才能と技能を磨き上げた上、対異界性能に全振りしているので普通の異能者十人分くらい働けます。そして速い。

本人もやる気があるので、普通の三倍くらい働きます。

周りの期待や甘さは、本人の希望する最強性ではなく、この辺の便利さに起因します。

高校期間中に仕事に慣れた後は、助っ人として日本各地の異界を潰し続ける仕事が永遠に続くでしょう。

国外派遣も十分あり得ます。

大義のための犠牲となれ…！

木勢理亜：師匠

そろそろ三十歳のハードボイルド長身美女。

拳法マニア。それ故に玄山老師とも話が合う。玄山老師は異能技術収集マニア。

血筋に因らない異能、「鬼人」の二つ名、昔荒れてたときの戦法と、過去について察せられる要素が多いにも関わらず、良い人。書きたび良い人になっていく。ほとんどブツ
タ。

師匠は超怖い玄徳の祖父に、直接「孫を頼む」と言われた立場です。

なので玄徳が何をしようと、どんな奇行に走ろうとどうにか收拾をつける必要がある
胃痛担当の保護者梓ヒロインです。

「裏切り」での戦闘時、師匠は全力の二パーセント…とまではいかないものの、手加減し
てました。

暴走するレベルで強い自分の異能使ってませんし。フェーズ2です。

そして玄山老師の指導で完成した切り札を秘匿しています。フェーズ3です。

ついでにまだ若いので、ブラックホールフォームに到達する可能性が高いです。

でも天才玄徳くんが恋愛感情を覚えさせることができれば、乙女なので弱体化しま

す。

実質エボルトですな。

でもこんなイケてる悪役がいるはずなので、味方です。ご安心。

ロウさん：メインヒロイン

何故彼女がメインヒロインなのか。

それはすべて、クロビネガの「オウルメイジ」のイラストに因るのです。

魔物娘のさらなる流行を切に願う。

ちなみに最初は中途半端な人モードなど存在せず、翼オンリーでいくつもりでした。

しかしロウさんの技量的に、精密動作のマニピレーターくらい作れるという点と、

今後常に「手が無いロウさんがどう生活しているのか」描写する必要性を検討し、断念。

玄徳が師匠や今後登場するヒロインと会話している横で、翼でコーヒーカップとかと格闘しているロウさんをご想像下さい。

間違いない可愛い。

可愛すぎて話に集中できなくなることを請け合いです。

神崎玄山：じいちゃん

速さ至上主義の最強異能者。

ですが玄徳にとつては優しいじいちゃんです。でも修業は厳しい。

あくまで厳しいのは修業だけなので、玄徳の里での生活は快適かつ自由度の高いものでした。

まあ玄徳は自由時間にも修業してましたけど。

既に隠居の身ですが、政治力・影響力は健在。

そういうのが嫌いだったので隠居したのですが、孫のためには容赦なく使います。

玄徳を様々な意味で心配し、メンタルケア&悪い虫除けで木勢師匠を配置しました。

じいちゃんとしては、信頼できる木勢師匠なら玄徳とくつついてもOKだと思つてます。

また速さ至上主義なので、15で結婚してもまあいいだろとか考えてます。

神崎玄山としても、人間ダビスタ的に木勢師匠は◎なので、むしろ推進します。

じいちゃん的には、恋人が出来たら玄徳も少しは落ち着かないかな…無理かな…つて感じですね。

ちなみにロウさんルートの場合。

異能者的には魔物とくつつくとか有り得ない案件ですけど、神崎家のみんなは全力で

支援してくれます。

優しい世界。

人間ダビスタ的にこんな事例見逃せませんからね。子供はいっぱい良いよ！

酔いどれオウム：ゆるキャラ

酔いどれオウムは啓蒙高すぎてウイレーム学長みたくなつたヤツです。

人間性を保つために、常に酒で誤魔化しています。狂人の手記とか遺すタイプのゆるキャラですね。

ちなみに酔いどれオウムが飲む酒は、子供たちが真似して飲まないよう見た目からして毒々しい赤色をしています。

そして酔いどれオウムは困つた人を見かけると、例の口癖を言いながらその酒を分けてあげるのです。優しい。

自称：魔劍使い

前回の三つの出来事。

- 一つ、酔いどれオウムがすごく人気だった。
 - 二つ、師匠が仏の心で許してくれた！
 - 三つ、二号ライダー登場！
-

「戦え…戦え…。」

目覚ましが鳴っている。

眠い。

だが、頑張って起きねば。

電気ポットのスイッチを入れる。

歯を磨き、髭をそり、服を着替える。

髪もぼつちりセット。

お湯が沸いたのでインスタントコーヒーを淹れ、飲む。

眠気に耐えながらホールルトマトを空け、水で薄めコンソメを追加してスープにしている。

パンは昨日買っておいたバゲットを切れればいいだろう。

後はウインナー、ポーチドエッグ、レタス…はないのでキャベツを刻んでおく。

サラダにも彩りが欲しいところだ。

今度ベーコンフレーバードピッツを買っておこう。

レストランとかでサラダの上に散らされている赤いアレのことだ。

そこまで作ったところで、窓がコツコツとノックされる。

横目でスープの状態をチェック。入れたじゃが芋がまだ煮えていない。

むむ、もう少し早起きすべきか…。

窓を開け、挨拶。

「おはようございます、ロウさん。」

「おはよう、玄徳くん。」

コーポ赤城のベランダには、偽装術式を展開したロウさんが居た。

初遭遇からちょうど一週間。

ロウさんはこうして俺と朝食を食べることが許される程度には、師匠の信頼を勝ち取っていた。

俺の報告とロウさんの証言、そして術式——つまりは異世界式異能の実演等による、ロウさんの知性と証言の正確性検証を経て、師匠と俺の危機感は共有された。

ロウさんをこちらに引き込んだ者の正体については、未だ判明していない。

だが師匠曰く、師匠が守護役として常駐する根拠となった、炉火市の異界発生件数の多さに関係している可能性があるらしい。

仮に人為的に異世界への干渉が行われていた場合、それが異界の拡大だけでなく発生の増加を呼び起こす可能性があるからだ。

まだ明確な相関が判明したわけではない。

しかし無視できるものでもない。

この件の黒幕が何年前から活動しているか、という非常に重要な情報につながるからだ。

ロウさんが居なければ、俺たちは黒幕の計画に気づくこともなかっただろう。気付いた時にはドゥームズデイが来てた、なんて可能性もあった。

そしてドゥームズデイが明日来る、なんて可能性も普通に存在する。そりゃ師匠もFXで全財産溶かした顔になるうってものだ。

そんな訳で、今は十年遡って異界の発生数やその分布偏差やなんかを調べている。迂遠かつ時間のかかる手段だが、現状それしか手掛かりがない。

異能者業界上層部への報告を既に行ったにもかかわらず、この件に緘口令が敷かれているのもそれが理由だろう。

世界が明日滅ぶかもしれませんが！でも打つ手は特にはないです！なんて発表すれば、暴動が起きかねない。

一応上層部のスタンスとしては、ロウさんが異世界から来たことは認めつつ、その要因は現在調査中だとしている。

根拠がロウさんの証言しかないため、黒幕が居ない可能性、異世界への事故的転移の可能性も捨ててはいないのだ。

だが、本来は異世界からのストレンジジャーというだけで大事件だ。

それにも関わらず、ロウさんは上層部の歓待を受けることもなく、現状のまま炉火市に居ることとなった。

もうその事実だけで、今上層部がどれだけ焦っているのかが分かる。

上層部が追加人員や情報分析官などを手配してくれることにはなったが、人材不足の異能者業界で極秘裏に動かせる人数などたかが知れている。

間違いない、自然にこの件に介入できる俺も師匠も調査に投入されるだろう。

世界を救うヒーローチーム。

今のところ、総勢は二名だ。

ははは、ははははは。

胃が痛いよう…。

ロウさんについても、要経過観察とか言ってる場合ではなくなった。

まず師匠が超忙しいし。

幸いにも、性格や個人的気質に関しての問題がないことは明らかだったこともあり、五日間師匠と一緒に寝泊まりした後、無事自由の身となった。

とはいえ、異世界人である。

五日間の寝泊まりも、実質上この世界で生きるためのチュートリアルだったそうさ。

忙しい師匠に代わり、俺が担当しようと思案したものの、流石に師匠に断られた。調書などを取る必要もあつたし、そもそも俺は一緒に逃げだした前科持ちだからである。

一応じいちゃんの修業で書類作成術なんかも習っていたのが、まあそうなるよね…。

「玄德くん、御馳走様でした。

美味しいご飯、ありがとうございます。」

「いえいえ、むしろ簡単なものしか出せず申し訳ない。」

「私としては異世界食材が楽しみなので、こういうのも好きですよ?」

例の羽毛布団形態でころころと寝転がりつつ、会話。

師匠との寝泊まり中も、形成したエーテルの受け渡し等を行っていたのだが、なんだか満足していただけなかったようだった。

聞いてみたところ、やはりあの羽毛布団形態が一番良い、という回答。

時間そのものは短くても問題ないとのことだったので、こうして早朝に二人してころころ転がっている訳である。

…美人は三日で飽きると言うが、ありや嘘だな。

超ドキドキする。

現在ロウさんは、師匠の家の一室で寝泊まりしている。

VIP待遇の一環として予算も支給されたので、しつかりとした家やホテルへの居住も可能だったが、本人の希望によりそうなった。

流石にまだ電化製品や異世界式生活に不慣れな面もあったのだろう。

だが希望理由はそれだけでなく、師匠への心配もあるようだった。

師匠はこの一週間、死ぬほど忙しかった。

俺も飯炊きなどの雑務や報告書・口頭報告原稿の草案作成などを手伝ったものの、最終的な確認や承認、報告はすべて師匠がしなければならなかったためである。

デスマーチだった。

世界が滅ぶ前に、書類仕事に殺されかけていた。

ロウさんがどうにか俺たちを手伝おうと、例の治癒術式で支援してくれなければマジでぶっ倒れていたかもしれない。

当のロウさんは、本来ならこんなに効果のある術式じゃない、なんて首を傾げていたが、実に有難い支援だった。

そんな修羅場を三人で乗り越えたのも、五日間のスピード釈放の理由だろう。

なんだろうね。

上層部だって協力的なのに、なんでこんなことになっているんだろうね…。

「…ふう。玄徳くん、ありがとうございました。」

「いえいえ、お気になさらず。」

「今日はあの日の森の方に行ってみます。」

あんまり飛ばないでいると、体も鈍りますしね。」

「分かりました。行つてらっしゃい！」

「行つてきます〜。」

心なしかツヤツヤしたロウさんが偽装術式を展開し、飛び去って行く。

他の異能者に飛行姿を見られると問題になりかねないが、ロウさんの逃走速度に勝てる異能者は稀だ。

それに何か問題があったとき用に音声起動スマホの使い方は最優先で教えたので、いざとなれば俺か師匠がマツハで駆け付けることになっている。

…まあそのスマホが、GPSだけでなくあらゆる意味でロウさんを監視するデバイス

になつていたりもするのだが。

それだつて、俺以外からエーテルを奪つていないことが証明されれば解除されるだろう。

報告書地獄を乗り越え、上層部の情報分析官への伝達を終えた師匠と俺は、待機を指示された。

異界討伐も通常業務と同じ程度のペースであり、師匠ではなく俺がこの一週間すべての戦闘を担当している。

これは急激に異界討伐ペースを上げると、黒幕に「お前の存在に気づいたぞ！」と宣

言するに等しくなるからだ。

だが正直、修羅場を乗り越えた後の休息にも関わらず、嬉しくない。

いつ世界が滅ぶか分からないのに、休息しろと言われてもなあ…。

戦士にとっては休息も仕事の内、なんて言うが休息がこんなにも難しい仕事だとは知らなかった。

はあ。

とりあえず、ベーコンフレーバードピッツ買いに行こ…。

コーポ赤城は俺の通う「鴻上学園」からほど近い住宅街にある。

「鴻上学園」は再開発前から炬火市の目玉として存在していた、中高一貫の名門学校だ。隣接して大学や研究施設なども存在する。見事なゴシック建築の学術棟は、炬火市の名物にもなっている。

その学園の生徒や職員、関係者のための住宅街が古くから存在しているのだ。

だがその分、近年再開発された繁華街や大型商業施設なんかからは少し遠い。買い物をするのにはちよびつと不便。

だがローラーブレード型高速移動用異能器は使わない。

一週間前酷使した所為で、なんだか調子が悪いのだ。

しばらく歩くと、登校する小学生たちとすれ違う。

この辺りには小学校も多いのだ。

なんでも最初は鴻上学園を支援するために結成されたOB会が、後に財団となって炉火市全体の教育関係各所への支援や連携を図っているのだとか。

鴻上学園が設備の割に学費が安いのはそのためでもある。成績による段階的な学費免除制度なんかもあり、その効果もあつて鴻上学園は超人気校となっている。

俺がここに入れたのも、その財団に異能者関係のコネクションが存在したためである。

行政は再開発に際し、この財団と連携して教育の街として炉火市を再構築していかうと計画している。

もし異界が大量発生すれば、若い学生たちが多く犠牲となるだろう。

それを許すわけにはいかない。

止めねばならない。

絶対。

やだやだ、またシリアスになっちまった。

休憩のために外出して、シリアスになっていれば世話はない。

気分を変えるため、塀の上を歩いている猫をかまう。

買い物に行ったり、師匠の事務所に行くとき、よく見かけるヤツだ。

なんだかふてぶてしい茶トラ柄の三毛猫。

毛づやも良くて首輪もしているので誰かの飼った猫のはずなのだが、色んな名前で別々の人に呼ばれているところをよく見る。

謎の猫だ。

近づいても逃げないが、いつも触ろうとすると威嚇される。

こここのところ師匠の事務所に通うとき、毎度構っているのだが触らせてもらえない。

最初は引つかかれたので、慣れてきた方ではあるのだが…。

だが、今日の俺には秘策がある。

買い物用エコバックから、猫向けおさかなソーセージを取り出す。

無反応。

…。

包装を破って、目の前に差し出してみる。

顔がこちらに向く。だが食べない。

塀の上にソーセージ置いて、俺自身は下がってみる。

！

やつと食べた！

ちよつと感動して猫に近づいた俺は、手を引つ掛かれた。

身持ちが硬いなお前…。

でも去り際には尻尾を振って見送ってくれたので、もうちよつと通えばイける気がする。

猫で遊んでるんだか猫に遊ばれてるんだか分からん気分転換をしていたところ、林檎スマホが鳴った。

師匠からの着信。

ふむ、来客とな？

「おはようございませす、師匠。」

「おはよう、玄德。」

君に客が来てる。」

上層部からの追加人員かと思つたが、師匠の様子を見るにどうも違つたようだ。

ちなみに師匠の俺への呼び名は、「玄德」に落ち着いた。

裏切り中のもうちよつと気安く「お前」とか「バカ弟子」とか呼んでいてくれたのだが。

俺としては全体的にもうちよつとぞんざいに扱つてくれても構わないと思つている。年上に従うことに否やはないし。

それはともかく、客である。

チラリと横目で事務所のソファ―に座つた人物を見る。

黄色多めの謎の服装。

格好いいけどところどころに露出があり、ちよつと痴女っぽい。

そして何より目を引くのが、装飾過多の鞘入り西洋剣だ。

西洋の刀剣にはあまり詳しくないがなんだかゴテゴテしている。

うーむ、心当たりがない。誰？

「彼女は剣^{ウチ}さん。一週間前、救援要請に応えてくれた異能者の一人だ。

あの戦いで玄徳が疲弊したと聞いて、見舞いの品を持ってきてくれた。」

「それはそれは…ありがとうございます。」

むしろこちらから挨拶に出向かねばならないところ、今日は見舞いの品まで頂きまして…。」

「お気になさらず。お体はもう大丈夫なんですか？」

「はい、おかげさまで。」

爽やかな笑み。

だが、なんだか探るような視線。値踏みされている気分。

ふむ。

だがロウさんのことがあったとはいえ、本来ならこちらからお礼に行くのが筋だった案件だ。

そもそも俺の着任挨拶回りも終わりきつてない時期だったしな。

「なんだか、木勢さんはお疲れみたいですなね。」

お邪魔でしたでしょうか。」

「異界渡りの後始末が色々とありましてね…。」

私ではお手伝いしきれない部分もあつて、師匠はこここのところ寝不足なのです。」

「そうでしたか…。」

つまらないものですが、こちらをどうぞ。羊羹です。」

「…ありがとうございます。」

すごいものが来た。

虎のマークの高級羊羹である。しかも結構量が多い。

なんだよ剣さんって良い人じゃん！

師匠の好みを押さえてる辺りも高評価だ。

痴女っぽいとか思つててごめんね！

お茶を淹れに行った師匠と入れ替わりに、ソファーに座る。

若干剣さんからの視線が痛い。

いや俺も師匠に御茶汲みなんかさせたくないけど、師匠は和菓子に合わせのお茶にこ

「だわりがあつて、俺がやろうとすると怒るんすよ…。」

「手、怪我してらつしやいますね。」

「どうぞ。私のウエットティッシュを使うといい。」

「そのままにして置いたら、雑菌が入ることもありますからね。」

「剣さんはそういつて、アルコールティッシュを渡してくれる。」

「手についた猫のひっかき傷を、羊羹の受け渡しの際見たのだろう。」

「こんな睡つけときや治るだろと放置していたが、一理ある。」

「有難く受け取る。」

「猫の爪…ですか？」

「飼つてらつしやるんですか？」

「いえ、ここに通うときにも見かける猫がいます。」

「ここ最近構っていたら、やつとエサを食べてくれたんですが…。」

「触ろうとしたら引つ掛かれちゃいました。」

「へえ…。」

今朝の感動を思い出し、ついつい長めに喋ってしまふ。

剣さんの視線が、何故か強まる。

何故だろう。

例え犬派でも、猫の話は聞くのも嫌い、なんていう特殊戦メンタルじゃあるまいし。

「戦闘で疲弊して数日寝込んだ、と聞いていたのですが…。」

野良猫をかまう元気はあつたんですね。」

あ。

いや待て。まだリカバリは可能だ。

「ええ。すっかり良くなりました。」

数日会ってませんでした。猫も私の顔を覚えていてくれました。」

そもそも野良猫と毎日会っている方がおかしい。

言い逃れの余地はある。

…だが、猫に引っ掛かれたのは今日が初めてではない。
修羅場の最中も、現実逃避のために構って引っ掛かれた。
気付かれたか…？

「異界渡りを討伐して一週間も経っているのに、後始末が終わったのはついさっきみた
いだ。

それもおかしな話です。流石に長すぎる。

さて、あの日本当はこの街で何があったのか…。」

「考えすぎですよ。

異界渡りの発生過程やなんかについて、上層部の情報分析官に報告が必要になっただ
けです。」

「へえ。上層部が。検証が必要だと、そう判断したんですね？」

…こいつ。

気取られた情報は、どれも薄い状況証拠でしかないにも関わらず嫌に断定的に話かけ
てくる。

事前に何か情報を掴んでやがったな。

「神崎玄德さん。

私は既に、貴方方の情報操作について知っています。
良くないなあ、こういうのは。」

声色がねちっこいもの変わる。

やはり、緘口令に感づいたのか。

思考が、戦闘モードに切り替わる。

俺たちに事実を明かす権限はない。

つまり、採れる手段は僅か二つだ。

騙眩かすか、黙らせるか。

だがこいつは確信を持って、俺に話しかけた。
よし。

斯くなる上は口封じしなきゃ（使命感）。

「身の潔白を主張するなら力で示しなさい。

神崎玄徳、君にデュエルを申し込むッ！」

「受けて立つぜ！」

先攻は俺が貰う！」

叫ぶと同時に、俺は靈力弓を形成して不意打ちを敢行した。

デュエル。

それは、主に西洋で用いられる異能者同士の戦闘訓練レギュレーションの一つだ。

実情としては異能者同士の序列において、戦闘力は重視されるフアクターではない。

どちらかと言うと、流派の発展や新技術開発に尽力した者、或いは異界を討伐し続けて実績を積み続けた者の方が評価される。

だがそうは言っても戦闘職なので、戦って白黒はつきり付けたい時もある。

そんなときに行うのがデュエルだ。

相手に攻撃をクリーンヒットさせればワンラウンド終了、ツーラウンド先取式の三本勝負だ。

審判が止めるかどちらかがまいったと言うまで続ける、神崎流戦闘レギュレーション「立ち合い」より大分ぬるいが、現在の異界戦闘では負傷即撤退が周知徹底されているので、此方の方が実情に即しているといえる。

「ふふん、このワンラウンドはくれてやる。

ちようどいいハンデだ。」

「…。」

冷めた視線。

せいぜい油断するがいい。

俺は吹き飛ばされた姿勢のまま、剣さんを睨みつける。

完全に不意打ちが決まったと思ったのだが、事務所と羊羹の危機を感じとった師匠が超高速で現れ、ぶん殴られた。

いやまあ、事務所で靈力弓ぶつ放した俺が全面的に悪いんですけどね。

でもあんなこと言われたら、多少はテンパってしまうのも無理からぬ話でしょう？

まあ実際には、剣さんがこつちを侮るような疑うような目付きをしてたから熱くなつてしまったのだが。

心の中で言い訳を思い浮かべつつ、剣さんと二人、戦闘が出来そうな自然保護区へと向かう。

ぶん殴られたおかげで、頭も冷えた。

ついでに、状況を伝え上層部への指示を仰ぐよう師匠に伝言を頼むことも忘れない。

冷静に考えれば、鳴が葱を背負ってきた感じはある。

上層部はまず間違いなく、口止めではなく剣さんもこの件に巻き込む道を選ぶだろう。

お前も一緒に世界を救うんだよ！

逃がさんぞ！

そんな訳で、上からの指示が来るまで時間稼ぎである。
とりあえず心理戦フェイズっぽく、会話で場を繋ぐ。

「あなたのことは存じてますよ、剣さん。」

「へえ、そうなんだ。」

どんな噂を聞いていたのかな。」

「曰く、自称魔剣使い…。」

まったく、魔剣だなんておかしな話です。」

現代の日本で魔剣だの霊剣だの神刀だの名乗るやつに、碌なヤツはいない。

まず間違いなくニワカか法螺吹きだ。

歴史ある流派で、それらを用い戦う流派は一つ足りとも存在しない。

それには歴史的理由がある。

時は第二次世界大戦直後、G H Qによる占領期。

G H Qは占領政策の一環として、戦勝祈願などを行った神社に対し大規模な圧力をかけた。

この圧力は祝詞の内容変更や「勝守」という直接戦争には関係のないお守りの頒布中止にまで広がっていった。

そしてこの圧力は武力と関係するとされた霊剣や神刀にまで及び、その多くが接收された。

この圧力は異能者業界にも及んでおり、異能器が一般化する前に用いられていた霊剣の類がその対象となった。

それもあって当時のG H Qからは、異能者業界そのものが大分睨まれていたようだ。

しかし異能者は世界の守護者であり、戦中だろうが戦後だろうが必要な組織だ。どうにかしてG H Qから国内での活動を認めてもらう必要がある。

そのために当時の異能者たちは一丸となって自発的な刀狩りを敢行、美術品として博物館に寄贈し、G H Qからの圧力を躲した。

この自発的にG H Qに従う姿勢と、仕事が増えることを嫌った連合国側異能者団体からの嘆願により、異能者業界は例外的に戦前からの体制を引き継いで今に至っている。

つまり歴史ある霊剣なんてものが出てきた場合、組織が一丸となつて世界守護のために動いていたときに、それを裏切つて財産を秘匿していた者がいることになる。

ぶつちやけた話そういう者も剣もなくはないのだが、それらは秘伝化しているし、少なくとも自分から名乗つたりはしない。

そんな訳で彼女の二つ名「自称魔剣使い」は相当に奇異なものだ。

とはいえ、これは全て国内に限つた話である。

西洋には普通に歴史ある魔剣使いもいる。

彼らも日本で仕事をする際は魔剣や霊剣ではなく、母国語の呼び名を使つたり気を使つているそうだが。

まー剣さんもわざわざ西洋式のデュエルを挑んでくるくらいだし、あの魔剣も西洋からの輸入品だったりするのだろう。

傍目からは分からないが、本人がハーフだったりするのも知れない。

このお喋りは的外れな挑発を装った雑談であり、師匠が上層部と話を付けるまでの時間稼ぎだ。

只の雑談じゃ、即切り上げて襲い掛かってきそうだし。頑張って口を回す。

師匠まだかな…。

「言いたいことは、それで全部かな。

それじゃあ、早く始めようか。」

うん？

なんか怒ってない？

「今日も、この剣は血を求めててね…。

鈍らかどうか、その身で確かめてみるといい。」

「…さっきのはあくまで日本国内の話です。」

その西洋剣を馬鹿にしたつもりはありません。」

「いいや、君の魔剣談義に怒っているわけじゃない。

魔剣の前提に歴史が必要だと思っている、君の愚かさに呆れているんだ。

これは、最新の魔剣だ！」

あの装飾過多な鞘飾りの一部がメカニカルに変形し、剣が撃ちだされるように加速。
黄色の軌跡を残す、高速の横薙ぎが放たれた。

飢える魔剣のオーバードース

前回の三つの出来事！

一つ、世界を救うために書類仕事を頑張った！

二つ、猫に遊ばれた！

三つ、剣さんのホドリゲス新陰流奥義が放たれた！

劍さんの左手が鞘に触れ、スイッチが押される。

『Ready』の電子音と共に、でかいベルトの左腰に固定されていた魔劍の鞘が独りで動く。

地面と水平になり、さらに九十度捻るように回転。刃は横向きになる。

劍さんは重心を落とし、右手を前に。

鞘が変形。

そして、火薬の炸裂音。

瞬間的に加速された魔劍が撃ちだされるように抜刀される。

柄が吸い込まれるように右手に収まり、腕と手首の動きで勢いそのまま薙ぎの軌跡へと変化。

超高速の居合抜刀。

俺は、微動だにできず、その動きを見ていた。

飢える魔剣のオーバードース

「…何故、避けなかった？」

劍さんが言う。

おかしな話だ。

「聞きたいのはこっちですよ。」

何故、当てなかつたんです？

当たらない攻撃を避ける必要はないでしょう。」

神速の居合。

恐らく、劍さんの必殺技。

絶好の間合いとタイミングで放たれた居合は、俺の目の前十数センチを通過していった。

「どうやら度胸はあるみたいだね。」

「そんなことを言うためだけに、必殺技を見せたんですか？」

恐るべき速度、恐るべき威力。

初見の技というのは、ただそれだけで対処がしづらい。師匠戦で散々味わった。必殺技ならなおのことだろう。

だが、一度見れば対抗策だって思いつく。

何故わざわざ必殺技の空振りなんてしたんだ？

目の前にある魔剣を見る。

剣さん曰く、最新の魔剣。

刀身には、後から刻まれたと思われる「4 t h」の文字。

その字体には心当たりがある。

五十年以上前に第三次実験で打ち切られた、人工優良魔剣製造計画で使用されていた字体。

霊刀、神剣、魔剣に妖刀。

それらはすべて、性質により区分されただけの同質の武器だ。

構成素材は「エーテル過干渉媒体」。エーテルや魔物、異界に対し特殊な作用を及ぼす物質。

強い磁力に晒された鉄が磁力を帯びるように、大量のエーテルに継続的に晒された物質は、エーテルに対する特殊な干渉能力を持つことがある。

そうした物質を武器に加工し、魔物を構成するエーテルへの攻撃武器としたものが魔剣である。

その特殊干渉は様々で、製法も様々だ。

霊地とも呼ばれる高エーテル地帯産の霊刀、何らかの高エーテル存在との接触で生まれるとされる神剣、そして人を斬りつづけ、人中のエーテルを啜ってきた妖刀。そして製造される魔剣。

名称は製法と生じた特殊干渉の性質差異により後付けされたものに過ぎない。

かつて異能者たちのメインウエポンであった魔剣は、異能器の高性能化によって取って代わられた。

それは量産性の悪さと、互換性のなさによる必然でもある。

膨大な時間とエーテルによつてのみ生まれるエーテル過干渉媒体の性質は、千差万別であった。

その中から少しでも戦闘に役立つ機能を選択され魔剣は製作されていたが、材料の差異により干渉性質や威力が同じものを作ることは出来なかった。

そしてそもそも魔剣のエーテル干渉は無差別なものであり、使用者に牙剥くような干渉性質も多かったという。

あまりにも作りづらく、そして使いづらい。

そして同じものがないということは、ノウハウや戦法の共有、連携構築の難しさを呼ぶ。

仕方なく使い続けられていた、強力な失敗作たち。

世間的な魔劍の評価はそんなところだ。
最早、過去の遺物として扱われ久しい。

もちろん、強力な魔劍は強い。異能器では未だ再現不能な強力な干渉性質をもつたものもある。

だがそれは、膨大な数製造された魔劍の中で偶然生まれた奇跡の産物だ。

国外で現在使用されている魔劍も、そうした奇跡的に出来が良かった上澄たちだ。

干渉性質 x 干渉強度 x 干渉範囲 e t c e t c : そうした項目の無限ともいえる組み合わせが偶然噛み合った物だけが、強力な魔劍になるのだ。

これまでいくつもの研究機関が、干渉性質の固定化や、強力な干渉性質の再現を試みたが、その全ては失敗した。

エーテルは世界の壁を乗り越えるエネルギーであるため、この世界だけでなく近い異世界からの干渉も受ける。そのため実験結果が一定にならないのだと言われているが、異世界の情報を知る術がないため実証はされていない。

そしてエーテル過干渉媒体だって無料じゃない。むしろ貴重品だ。何が出来るか分からない魔劍のために、そうホイホイ使えるものではない。

妖刀の製法再現も検討されたが、あまりにも成功確率が低く断念された。

故に、既に魔剣の新造なぞされていない筈なのだ。

それもつい最近ではなく、日本で言えば明治維新前後にはほぼ製造されていなかった。

ヨーロッパでは日本よりもさらに早く、製造が打ち切られていたと聞く。

一体どんな酔狂者が、わざわざ魔剣なんぞ新造したって言うんだ？

本当に実用に足る干渉性質を持つているのか？

改めて魔剣と、その鞘を見る。

鞘はベルトに接続され、ベルトはびつちりとした上着とズボンに接続されている。

ところどころにコネクター。

例の炸薬加速の衝撃を、全身に分散させるための機構だろう。

魔剣を持ち運ぶ際の重量負荷を低減させるためでもあるかもしれない。

異界討伐は、個人の魔物探知能力で対策できるとはいえ、ダンジョン探索だ。

つまりは長距離を歩く羽目になる。

必要に応じて消すことも出来るエーテル形成の武器に比べ重いのも、魔剣が急速に廃れた理由だ。

重いということは振りが遅くなるということであり、どんな形でも当てればいい対異能者戦でもデイスアドバンテージとなる。

恐らくはそれを補うための、炸薬加速居合抜刀。

正直、どう考えても炸薬機構が重いから本末転倒甚だしいのだが…。

しかしそれだけに意外であり、奇襲性は抜群だ。

初見では反応する暇なく斬り捨てられるだろう。

「私は私の強さを確かめる為に戦っている。正々堂々と戦いたいんだ。

それに不意打ちで勝って、後から文句を言われても困るからね。」

あてこすりめいた物言い。

俺の不意打ちを根に持ってやがる。

謎の魔剣。

謎の装備。

奇妙な二つ名。(今更だが、「自称」魔剣使いつて何なんだよ！)

だが少なくとも、剣さんの目的は分かってきた。

俺の実力調査だ。

さつきから挑発や疑うような目線があからさますぎる。

とりあえずこつちもトラッシュトークで応じて、挑発に乗ったフリをする。

恐らく緘口令に感づき、何かが炉火市に起こったことに気づいた剣さんは、大事件に初陣直後のペーパーである俺が関わっていることを不安に思ったのだろう。

異能者業界の緊急事態は、そのほぼ全てが世界の危機であり、一つのミスが大惨事に繋がる。

ルーキーの俺がそんな事態に関わっていると知れば、不安に思うのも無理はない。

剣さんは俺と同年代だが、既に二つ名を持つほどの実績を積んでいる。

本来異能者の実戦投入はもつと若い、早いタイミングなのだ。

俺が十五歳まで修業できたのは、じいちゃんの政治力に守られた結果である。

秘蔵っ子だなんだと噂は流れているらしいが、そんな得体の知れない男を信用しろと

いうのも無茶な話だろう。

だが逆に言えば、俺はこの世界の誰よりも長く、強力な異能者にして異能研究者のじいちゃんの指導の下、様々なデータに自由にアクセスできる最良の環境で修業し続けたとも言えるのだ。

そして俺は転生者である。

普通の人間であれば、人格を形成する時間に修業できた。

普通の人間であれば、情緒を形成する時間に修業できた。

普通の人間ならば、時間をかけて勉強する必要のある学問を既に知っていた。

普通の人間ならば、学校に行っている時間を修業に当てることができた。

頭の柔らかい幼少期の時間は、大きな大きな意味を持つ。

その貴重な時間を、俺はほとんど無駄にせず異能の修行に当てられた。

俺は同年代どころか他の全ての異能者に対し、ありえない有利な位置から修行を始められたのだ。

とんでもないズルであり、絶対的な差だ。

自由に使えた時間の絶対量が違いすぎる。

そんな俺が普通の人間に負けられるか？

それはじいちゃんやんの指導と神崎の名に泥を塗ることと同義ではないか？

俺の実力を疑うというなら、示さねばならない。

俺に挑むというなら、思い知らさねばならない。

俺はあり得ない前提と最良の環境により生まれた、対異界戦闘マシンなのだ。

慢心でもなんでもなく、俺が負けたらおかしい。

こと異能に関して、俺に負けは許されないのだ。

音もなく、俺の両腕に靈力弓が形成される。

弓掛型異能器の補助はなくとも、これだけ時間があれば十分な弓が作れる。

俺と劍さんの間に緊張が走り、一瞬場が停滞。

風で木々が鳴るのに合わせ、二人同時に動き出す。

劍さんの左足が大きく踏み込み、先ほどとは逆向き、右から左に横薙ぎが放たれる。

炸薬がなくとも十分な速度。

だが対応可能。

スピードが乗る前の魔劍に突っ込み、エーテル形成した障壁で軌道をそらす。

長劍はその質量により加速するのには時間がかかる。

トツプスピードに乗る前に叩きつぶすのが定石だ。だが。

「ちいっ！マジの魔劍か！」

「物分かりが悪いな…。」

「さつきも言っただろう?」

魔剣と接触した途端、障壁が霧散するように消滅する。

尻もちを着くように体を沈ませ、咄嗟の回避。

間一髪、頭上を魔剣が通過していく。

エーテル干渉性質を判断するには、一度食らってみる他ない。

なので試してみたのだが、想像以上に厄介な魔剣だ。

恐らくエーテル干渉性質は、形成の破壊。

範囲は魔剣の表面8ミリ、実用上接触での起動。

だがこの性質ならば、範囲は狭い方が使いやすいだろう。

仮に広範囲だった場合、自分のエーテル形成すら妨害する欠陥品になる。

驚いたな。

本当に有用な魔剣だぞ。

現状では例え大金を積んだところで、エーテル過干渉媒体の大量取得など不可能だ。産出地の多くが異能器メーカーによって独占的に管理されているためである。

大量に魔剣を製造することが出来ない以上、数を作って上澄みを使う既存の方法は採れない。

信じがたいことに、この魔剣の製造者は優れた魔剣を狙って作ることに成功したらしい。

なにより信じがたいのは、その製造者がその成功を世界に向けて発表していないことだ。

これまで世界中の異能者たちが千年単位で挑み続け、そして諦めた難題を解決したのだ。

それを秘匿するなどとても考えられない。値段など付けようもないほどの、超技術。

ダース単位の勲章が贈られ、開発者は百年に一人の天才として褒め称えられるだろうに。

炉火市に来てから、驚くようなことばかりだ。

いくら何でもイベントが立て込み過ぎている。

驚くことが多すぎて嫌になってきた。

くそう。

回避のために態勢を崩し、死に体となった俺に剣さんの追撃が迫る。

剣を振り切った勢いを活かし、右足が踏み切られ、蹴りが放たれる。

膝にあるバトルスーツの切れ目、肌が露出している部分からエーテル刃が形成され、蹴りの射程が延長。

俺が態勢を立て直すよりも早く、そのまま勝負を決めようというのだろう。

だが流石に見くびり過ぎだ。

俺は地面につけている両手に長い杭状の霊矢を形成、弓で加速して地面に突き刺す。

反作用を受け、俺の体が蹴りの射程を逃れる。

剣さんも即座に対応。

俺の回避を見るや、蹴りの軌道を踏み込みに変え右足を着地、さらに左手に持つ魔剣を地面に突き立てる。

そのまま腰を捻り、回転。

左足で回し蹴り。

くるぶしの裏にある肌の露出からも、エーテル刃が形成される。

咄嗟に右手の靈力弓で受け止める。

ぎやり、という削れるような音。受け流し損ね、衝撃が右手に伝わる。それを隙と見て、劍さんがさらなる追撃を図る。

「手首の返しが甘いんだよ……！」

「舐めんな！」

劍さんは右足でジャンプし、完全に空中に体を浮かせる。

一連の回転動作の勢いを使って体を捻り、右手をしならせ、投擲。

手裏劍、もしくはチャクラム。

高速で投げ込まれる、高密度エーテル刃。

だが真正面からの射撃武器なぞ怖くもなんともない。

俺は左手から射った靈矢で迎撃。

すぐさま全弾撃墜。

そのまま連続射撃。

劍さんはバックステップ。

地面に突き刺した魔劍を回収し、矢を切り払った。

接触と同時に消滅する霊矢。

矢の衝撃すら受けた素振りはない。

厄介な……!

これではいたずらに霊矢を撃ち込んでも意味はないだろう。
若干の距離を保ち、剣さんと睨み合う。

「随分と面白い避け方だった。

でも、もう一度通用するとは思わない方がいい。」

「面白いのはそっちの姿ですよ。

電飾でも仕込んでるんですか?」

剣さんの痴女つぼさの源泉。

四肢にある、肌の露出部位。

膝。踝。肘。手首。その他数か所。

その全てからエーテル刃が形成されていく。

さながら全身ビームサーベル。

冗談みたいな恰好だが、形成したエーテル刃に当てないよう魔剣を構える姿には慣れが見える。

「……」

無言で、剣さんが迫る。

両手の霊力弓で弾幕を張る。

左の弓では連射性を重視。

右の弓では発射数を絞り、威力と弾速を上げる。

「効かないのは、見て分かると思うんだけどな……！」

「今は実験中なんですよ！」

「貴方を倒すための！」

魔剣で切り払われた霊矢は消滅。

威力を強化したのも、消滅速度に差は見られない。

そして弾幕を張った矢は、全身のエーテル刃で切り払われる。

しかも迎撃動作は軽く体を捻って矢の軌道に刃を滑り込ませる程度のものであり、剣

さんの前進速度には影響しない。

くそ、時間稼ぎにもならんか！

剣さんの剣術自体は、基本に忠実なオーソドックスなもの。

無駄がない分素早い、剣筋は読みやすい。

だが魔剣の性質と手首のエーテル刃により、カウンターや剣のはたき落としは困難だ。

そして全身のエネルギー刃により、普通の足さばきや腕の振りすら攻撃となる。攻防一体。

見掛け倒しのこけおどしではないようだ。

迫る魔剣を慌てて躲す。障壁が使えない以上、受け流すことも受け止めることも出来ない。

ついでに弓との接触も避けねばならない。

本来なら、硬い構成の霊力弓は盾としても使える万能武器なのだ。

魔剣の次は、全身のエネルギー刃が迫る。

こちらは障壁でガード可能。

むしろ手に纏わせた障壁で隙間をこじ開けるようにして、霊矢の近距離射撃を試みる。

しかし一瞬早く、剣さんは膝のエネルギー刃を爆発させ、俺を吹き飛ばす。ダメージはほぼ無し。

自身への自爆を嫌い、破壊力ではなく衝撃を重視して発動したのだろう。

またしても、若干の距離を空け、睨み合う。

先ほどから既に三回、同じような戦いが続いている。

剣さんはリスクを嫌い、少しでも危ないと判断すれば仕切り直す。

そのたびに再構築されるエーテル刃。

贅沢なエーテルの使い方だ。消耗は激しいはず。

ダメージは互いにならないが、此方が有利。

剣さんはまた納刀をする素振りを見せる。

あの炸薬加速居合抜刀は厄介だ。出来れば納刀はさせたくない。

俺は十分に強化した矢と分裂する拡散霊矢を通常霊矢に織り交ぜて射る。

これまでの接触で判断した限り、この威力ならば剣さんのエーテル刃を撃ちぬけるはずだ。

ちっ。

案の定、剣さんは納刀を中止し、強化霊矢を選択的に魔剣で迎撃する。

気合入れて作った霊矢が、事も無げにかき消されるとむかつくぜ。

拡散霊矢に驚き、後退する剣さんに追撃。

こちらが押しているはず。

…だが、踊らされている感じは否めない。

劍さんが必殺技をひけらかしたのは、本人の言うフェアプレイ精神なんかじゃなくこの展開を狙つてのものだろう。

切り札をちらつかせることで、それを阻止するために相手にカードを切らせる。

事実俺から拡散霊矢というカードを引き出すことに成功した。

なんとも狡つ辛い手だ。

そして持久戦のための手でもある。

ううむ、気持ち悪い違和感。

あんな全身エーテル刃形態なんてものが、燃費が良いはずがない。

矢を迎撃しながら、ちよこちよこエーテル刃を形成し直しているし。

てつきり短期決戦のつもりで勝負を決めに來るかと思つたのだが…。

エーテル量で俺に勝てる異能者は少ない。

その意味では矢が当たろうが迎撃されようが、このまま遠距離から削り殺せるはずだ。

俺の霊力弓は、撃ちだす矢の形成時にプログラミングすることで威力や矢の性質を変
更できる。

そして弓の方でも加速速度や弾道を調整できるので、二つ合わせて実に多彩な攻撃が
可能だ。

拡散霊矢以外にもいくらでもカードはあるのだ。

しかし適度に別バージョンの霊矢を織り交ぜ、中距離にくぎ付けにしている剣さんの顔に焦りはない。

なんとも気がかりだ。

そもそもここは森であり、攻め手が圧倒的に有利だ。

後退する場合、でこぼこした地面を確認せずに後ろ歩きすることになるからである。

回避を強いる魔剣を持ちながら、剣さんが今受けに回っているのもおかしい。

多少強引にでも攻めた方が有利だろう。

抜刀のブラフなんざ使うまでもなく、追い回せばいい。

うーむ、うーむ。

考えが読めない。

だが、この状況が敵の掌上の上というのにはほぼ間違いない。

現状維持という選択肢はないだろう。

リスクを飲み込み、攻めるしかあるまい。

射撃を継続しながら、あえてこちらから距離を詰める。

剣さんは切り払いによる迎撃を続行。危なげなく迫る霊矢を防いでいく。

通常の霊矢ではエーテル刃を撃ちぬけないが、連射できない高威力の霊矢は魔剣で切り払われてしまう。

霊矢のチャージのために射撃を緩めれば、納刀され炸薬加速居合抜刀の脅威にさらされるだろう。

そもそも全身のエーテル刃が盾となり、剣さんへの命中を期待できる軌道は限られてくる。

こちらはそこを狙って射撃するしかないが、当然剣さんは自身の刃の長さや隙間を把握している。

瞬時にステップを踏んだり体を捻ることで隙間が変化し、矢は命中せず切り払われていく。

むう。

装備や外見は珍妙だが、戦法は堅実の一言。

この矢の迎撃方法にも慣れと経験が伺える。

確かな修練と練習に裏打ちされた、優等生タイプ。

こういう手合いを倒すには、相手の想定を超える必要がある。

左右の靈力弓をモード切替。

左はとにかく速射性を重視。めくら撃ちの弾幕を張る。

右はさきほど使った杭状靈矢を形成。それを周囲の木に撃ち込む。

左の制圧射撃を継続しつつ、走りながらジャンプ。

異能により身体能力を強化し、撃ち込んだ杭を足場に木を駆けのぼる。

右をもう一度モード変更。

エーテル燃費悪化を代償に、より速くより強い矢を放つ強化形態へ。

「…なにをー」

「直上からの射撃。これなら…」

木の幹を蹴り、空中からの連続射撃。

剣さんは魔剣と両腕を掲げ迎撃を試みるが、正面からの射撃とは違い下肢のエーテル刃は迎撃に使用できない。

防御のため追加で障壁が形成されるが、急場で作った障壁なぞ強化靈矢で簡単に撃ち

ぬける。

舌打ちの音。

初めて、剣さんの表情が歪む。

上空の俺から逃げるため、転がるように移動していく。

何発か当てたが障壁越しであるため浅い。クリーンヒットとは言えないだろう。

だが問題ない。

弱点が分かかった以上、そこを突き続けるだけだ。

ローリングして衝撃を分散しながら着地した俺は、両腕から空中へ向け射撃。

放たれた矢は逃げる剣さんの頭上で直角に曲がった。

降り注ぐ霊矢。

「なんだと!?!」

「これで詰みです、剣さん!」

俺のイーテル感知能力ならば、極めて精密に彼我の距離を測ることができる。

そして距離さえ分かれば、その距離飛行した後曲がる矢を作るのはそう難しいことではない。

両腕の弓で弾幕を張る。

これまでと違い剣さんはそれを切り払いしきれず、全力で回避していく。

俺はさらに射撃を継続。

回避された矢が地面で爆発し、足場を悪くする。無論俺が混ぜた破裂霊矢によるものだ。

少しずつ、少しずつ剣さんの回避に余裕がなくなっていく。

織り交ぜられた拡散霊矢や高速度霊矢が剣さんの体を掠め始める。

勝ったな！（確信）

『dose break』

「△ウエポン……！」

「は……？」

炸薬加速居合抜刀と同じような電子音が鳴る。

剣さんが魔剣にあるトリガーを引く。

魔剣が高速振動し、不吉な音が響く。

それと同時に、剣さんに迫っていた霊矢のほとんどが消滅する。

そして射出された霊矢が順次消滅。

いや、霊矢だけではない。

剣さんのエーテル刃もまた消滅している。

あの消え方は、魔剣に接触したときと同じものだ。

「魔剣の特殊干渉範囲が膨れ上がっただとお!？」

「チエックメイトだ。」

魔剣を納刀した剣さんが、こちらに突っ込んでくる。

迎撃に放った霊矢は、すべて消滅。

拡大は一時的なものらしく特殊干渉範囲はしぼんでいくが、ギリギリ剣さんの攻撃の方が早い!

剣さんの左手が鞘に触れ、スイッチが押される。

——
マズイ。

『Ready』の電子音と共に、でかいベルトの左腰に固定されていた魔剣の鞘が独りで動く。

—— 剣さんが全速力で向かってくる。

地面と水平になり、さらに九十度捻るように回転。刃は横向きになる。

—— 迎撃の術はない。

—— 剣さんは重心を落とし、右手を前に。

—— 後退も、間に合わない！

—— 鞘が変形。

—— !

そして、火薬の炸裂音。



劍さんは、魔劍を振り切った姿勢で止まっている。

俺はその前に立っている。

ぼたりぼたりと静かに、血が流れていく。

だが。

だが、それでも。

「俺の勝ちです、劍さん……！」

「ああ、そうだね。私の負けだ。」

勝ったのは、俺だ。

まるで最初の焼き直し。

剣さんの魔剣は、俺の眼前十数センチを通過していった。

そして俺の左腕は、改良型紅蓮弓の反動で焼かれ。

俺と剣さんの間の地面はクレーターだらけになっている。

紅蓮弓により足場を崩すと同時に、爆圧で剣さんの踏み込みを押しとどめたのだ。
かなり際どいところだった。

「いやあ、最後の判断は見事だったよ。

左手ケガしてるけど、大丈夫かい？」

「ええ、見た目ほど深い傷じゃありません。

…というか、魔剣が直撃するよりは数段マシですよ。」

劍さんが爽やかに笑いかけてくる。

：イイ性格してるぜ。

左手の状態を見る。

紅蓮弓の性質上、崩壊する矢での火傷や裂傷ダメージはどうしようもなかったが、内部的な異能行使負荷はかなり低減できた。

矢の構成が荒くても良いので、弓があれば即座に使える点が非常に便利である。

：ロウさんは「あの技は使わないでください」としか言っただけだったし。改良したから実質別の技だ。セーフ、セーフ。

ほぼ外傷だけだから、自宅にある簡易治療用異能器でも誤魔化せるだろ。

左腕程度の代償でデュエルに勝利できるなら安いものだ。

特に今回は、魔劍の直撃を避けるための緊急避難だった。

魔剣の多くは対魔物戦で意味がないため研がれておらず、切れ味を持たないが鉄の塊でぶん殴られれば異能者であつても骨ぐらい折る。

「ああ、その点は大丈夫。

この魔剣はほぼエーテルにしか影響しない。

命中しても大きなケガはしない筈さ。

言つてなかつたかな？」

「そうだったんですか。

…んん？」

脳裏に閃き。

そんな現象に聞き覚えがある。

当たつても物理的影響は少ない。

エーテルだけに干渉。

そもそも、あるはずのない新造魔剣。

形成されたエーテルを分解する性質。

——あれは本当に分解だったか？

分解なら、崩壊したエーテルが周囲にまき散らされるはず。
思い出せ。

あのΔウエポンとやら。

エーテルを吸収していなかったか——？

「…まさか。」

「気づいたかな。」

「その魔剣、いや、その剣は…！」

「その通り、これは——魔物だよ。」

武器として扱えるよう制御された魔物。

それが、第四次人工優良魔剣製造計画が生み出した成果だ。」

ふざけんな！

魔剣じゃねーじゃねえか！

自称魔剣使いつてそういう意味かよ!!

狙ったエーテル干渉性質も何も、あれは魔物に共通するエーテル吸収能力。

どうやって魔物を制御し、そして俺の攻撃から保護していたかは知らんが、それがこの剣のエーテル干渉性質のタネだった。

あの△ウエポンとやらも大層な名前に反し、魔物化した魔剣に攻撃させていただけなのだろう。

剣を異界に突っ込んで放置すれば、そこそこの確立で魔物化するのでエーテル過干渉媒体も必要ない。

ええ…。

何それ…。

これ作ったヤツは間違いなくバカだよ…。

「ネタばらしも終わったところで第二戦と行こうか。」

「はい。」

次も、俺が勝ちますよ。」

「ははは、それはどうかな？」

剣さんが笑う。

「言い忘れていたんだけど、実はエーテル吸収能力についても強化されていてね。」

この剣で吸収したエーテルの大部分は、私に還元されるようになってるんだ。」

「……」

あの贅沢なエーテルの使い方のカラクリ。

まで。

そうなるともしや、剣さんはさつきの一戦でエーテルを消耗してない——？

「そういえば、キミはさつきの一戦で随分景気よくエーテルを使っていたなあ。」

勝ったの良いものの、左腕を失いエーテルを消費したキミ。

今回は負けたけど、何も失わずエーテルも万全の私。

さて、有利なのはどちらかな……？」

それでもキミは、自分が勝てると思ってるのかい？——そんな風に言つて、剣

さんは笑う。

爽やかさの欠片もない、邪悪な笑み。

…上等だ。

「剣さんって、意外とワンパターンなんですね。」

「…なんだと？」

「最初に必殺技見せびらかしたのと同じでしょう？」

自分の優位性を相手に知らせて、動揺を誘っている。

でも本当に優位で、勝つ自信がある人はそんなことしませんよ。」

「生憎、私が優位なのはただの事実だと思うけど？」

「俺が剣さんに勝てると思う理由は、三つあります。」

一つ、例の△ウエポンは連射できないから。

△ウエポンが発動されたとき、剣さんがトリガーを引くよりも早く電子音が鳴っていませんでした。

炸薬加速居合抜刀とは順番が逆で、印象に残ったんです。

私が思うにあの電子音は、チャージ完了の音だったんじゃないんですか？

自由に使えるならあそこまで追い込まれる前に使うでしょうし、少なくとも何らかの制約がある」と判断しました。

二つ、剣さんにも異能行使の消耗は存在するから。

正直、剣の性質が形成の破壊ではなく、吸収だと聞けたのは朗報です。

剣さんは霊矢を迎撃する最中にも、定期的にエーテル刃を形成し直していました。

防御に隙ができるというのに、最後の追い込まれて必死に迎撃している最中にもです。

単純な早めの修復のためだと言うなら、これはおかしい。

あれは吸収したエーテルでパンクしないための措置ですね？

魔剣がただエーテル形成を破壊するだけでなく、吸収と剣さんの異能行使による排出を必要とするなら、やりようはあります。

そして三つ。

そもそも、この程度の負傷や消耗が問題となるような軟な修業はしてないんです。

いい加減、俺と俺のじいちゃんの指導を舐めるのは止めてもらおう！」

腕に靈力弓を多重に形成する。

連弩のように片腕に三つずつ。

形成に時間がかかるため、必死に長台詞を喋って時間を稼いだ。

三つに弓が増えた分当然エーテル消費は上がるが、今はそれが欲しい。

要は、魔劍のエーテル吸収許容量・劍さんのエーテル排出量を上回るペースでエーテルを叩きつけてやれば良い。

俺のガス欠が早いか。

魔劍のパンクが早いか。

勝負だ。

矢を射る。

射続ける。

両腕×三倍×一点集中の全力投射だ。

時々、カーブするように設定した矢で剣さんの周囲を射る。

剣さんを倒すためではなく、逃がさないようにするためだ。

最も、剣さんに逃げるような余裕はなさそうだが。

最初に霊矢をばらまいて魔剣でのガードを強いて、その後は魔剣目掛けてひたすら射まくっている。

吸収によりエーテル量が万全だというのは事実だったらしい。

さつきからひたすらエーテル刃を形成しては、爆破している。

溢れそうなエーテルを、無理やり消費している訳だ。

表情も苦しげ。

「こ……んな！力業……で！」

バカなんじゃないのか！キミは！」

「魔物を魔剣と言い張るバカには言われたくないね！」

「なんだと……！」

「なーが自称魔剣使いだ。周囲から魔剣扱いされてないってだけだろうが！」

「ばーか、ばーか！」

「こ……んな……バカに！」

負けて、たまるか！」

剣さんは刃状に形成する手間すら惜しみ、エーテルを噴き出すように排出していく。全身から黄色いエーテルを放出する、見るからにオーバードライブって感じ。

魔剣も何だかヤバげな音を出し、光だしている。

俺のエーテルも恐ろしい速さで減っていく。

光が濁流のように俺の腕から撃ちだされていく。

じいちゃんとの修業でも、ここまで急激にエーテルを吐き出すことはなかった。

威力も弾速も度外視し、ただひたすら連射性を追求した矢を撃ち続ける。

俺たちのエーテル光で、薄暗いはずの森は真昼より明るい。

ははは。

はははは。

はーはっはっはっは！

楽しい！

ランナーズハイのごとく、疲労感とは裏腹に俺のテンションは急上昇。

目の前にむかつくヤツのしかめっ面があるのでなおのことだ。

このまま地獄の果てまで付き合ってもらおうぜ！

苦虫を噛み潰したような顔で、ヤツが呻く。

「…やってられるか！」

「てつめえ！」

野郎！

途中でデュエルを諦めやがった！

ヤツは転がるように避難しつつ、こちらに魔剣をぶん投げる。

魔剣は俺のエーテルを求めるように、自ずからスピードを上げる！

回避？

白刃取り？

否！

接続が断られた今こそ、あの魔剣をぶつ壊すチャンス！

エーテルが欲しいってんなら食らわせてやるぜ！破裂するまでな！

矢を意に介さず迫る魔剣に、矢を射続ける。

もつとだ！

もつと速射性を上げろ！

矢を射る。

オラオラオラ！

折れろ折れろ折れろ！

矢を射る。

矢を射る。

矢を射る。

矢を射る。

矢を射る。

矢を射る。

そして、ポンという音をたてて。

魔剣が女の子に変わった。

咄!?!?!?!?!?!?
嗟に女の子を受けとめた俺は、その勢いに負けぶつ倒れた。
女の子を庇うことを優先したため、頭を強打。ノックアウト。
…流石にこれは勝敗ノーカウントだよな？

他称：呪剣とその被害者

私——剣つるぎ 焜袴こんとうには、時折魔剣の声が聞こえていた。

「もつと。」

「もつとエーテルを。」

声はそれだけを訴えていた。

最初は怯えた。

そして周囲に知らせた。

だが、周囲の反応は冷ややかなものだった。

魔剣が喋るはずがない。

他にそんな報告はされていない。

魔物と意思疎通できるはずがない。

正論だった。

でも、私には確かに声が聞こえていたのだ。

唯一、計画の責任者である鳴坂室長だけが私の話を聞いてくれた。

「第四次実験では剣の魔物化のため複数の異界を使用されている。

どうやら魔物化の際どの異世界から影響を受けるかにより、魔剣にも差異が生まれてくるようだ。

その声が異世界からの影響に起因するものだとするなら、何処かに、剣が意思を持つ異世界があるのかもしれない。」

異世界。

異界の向こう側。

その剣は、未知のボールの向こう側を知るための鍵になるかも知れない――。

鳴坂さんは、本当に嬉しそうにそう言っていた。

それがきつかけだった。

私にとって、魔剣は怖いだけの存在では無くなっていった。

異世界。

未知の世界。

そこには、どんな景色があるのだろうか。

いつか、それを見てみたい。

この剣がその導きとなるなら、もう少し付き合ってみてもいいかと思ったのだ。

この呪われた魔剣と。

あれから数年。

私は魔剣と共に、二つ名で呼ばれるほどの実績を上げ、エーテルを集めてきた。

しかしどれだけ魔物を倒しても、魔剣のテストで異能者たちと戦っても、未だ魔剣の

飢えは納まっていない。

「もつと。」

「もつとエーテルを。」

か細く、儂い、魔剣の訴え。

何時かは、魔剣の飢えが癒される日が来るのだろうか？

何時かは、飢え以外の声を聞くことが出来るだろうか？

何時かは、そんな日が来てほしい。

そのために、私は今日も戦っている。

そして、何時かそんな日が来たら。

この剣と、もつといろんな話ができれば良いなど。

そんな風に思っている。

「神崎玄德。私の魔剣に何をした？」

なんだか怒ってる声が聞こえる。

敵意に体が反応、反射的に反撃をすべく体を起こそうとして、胸に重みを感じ思いとどまる。

そうだ。

俺の上には今ちびっ子がいる。

…魔剣がちびっ子に変わったのだ！

「聞いているのか、神崎玄德？」

剣は手頃な木の枝を杖代わりにしつつ、俺を見下ろすように立っていた。

立ってる剣、寝ている俺、この時点で勝敗は明らかだろう。

「…聞こえてますよ。しかし随分と卑怯な手を使う。

ちびっ子を投げつけるなんて…!

怪我でもしたらどうするんです!」

「ふざけるな。」

剣の怒気が強まる。

「ふざけるなよ神崎玄德!

その子は誰だ、私の魔剣をどうした!

さっさと答えろ!」

おいおいおい。

こいつ、あんな絶妙なタイミングで変身させて俺にブチ当たっておきながら、知らぬ存ぜぬで通す気か!?

ふざけるなはこっちの台詞だ！

だが今は俺の感情よりも、ちびっ子への心配が優先だ。

流石にぶん投げられたちびっ子を受け止める練習なぞしていない。

完全に衝撃を殺して受け止めたはずだが、確認する必要がある。

剣への返答なんざ優先順位は下の下だ！

まずはちびっ子！

「なあ、ちびっ子。

大丈夫だったか、怪我はないか？

どこか痛いところは？」

「あし。」

地面に寝ている俺に抱き着くようにしていたちびっ子が、両腕をついて身を起こす。

「足？足が痛いのか？」

「いや、あしが…」

あしが、うまく作れないんだ…。
「へ…？？」

俺の上に座り込むような態勢になったちびっ子には、足が無かった。
腰から下が煙のように解けている。
というか、心なしか全体が半透明。

…オバケ！

「剣、つるぎーっ！

どういふことなんだこれは！」

「私は知らん！」

キミの仕業なんじゃないのか！」

「俺だって知らんわ！」

「うんやい。」

体の上に乗るちびっ子を見る。

よく考えたら、密着してる状況なのに体温を感じない！

怖い！

むしろヒンヤリする！

お、おとおおおお落ちて着け！

ちびっ子は魔剣が変身した存在だ。人外なのは分かっていた。

ちよつと見た目がオバケっぽいだけ、怖くない…怖くない…。

…でも、あの魔剣は魔物化した剣なんだよな。

普通の魔物は喋らない！

ちびっ子は俺の発言に返事したよな!?

別の意味で怖い！

何者!?

内心ビビリ倒しながら、それを表情に出さないよう懸命に制御する。

「剣！なんか心当たりはないのか！」

剣を魔物化させる実験の成果なんだろ!?!」

「分らない！」

魔物化は極めて早期の段階で抑制されている！

その意味じゃ、自発的行動をしている時点でおかしい！

少なくとも第四次人工優良魔剣製造計画ではこのような現象は確認されていない！」

異界が段階的に巨大化するように、魔物も段階的に強化されていく。

魔物化し、エーテル吸収能力を獲得し、移動能力を得、そして機械的な反応をするようになる。

おそらくこの第二段階で抑制措置が取られているのだろう。

ついでに喋って意思疎通ができる点については、魔物化でも説明できない。

同じ魔物同士ですら、相互に交流や何らかの意思疎通を取っている姿は確認されてい

ない。

最初期の魔物は、ただひたすらエーテルを求めて進むだけだ。

次に、障害物を効率的に避け、より迅速にエーテル源へと進むようになる。

そして十分に育った魔物は、異能者をエーテル吸収のための障害として認識し攻撃するようにならる。

だが、その行動ロジックの単純さから魔物が意思を持つのかどうかは判然としない。

同時に異能者へ攻撃してくるのは、只単に目的地が同じだからに過ぎないと考えられている。

「整理しよう。」

こうしてちびっ子になる前、戦闘中既に自発的行動の兆候があったよな？」

「ああ。靈矢に吸い寄せられるような感覚があった。」

最後の投擲時にも不自然な加速があったように思える。」

「そうか…。」

あとは本人に聞いてみるか。

「なあ、ちびっ子。

自分の名前とか言えるか？自分自身についてどういう認識なんだ？」

「名前はまだない。

そしてわたしは長剣だから、ちびっ子ではない。」

「…やはり、キミが私の魔剣なのか？」

「ああ。それ以外のなにに見えるんだ？」

「どうしてその状態になったか、心当たりはある？」

「たくさんのエーテルのおかげで、意識がはつきりした。」

自己認識は剣寄りなのか。

というか、人化への認識がいまいちなさそう。

会話できるのは良いが、情報源として期待できそうにない。

まあ自分の意識がなぜ生まれどこから来たのかなんて、分からないのが普通か。

気付いたら自分がいる。

俺の転生もそんなだったし。

「…そうか。」

キミが、私の魔剣なのか。」

「やっつと、こうして話せるね。剣。」

「ああ。想像してたのとは少し違うが、やっつとだ。

改めて、剣 焜袴だ。よろしくな。」

「なんだか他人行儀。今までずっと一緒に戦ってきたのに。」

「そうだな。そうだったな。

ずつと、キミの声を聴いていた。

色々と、キミと話したいことがあるんだ…。」

ちびっ子と剣が熱い握手を交わす。

なんか良い話になってる…。

剣とちびっ子が話している間、暫し待つ。

流石にここは空気を読む場面だろう。

大人しく、ちびっ子の椅子として気配を殺しておく。

愛剣との会話っていう良いシーンなんだけど、ちびっ子は未だ俺の上に座ってるんだよな。

締まらない絵面はともかく、そもそもこれ可逆的な変化なのかな。剣に戻れるのか？

「無理だ。まったく方法がわからない。

とはいえ、硬さが変わったわけでない。この状態でも鈍器としてあつかえるはずだ。」

「そういう訳にはいかないでしょうよ……。

ちびっ子振り回して武器にするとか……。」

「やはり真相説明は必要か。

くそっ！魔剣に一体何が起こったんだ!?!」

「それは私が説明しましょう。」

「この声は…!!」

「何者だ！」

「私は通りすがりの森の賢者です。」

剣が振り向いた先。

そこには巨大なフクロウが居た。

というか、フクロウっぽい仮面とヘルメットをつけたロウさんが居た。

「森の賢者…?」

まあいい、何が起こったか分かるなら教えてくれ!」

嘘だろ!?

あの雑な偽装スルーするの!?

確かにフクロウ仮面良くできてるけど、デカいじゃん!
体のサイズおかしじゃん!

「ええ。良いでしょう。」

でもその前に。

足を作るときは一パーツずつ作るのではなく、まず全体の外形を作ってから内部を作りこんでいくと良いですよ。」

「そうなのか。ありがとう森の賢者。」

ロウさんも大概マイペースつすよね…。

そしてちびっ子、お前もなんか疑問に思わないのか…。

…もしかして俺がおかしいのか？

この世界の日本には巨大フクロウが生息している…？

「森の賢者、貴方はいったい…。

そもそも、状況は把握しているのですか？」

「ええ、貴方方の戦いは途中から見えていました。

あれだけ派手に戦っていれば、遠くからでも分かります。

私は森の賢者ですから。」

俺の上で半透明の白い煙が渦を巻き、ちびっ子の腰から先に集まっていく。

ふよふよふよ、と音が鳴り、足が形成されていく。

おおざっぱであつても足があると、一気に幽霊感が薄まった。

「そうですか…。」

私の魔剣に、一体何が起こったんです？」

「まず確認なのですが、その魔剣は魔物なんですよね？」

つまり異世界から滲んだ概念や法則に晒されたことがある。

間違いありませんか？」

「はい。特にこの魔剣は、その影響が濃い可能性もありますが…

それが、何か関係を？」

お、ちびっ子。立つのか？

大丈夫？

もうちよつと重心は前だな。

…よし、良いぞ！

「ええ。剣が人格を持ち人型になる事例には心当たりがあるのです。

私のせか…とある異世界の影響を強く受けたのだとしたら、この変化にも納得が出来ます。」

「他にも、こんな事例があつたんですか!?!」

「ええ。今証拠をお見せしましょう。」

ロウさんはおもむろに翼を広げ、そこに半透明の白い煙が渦を巻き、腕が形成される。

「私が、その証拠です。」

私も異世界の影響を受けて、人の腕を持つことができるようになったのです!」

「なんだって!」

「確かに今の形成方法は魔剣のものに似ている…！」

マジか！

ちよつと聞き捨てならない情報だぞそれは！

ちびっ子の歩行練習を切り上げて、剣に聞く。

「剣！第四次実験の責任者は誰だ！」

「急にどうした？」

休眠研究再検証室の鳴坂室長だが…。」

師匠に電話。

並行して確認。

「ロウさん、確認ですが、これは貴方の世界で見られた現象ですか？」

「…！はい。」

「何？神崎玄德、森の賢者と知り合いだったのか？」

それに貴方の世界……？」

ロウさんと剣が訝し気な視線を向けてくる。

だが説明は後だ。

この件の黒幕はロウさんの世界とこの世界を繋げようとしている。

故に黒幕の計画の痕跡は、ロウさんの世界により生じた異界に残っている可能性が高い。

だがロウさんが現れた異界は俺が討伐してしまったため、どの異界がロウさんの世界との接触で生まれたものか判断するための参考データが存在していなかった。

しかし、魔剣のちびっ子化がロウさんの世界と同じ現象であるというなら。

それは剣の魔物化のために使用された異界が、ロウさんの世界との接触により生じた異界である可能性が非常に高いことを意味する。

そして魔物化実験なんて物騒なモノを行ったのなら、その実験は詳細かつ厳密な監視とデータ採りの中で行われたはずだ。

そこには恐らく、異界のデータも含まれるだろう。

そのデータと照らし合わせれば、通常の異界とロウさん世界との異界を区別し、黒幕の計画進捗を推定できる可能性がある。

意外なところから黒幕への足掛かりが得られるかもしれない！

剣に、電話を投げ渡す。

「木勢師匠だ。とりあえず、例の情報操作の件については説明できるだろう。」

「いや、それより森の賢者について聞きたいことが…。」

「まあまあ、とりあえず電話に出てくれ。」

歓迎するよ、剣 焜燄。」

俺と一緒に、世界を救おうぜ？

束の間のブレイクタイム

前回までのあらすじ。

- 一つ、情報操作に感づいた剣 焜袴は真相を確かめるため炉火市へと飛んだ！
- 一つ、疑惑の人物、神崎玄德と接触、決闘！弾幕ゲーめいた射撃に晒される！
- 一つ、そして愛剣もなんかバグる！その上世界規模の厄ネタに巻き込まれる！

場所は変わって木勢師匠の事務所。

電話口では納得出来なかった剣が、改めて師匠から現状の説明を受けている。

話が進むたび、剣の顔色が悪くなっていく。

緘口令を察してはいても、こうしてドウームズデイ案件について実際に知らされると辛いものがあるのだろう。

「ちよ、ちよつと待ってくれ。

思考が追いつかない。まず、異世界人ってどういうことなんだ。」

「よいしよつと。」

森の賢者改め、ロウと言います。仲良くして下さいね、剣さん。」

「!?!」

一通りの説明が終わったタイミングで、ロウさんが仮面とヘルメットを外す。

どうやら植物で組み上げたフレームに、抜けた羽を固定したものだっただようだ。

…極めてリアルであるため、ヘルメットがフクロウの首の剥製のように見える。

ちよつと怖い。

「ヘルメット…？」

その体の羽や爪も、着ぐるみみたいなものなのか？」

「いえ、こちらは自前のものです。

触ってみます？」

ロウさんが握手するように、右翼を剣に向けて広げる。

剣は、しばらく質感や体温を確かめるようにその翼を触った。

おお…と感動の音が漏れている。

気持ちはよくわかる。ロウさんの羽はとても手触りが良いのだ。

「異世界人と、こうして話が出来るなんてね。

ドゥームズデイについても、大体分かった。

実験データは鳴坂室長から入手出来るだろう。

だが、私にも管轄区域がある。急に炬火市に異動する訳には…。」

「その点は問題ない。上層部からの指令で、すぐに上長から辞令が降りるだろう。

なんでも上層部が引っ越しまで手配しておくとのことだ。」

今日のホテルは既に用意されてるぞ。」

「んな……！」

…分かり、ました。」

そのまま木勢師匠は、上層部から送られた書類群への署名を剣に求める。

機密保持のためとはいえ、上層部手が早いな…。

絶対に逃がさないという、鉄の意志を感じる。

でも勝手に引越しまでするとは、さては炉火市から出す気すらないな？

とりあえずの情報共有ができたので、剣の署名を待つ間ちよつと休憩。

師匠が事情が分からないなりに魔剣ちゃんに気を使ってくれ、お茶を淹れてくれた。デュエルで食いそびれた、剣が持つてきた羊羹を冷蔵庫から取り出す。

味は四種類。

小倉、黒砂糖、紅茶と抹茶。

ささっと切り分けて小皿に盛り、机に持っていく。そこに師匠が淹れた緑茶と和菓子切を人数分運ぶ。地味に和菓子切が人数分あるの、すごいな。持つて行って、はたと気づく。

魔剣ちゃんは物食べれるのか？

「私の知る事例では可能ですけれど…。」

「当人の感覚的にはどうなのでしょう。」

「エーテルではなく、これをたべるの？」

はい、あーん。

魔剣ちゃんの口元に、切った羊羹を運ぶ。ばぐ。もっしや。

危なく和菓子切ごと噛み切る勢이었다。

「あむ。あむあむあむ。」

不思議な気分。初めてなのに、これがあまいという感覚だとわかる。「興味深いですね。」

そうした感覚は何処から入手したものなのか…。」

「たぶん剣。」

剣とわたしの間には、エーテルを還元するための相互リンクがあった。

そのリンクを介して、色々と情報を入手していた…のだと思う。

「この体のモデルも剣。」

ふむ？

それにしちやあちよつと違和感がある。

確かに魔剣ちゃんど剣は姉妹のように似ているが、同じではない。

参考にしたのが今の剣なら、それそのままの姿になりそうなものだが。

実際には十歳前後、剣よりも若い年齢・身長である。

「この姿は部屋に飾ってあった写真を元に、剣が小さかったところをモデルにした。

このくらいの大きさの体が、比較的に作りやすかった。」

「人間型に変化する前から、周囲の風景や情報を入手できたわけですか…。」

「変化前から意識はあったってことか…。次は抹茶味だよ。」

はい、あーん。

魔剣ちゃんの口元に抹茶味の羊羹を差し出す。

ばぐ。もつしや。

勢い良く食いつく。そして心なしか緩む表情。

「あむ。あまい。

意識自体はあった。

でも当時はエーテル不足により、はつきりとした意識ではなかった。

今は遡って、記憶のように過去を想起できる。つくられたときから今まで、はつきりと。」

「なるほど、なるほど。もう少し詳しく聞かせてもらっても良いですか？」

「えっと…。つくられたときってのは、魔物化したときで良いのかな？」

ロウさんと俺で、魔剣ちゃんを挟むようにしつつ質問していく。

ロウさんは多分学術的興味。異世界じゃ学者さんだったとのことだし。

俺は純粹なる下心からだ。魔劍ちゃんを口説くきつかけづくりである。黒砂糖味の羊羹の前にお茶もどうぞ、と魔劍ちゃんに薦めておく。

「さっきのは抹茶。これも、お茶なのか。

…。

「こつちは苦いな。にがい…。」

そこにすかさず羊羹。

はい、あーん。

ばぐ。もっしやもっしや。

「あむ。あまい。

…これが、美味しいという感覚…?」

もしやもしやと食べる魔劍ちゃんがやたら可愛い。

雛鳥にエサを渡す親鳥の気分である。

このままウチの子に出来ないものか。

「むむ。むむむ…。」

ロウさんが俺と魔剣ちゃんの間で視線をさ迷わせる。

俺の下心を気取られたか。

ロウさんの口元にも羊羹を運んで誤魔化す。

はい、あーん。

「ロウさんも羊羹どうぞ。」

「あ、あーん…?」

もしやもしやもしや。

もつしやもつしや。

二人の口元に羊羹を運び続ける。

「…何やってるんだ、神崎玄德？」

「劍。羊羹、ごちそうさまです。」

「劍さん、羊羹頂いてます。」

「あむあむあむ。劍、話は終わったの？」

しばらくして、書類への署名と手続きを終えた劍が戻ってくる。

ついでに第四次実験の責任者にも電話して、情報開示の許可を取り付けてきていた。
有能。

「羊羹を食べながら、魔剣ちゃんに色々と話聞いていたところだ。」
「色々に興味深い話を聞きました。」

「剣、羊羹は美味しいね。」

「いや、そういうことではなく…。」

まあキミが楽しそうなら、それはそれで良いんだが。

というか、物を食べることも出来るのか。」

「とりあえず、そこ座ってくれ。師匠がお茶淹れてくれたからよ。」

お前がくれたヤツだが、羊羹も切っておいた。」

「魔剣ちゃんについて、分かった情報を共有しておきましょう。剣さん。」

やはり私が知る事例と似ていました。」

師匠が二杯目の煎茶を淹れてくれたのでそれを運び、ロウさんの音頭で情報共有と真相説明が開始。

剣が知る第四次人工優良魔剣製造計画の詳細、そしてロウさんの異世界知識をすり合わせて、魔剣ちゃんに起こった現象を突き止めるのだ。

「私には、その子が元は魔剣だったと言われても信じられないくらいなんだがな…。」

「失礼な。わたしはどこからどうみても、立派な剣。」

俺たちも、剣から女の子に変わった瞬間を見ていなければ、師匠と同じ意見だったろう。

無機物が女の子になる事例など、聞いたこともない。

これは剣が知る限り、第四次実験でも同様だ。

だが剣には、以前から魔剣の声が聞こえていたのだという。

つまり、あの戦いというより実験時に何らかのきっかけがあったということだろうか。

「第四次実験では、魔物化させるために異界に古刀や名剣を置き、魔物化が確認された段階で回収する。」

「おそらくそのタイミングで、私の世界の法則に汚染されたのだと思います。」

先ほど玄徳くんから聞いた、エーテル過干渉媒体の製造法……。それと対応するポジシオンに、私の世界では人化現象がありました。長年エーテルに晒されたモノが意思を持ち、人の姿を得る。そんな現象です。」

「こつちでいう、付喪神みたいなものですかね。あれはフィクションですけれど。」

「だがその条件なら、魔物はエーテルと良く接触するわけだし、他にも事例がありそうなものだが……？」

「木勢さんの疑問ももつともです。」

ですが……これはあくまでまだ仮説なのであまり言いたくはないのですが、魔物化や異界と、この世界に滲んだ他世界の法則は相反するものなのではないでしょうか。

相反するはずの魔物化が抑制されたからこそ、他世界の法則である人化現象が適応されたのではないかと。」

「？」

「すいません、魔剣ちゃんが理解できてないのももう少し詳しくお願いします。」

ついでに言うと、俺も理解できていない。

「この世界の法則である魔物化により、他世界の法則の表出が妨害されているのではないかとという仮説です。」

私の世界にはこちらで言う魔物も異界も存在しません。異世界の法則が滲んだ空間が異界や魔物に変ずるとするのは、この世界独自の法則です。」

「それは、本当なのか？ そうだとすると、滲んだ異世界の法則は……。」

「そのまま周囲の地域に適応されます。」

「つまり、不意に物理法則やら何やらが改変されるってことですか……！」

「はい。異世界との干渉により、予兆なく異世界の現象や化学反応・物理事象が追加発生するようになるのです。」

元々は、人化現象も他世界の法則です。もうすっかり、私の世界全体で発生するようになってしまいました……。」

それは、異界に正しい対処が出来なかった場合と同じ結果だ。

異界や魔物は、この世界に滲んだ異世界のモノ・元素・そして概念や法則により生じ、拡大し、そして解消されなかった場合。

異界は破裂し、この世界全体に、滲んだ異世界の法則が混じることとなる。

「私は異世界からの干渉について研究し、その影響を最小化すべく活動していました。」

そしてこの世界との接続の予兆を感知し、阻害を試み、失敗。

目の前に開いたワームホールに飲み込まれる形で、この世界へと現れたのです。」

「俺たち異能者の、同業者みたいなものだったんですね……。」

「ええ。こちらの異能者同様、向こうでも他世界からの干渉に対応するための研究はさ

かんでした。

そうした研究の中では、他世界間での法則の相性、あるいは混交した際どちらが優先されるのかの分類もありました。

その研究に沿って考えれば、他の世界の法則とこの世界が混交したとき、絶対的に優先されるのが異界化であると言えます。」

「顕性遺伝と潜在遺伝みたいなもの……ですかね？」

「てつきり世界間で干渉が起こった際の異界生成は普遍的な法則だと思っていたんだが……それが、この世界の独自の法則だった。」

「そして異世界からの干渉で常に異界が生じているということは、異界化が優先されやすい・顕性ドミナントの反応である……ってことか。」

「そして異界化と魔物化が同一系統の性質であるなら、普段は私の世界の法則より、魔物化が優先され人化現象は起こっていないなかった……という仮説です。」

「現状では、わたしに起こったのはその人化現象という認識でいいのでは。」

わたしとしては、刃が無くなってしまったから取り戻す術を教えてください。」

「魔剣ちゃんはなんといいかブレないね…。」

「人化現象そのものは不可逆です。私の世界でも対処する術は発見されていません。

ですが本来の機能は維持される事例が多いので、フォームチェンジして剣に戻るはずです。」

「そうか。」

「……………。どうやって?」

「…分らんな。」

「…昔の姿を思い起こす?」

「変身ポーズを取るとか?」

上から、木勢師匠、剣、俺の案だ。

剣は魔剣ちゃんの手を握り、言う。

「私たちはこの三年、一緒に戦ってきただろうか?」

そのときのことを思い描けば、行けるんじゃないか?」

「むん!」

！
ふよん、と音が鳴ったかと思うと剣の手に魔剣がある。

「戻れた。」

しかも喋る！

フォームチェンジってこんな感じなのか！

…でもなんか、元の魔剣と違う様な。

「4th」の刻印が消えている…？」

「あれは後から追加されたものだから。わたしがつくられたときにはついてなかった。」

「んん？もしかして、つくられたときから記憶があるって言うていたのは…。」

「鍛冶師によつて作られたときまで、遡れる。」

つまり、まさかの数百歳。

ぶつちぎりの年上だった。

ふよん、と音を立て、人型に戻った魔剣さんが俺の隣に座る。

「これで問題は解決したね。

もう少し羊羹が食べたい。いい？」

首を傾げ、俺の顔を見ながら魔剣さんが言う。

今すぐ追加持つてきますね！

劍との決闘から数日。

師匠とロウさんは上層部に呼び出され、異界討伐は「街に慣れるためにも私がやる」と劍にとられ。

上層部から待機命令が出されている俺は、やることもなく家で特撮を見ていた。

やることもないのだが、やっぱり落ち着かない。

世界の危機かも知れないってのに、何もできないのはもどかしいものだ。

世間は間近に迫ったゴールデンウィークに沸いているが、俺の心は盛り上がらない。

家では出来る修業も限られてしまう。本来なら走り込みと一緒に、人が踏み入らない森で異能の訓練もする予定だったのだが、黒幕の目がどこにあるか分からない現状では避けるべき選択肢だろう。

そんなわけで、家で筋トレや異能訓練をしつつ、特撮を見ているわけだ。

体内のエネルギーに干渉すれば、体調を整えるのと同じ感覚で、狙った筋肉を動かし筋

トレを行うこともできる。EMSベルトみたいなものだ。

異能の精密動作訓練にもなつて一石二鳥。…ちよつと汗臭くなるのが玉に瑕だけども。

うーむ。

修業したい。

もしくは働きたい。

新しい修行法でも開発するかな…。でもなあ。

じいちゃん家では暇さえあれば修業か異能知識収集をしていたので、独り暮らししてからはもう少し見分を広げろ、と修業のやりすぎを止められている。

その意向を無視するのもなあ…。

一応、独り暮らししてから、じいちゃんが規定した基礎トレーニングをこなしている。だがすぐ終わっちゃうんだよなあ…。

上裸で筋肉をピクピクさせつつ思い悩んでいると、チャイムがなる。

誰だろう。

ロウさんならベランダから入ってくるだろうし、師匠は上層部との折衝がまだ終わらないだろう。

剣はそもそも俺の家を知らない。ただのセールスなんかは、管理人さんが追い払ってくれるはずだ。

インターホンの画面には、一階エントランスに居る鴻上学園の生徒を映していた。
とうかクラスメートの人である。

「はい、神崎玄徳です。」

「神崎くん？えっと、クラスメートの王生桜雲いくるみです。今日は神崎くんが休んでた間のプリントを届けに来ました。」

学校。

……………。

完つ全に忘れてた。

ロウさんとの初遭遇の日に飛び出して、何の偽装工作もしてねえや。

わりとよくあるガールミーツボーイ

前回のあらすじ。

一つ、ロウさんの世界は、他世界の影響で物理法則や怪現象がドンドン増えてくSC
P財団世界みたいな恐ろしい所！

一つ、魔物娘化現象も、本作のオマージュ素の世界との接触で追加されたもの！

一つ、つまり魔物娘・魔物娘化現象はインスパイア素の世界とほぼ同じだけど、ロウ
さんの世界とⅡじゃないよ！

◆異界云々の話はただの終盤の伏線だから今は忘れてくれて構わないよ！

「王生さん、ちよつと手伝つて貰つてもいい?」

「はい。構いませんよ、黒井先生。」

「いやー、この歳になると書類運ぶのも大変でねー…。」

「また重たいですね、この段ボール…。」

私、王生 桜雲は担任の黒井先生と共に廊下を歩いていた。

運ぶことになった幾つかのダンボールには、書類が満載されている。

多分、この前行つた新年度恒例学力確認テストの答案だろう。

春休み空けの浮ついた気分を沈ませると評判の、鴻上学園恒例行事だ。

「あつ王生さん、また先生の手伝い?俺も手伝おつか?」

「駄目ですよ、先生。人が良いからつて、毎度王生さんに手伝わせて。」

転校生の件でも、王生さんに手伝わせてたでしよ。」

「まあ今はちよつと荷物運ぶだけだし、大丈夫だよ。」

クラスメートが話かけてきて、運搬の手伝いを申し出てくれる。でも男子に重い荷物を運ばせるのは気が引けるので、辞退。

「ふう。助かったよ、王生さん。いつもありがとう。」

「いえいえ、このくらいならお安い御用です！私鍛えてますから！」

「いやあ王生さんはテストの成績も良かったし、品行方正。

今年は奨学金、もうワンランク上げれるんじゃない？」

「でも、部活とかで実績出したわけじゃないですし。」

「そもそも学費カットで十分なくらい助かってます。」

「いやいや、そこで遠慮する必要はないと思うよ？」

「奨学金は財団から出てるし、あそこのモットーは知ってるでしょ？」

「『未来への投資、そのための礎』ってアレですか？」

「そうそう、それぞれ。まあ申請したくなったら言つてよ。私からも一筆添えとくからや。」

この学園では、優良成績者や特殊技能を持った生徒に対して学費の補助や免除を行っている。

各いう私も、ありがたいことに三分の一の学費で学ばせてもらっている。奨学金制度がある学校は数多いが、この学校では段階的な学費免除制度があり、しかも本人の成績により半年単位で上下する。

今回行った学力確認テストもその査定に影響するので、みんな必死に勉強する。

「…そういうえば神崎玄德くん、大丈夫だったんですかね？」

テストの日居ませんでしたけど、ちゃんと後日の再試験は受けられたんでしょうか。」

「…んー。また彼の話？」

実は彼、学費免除制度の対象じゃないんだ。財団の方から別のお金貰ってるらしいんだよね。

校長先生からも、欠席や早退のお目こぼしを頼まれたから特殊技能枠か何かで海外遠征とかもあるんだと思う。」

「え？でも体育は欠席してましたよね。アスリート枠ではないんじゃない？」

「別に運動選手じゃなくても海外での数学オリンピックとか、まあ色々あるでしょ。」

今回もそういうのの一卷での欠席らしいけど、早退してからそのまま休みつてなるとちよつと心配だよね…。」

「先生の方から、本人に電話したりしないんですか？」

「なんでも今は財団経由で契約したアパートに住んでるんだって。電話にはその管理人さんが出たよ。」

「…その住所とか、分かります？」

ほら、ゴールデンウィークの授業日の日程とか、溜まったプリントとか渡さないといけませんし。」

「うーん、確かにそれはそうなんだけど。」

流石に、個人情報保護で教えられないかな。」

宛てが外れてしまった。

どうしようかな…。

悩む私に後輩が話しかけてきたので、結果を報告。

「桜先輩、どうでした？」

「小鴉ちゃん、駄目だったよ…。」

「やつぱり。そういうところ、この学校厳しいですからね。」

しかしびびくりしましたよ。あの桜先輩が男の住所調べたいーっなんて言い出したときは。

やつぱりアレですか？一目惚れのな？」

「いや、そういう訳じゃないよ？」

ただ…実は私、神崎くんと同じ小学校に居たんだ。まあ神崎くんはすぐ転校しちゃったんだけど…。」

「…それはつまり、一目惚れではなく、幼馴染の運命の再会！的な！」

神崎くんの方は覚えてなさそうだったけどね。

ちよつと心配で。

クラスでは体はもう治ったって言ってたけど、体育にも参加していなかったし…。」

「なーるほど。そういう理由でしたか…。」

「小鴉ちゃん、何か他に住所を知る方法はない？お願い！」

「桜先輩に頼まれちゃうと、否とは言えませんが、ねえ…。」

…実は私、先生の言う財団お抱えのアパートにちよつと心当たりがあります。」

「ほんとー！」

「まあ間違っているかもしれないんですけど、コーポ赤城っていう所です。」
「合ってるかもしれないんですよ？ありがとう小鴉ちゃん！行ってみるよ！」
「行っちゃった。：教えて、良かったのかな。」

「コーポ赤城」の郵便受けには神崎の名前があつた。503号室。

インターホンを押し、部屋番号で呼び出す。

「はい、神崎玄徳です。」

「神崎くん？えっと、クラスメートの王生桜雲です。今日は神崎くんが休んでた間のプリントを届けに来ました。」

「あ……はい。少々お待ちください。」

とりあえず、開けるので上がってきてください。」

神崎くん本人が出た。

声を聞く限りは元気そう。

神崎くんが早退した日は、妙な音かして振り返ったら、みるみる神崎くんの顔色が悪くなっていくのが見えたので何かの発作かと心配していたのだが、大丈夫そうだ。

目的は達成できたと言って良い。

しかし、上がってくれと言われてしまった。

開くオートロックのドア。

…今更だけど、男子の家に一人で行くってちよつと緊張する。

まあ多分玄関でプリント渡して終わりなんだろうけど。

「わざわざプリント届けてくれてありがとうございます！」

時間あるなら、ちよつとお茶でも飲んでいかない？」

「あつはい。」

「どうぞどうぞ、上がってて〜。」

お茶に誘われたので、中に入る。

二週間ぶりにあつた神崎くんは顔色も良く、声にも張りがある。

上はシャツ一枚、下はスポーツウエアという活動的な装い。

入れてもらった神崎くんの部屋は、なんだか良いニオイがした。

「…今アロマ焚いてるんだけど、気になる？消そうか？」

「大丈夫。むしろ落ち着く良い香りだと思っよ。」

「（セーフ！消臭が間に合っつてよかつたぜ…！）」

「そこ座ってて。」

紅茶と緑茶があるけど、どっちが良い？」

「紅茶でお願いします。」

「はい。」

見ると、テーブルに置かれた洒落た灰受の上でアロマスティックが燃えている。

神崎くんの部屋は物が少なく、元々の広さと相まってとても広く見える。

家具もタンスやテレビの他には、ノートパソコンや隅にまとめられたトレーニンググッズくらいしかない。

テーブルはあるが、椅子は二脚のみ。

リビングの本棚にも空きが多く、和綴じの本とBlurayBoxなどが入っていた。

「お待たせ。ミルクはどうする？」

「ありがとう神崎くん。一個貰おうかな。」

お茶請けとして、いくつかのお菓子も添えてくれた。

…紅茶も美味しい！

自然な流れでもてなされてしまった。

神崎くん、男子力高いなあ…。

「今日はわざわざプリントありがとうね。

…部屋見渡してたけど、何か気になる？」

「…！ごめん、不躰だったかな。」

「いやいや、別に気にしてないよ。

独り暮らしとは言え、この殺風景さは自分でもどうかと思ってるし。」

「へ？神崎くん独り暮らしなの？」

「ああ。」

神崎くんは軽く流しているけど、この広さに独り暮らしってどういうことなんだろう。

…というか、神崎くんはあまりに無防備すぎないだろうか。

男子の独り暮らしに、ホイホイ異性を招き入れるなんて。

しかも羽織った薄いシャツが汗で体に張り付き、体のラインがはつきりと見える。
…良い筋肉。

すらつとしているため制服では気づけなかったが、神崎くんの体は良く絞られた良い体をしている。

脂肪が少なく、筋肉の隆起が見える。着やせするタイプなのだろう。

良い…。

つい透けたボデイラインを目で追ってしまい、慌てて逸らす。

男子はこういう視線に敏感だと聞く。嫌われるような真似はしたくない。

もしかしたら、こうして家に招きいれてくれたのは昔のことを覚えていてくれていたからかも知れない。

…そうだったら嬉しいな。

とりあえずプリントを渡し、ゴールデンウィークの学校予定などを伝える。

クラスでも少し話したことはあるのに、こうして二人きりで話すとなると緊張してしまふ。

「ゴールデンウィークにも、登校日あったのか…。

教えてくれて助かったよ。」

「どう？登校日には学校来れそう？」

体の調子が悪いなら、無理しない方が良いと思うけど…。」

「大丈夫。前日に早退しちゃったから誤解させたかもしれないけど、今回の欠席は親族関係の用事の所為でね…。」

その用事の進捗に因るけど、多分行けると思う。

クラスでは病弱キャラみたいになってたけど、体は元気だよ。

ほら、そこそこ筋肉だってあるでしょ？」

「…おおっ。」

…しまった！

思わず感嘆の声が漏れてしまう。

神崎くんがポーズをとって強調したからとは言え、男子の目の前で取るリアクションとしては不味いかもしれない！

だが予想に反し、神崎くんは嫌悪というより喜びのリアクション。

「ふふん。結構な筋肉でしょう。」

…でも、王生さんも中々のもの持つてみたいだね？」

「えっと、うん。鍛えているからね。」

「なんかスポーツやってるの？」

「ううん。でも筋トレとかが好きで。バイトとかもやってるし、そんなしつかり出来るわけじゃないんだけど…。」

「いやいや、良い体してると思うよ。……いや、変な意味じゃなくてね!？」

神崎くと二人、しばらく筋トレ談義で盛り上がる。

神崎くんはトレーニング理論にかなり詳しく、話が弾んだし参考になる点多々あった。

思わぬ共通の話題。

まさか男子とここまで筋トレ話が出来るとは思わなかった…。

「そういえばリビングの隅にいくつも見慣れないトレーニンググッズがあったけど、あれは何を鍛えるものなの？」

「ほう。」

「…?」

「……いや、あれは改造品みたいなものでね。俺の身長体重に合わせてあるんだ。見慣

れないのはその所為じゃないかな？」

…なんだろう。

一瞬、神崎くんの声と表情が硬くなったような…？
学校でも聞いたことがない、驚くほど冷たい声。

「おっと。紅茶が無くなってたね。

淹れてこよう。確かアイステイーしかなかったけど、いいかな。」

「あ、お構いなく…って、もうこんな時間？」

「ごめん、私そろそろバイトの時間だ。」

「……………そりや残念。長々引き留めて悪かったよ。」

「ううん、私も楽しかったから。」

「じゃあ、また、ね。神崎くん。この続きは学校で！」

「ああ、またね。」

神崎くんは笑顔で見送ってくれた。

「……………」

神崎くんの無事を確かめられた。

昔のことはやっぱり覚えてなかったみただけど、また仲良くなれた。

嬉しくなった私は、バイト先に行くまでの間にちよつと寄り道をすることにした。

この辺りにはたまにかまう、私が景虎と呼んでいる野良猫がいるのだ。その子と少し遊ぼうと思った。

それが良くなかったのかも知れない。

迷った。

正確に言えば、今どの道を歩いているか分からない。

…ちよつと、おかしい。

中学時代から三年はこの街に住んでいるのだ。

再開発の激しい繁華街ならともかく、住宅街のこの辺りで迷うとは。

神崎くんと話せて浮かれてたのかな、なんて思いながら、スマホを取り出す。

圏外。

「…えっ…?」

おかしい。

はつとして、周囲を見渡す。

そうだ、おかしい!

住宅街、それも放課後の時間帯。黄昏時。

普段なら学校や塾帰りの学生、或いは主夫の人とすれ違うのに。

さつきから、誰ともすれ違ってない!

今この道にも、誰もいない！

計画的に作られ、碁盤の目のように区切られた炉火市では、道路もかなり先まで見通せる。

それにも関わらず、人っ子一人いないのだ！

空を飛ぶカラスの姿すらない！

「……！」

少し怖くなった私は、思わず走り出す。

がたん。がたん。がたん。

「……！」

しばらく走ると、物音。

少し先にある、直角に交わる四ツ辻。

それを曲がった所からだ。

物音一つ、鳥の声一つないこの場所に、石をぶつけ合わせるような音が響く。

「あ、あのっ！誰か、いますか…？」

返事はない。

四ツ辻の向こうから、西日に照らされた影が伸びる。

細長い影。

カクカクと揺れ、少しずつ影が進んでいく。

…一体、なんなんだろう。

影は、進み続ける。

「…へ？」

姿を現した影は、予想外のものだった。

バス停。

それに白い短い手足が生えたものが、歩いている。

「…えつと。なにこれ？」

その声を聞きつけたのか、バス停の動きが止まる。

そして物音も止まる。

あの音は、バス停の土台のコンクリとアスファルトがぶつかり合う音だった。
なんなんだろう、この歩くバス停…？

「……！」

驚いた。

目を放していなかったのに、気づくとバス停の向きが変わり、こちらに正面を向いている。

銅鑼町二丁目の文字。

……やはり、おかしい。あれだけ歩いたのに、神崎くんの家から殆ど離れていない。

そして。

がたん。

がたんがたんがたん！

バス停が、こちらに向かって前進を始めた。

「はっ、はっ、はっ…。」

一体、何なのこれ!？」

息を吐く、足を着く。

息を吸う、足を蹴りだす。

恐怖をこらえ意識的に呼吸を保ちつつ、必死で走る。

ちらりと後ろを見ると、バス停がまだ追ってきていた。

それどころか追手が増えている。

路上に停まっていたバイク。

一軒家の庭に置かれていた鉢植え。

果ては、猫避けのペットボトルまで。

大きささまさまの物が、白い手足を生やしこちらを追いかけてくる。

アレらが何かは分からないが、捕まったら碌な目に合わないことだけは分かる。少なくとも、バイクの重量で体当たりされるだけで骨は折るだろう。

がたんがたんがたん！

がたがたごつとんずつだんずだん！

「また、増えたあ……！」

しかも前から近づいてくるヤツが見える。

途中にある四ツ辻を曲がって、走り続ける。

追手の手足は短く、生えている位置もまちまちだ。

最初に見たバス停のように、歩く度に道路にぶつかっている追手も多い。

だがその度に発生する音や、砕ける部品が恐怖を煽る。

追い付かれたら、私もあんな風に砕かれてしまうのかも……！

「……しまった！」

不味い！

後ろの音に気を取られて、前の辻に西から落ちるシルエットに気づかなかつた！
速度を落とすわけにも行かない今、横から突つ込まれたら……！

「逃げ……！」

「そのまま走れ！」

「え……！その声は！」

勢いそのまま、辻を駆け抜ける。

そして、すれ違うように西側から人影が飛び出す。

思わず、振り返って叫ぶ！

「危ない、神崎くん！」

「いいや、この程度なら問題ないよ。」

「神崎流退魔術！ 霊力弓、雨霧・双腕！」

そして振り返った視界の先。

西日で赤く染まった道が、瞬間的に白光で埋め尽くされる。

そして、パキンという何かが輝割れるような音と共に、空気が変わる。

カラスの声が耳に入り、周りを見渡すと見覚えのある景色。

「…終わった、の？」

「ああ、そうだ。」

早い再会になったね、王生さん？」

振り返った神崎くんは、あの時と同じ、驚くほど硬く冷たい声だった。